
俺の異世界日記／私が愛した幻影

なつや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の異世界日記／私が愛した幻影

【Nコード】

N5838I

【作者名】

なつや

【あらすじ】

俺の名前はリョウ・イスルギ……日本的に言い直すと石動涼。どこにでもいる23歳の社会人（派遣社員）だった筈なんだが、俺は神隠しに会ってしまったようだ。

なんというかついに俺もか、と言う感覚があった。

何故かと言えば俺の住んでいた街では俺の弟、石動進を筆頭として何人も突然行方不明になってしまうという事件が頻発しているからだ。

他にも自動車事故が頻発したり、連続猟奇殺人事件が起きたりとか

なり街そのものがヤバイ感じだった。

俺はこの世界から元の世界に帰還するのか、それともこの世界で骨を埋めてしまうのか。

それは今の所俺には見当もつかない。

※この小説は異世界転移でチートな道具を持った元派遣社員な主人公が転移先の世界のヒロインに捕まって右往左往する物語です。

1. 神隠しの辿り着く先／壊れた心がみる幻影

< Side RYOU

俺の名前はリョウ・イスルギ……日本的に言い直すと石動涼。

どこにでもいる23歳の社会人（派遣社員）だった筈なんだが、俺は神隠しに会ってしまったようだ。

なんというか、ついに俺もか、と言う感覚があった。

何故かと言えば、俺の住んでいた街では俺の弟、石動進を筆頭として何人も突然行方不明になってしまうという事件が頻発しているからだ。

他にも自動車事故が頻発したり、連続猟奇殺人事件が起きたりとかなり街そのものがヤバイ感じだった。

さて、俺の現状を説明しよう。

俺は突然現れた黄色いモツコスもどき（青い部分が全部黄色のKOS—MOS）にワケのわからない事をgdgd言われて荷物を持たされて気がついたら夜の森にいた。

何を言ってるか分からないだろうが俺も何を言っているのか判らない。

取り敢えず俺が持たされたのは3つだけだ。

”無限”と裏地にびっしり書かれたバンダナ。

メガテンに出てきそうなハンドヘルドコンピュータ

そしてエクスカリ”パー”（仮名）である。

注意して欲しい、エクスカリ”バー”ではなく、エクスカリ”パー”である。

武器からはとんでもない威厳っぽい何かを感じるがあくまでもエクスカリ”パー”である。

投げる以外にどう扱えと？

木に叩き付けても切り傷一つつかないこれをどうしろと？

防御には使えるかもしれないが、攻撃には寧ろ足手纏い：他の武器を使うかした方が利口だ。

それ以外に俺が持つ物と言え、今着ているグレーのスーツ一式と通勤カバンぐらいである。

歩きながら現状と今まで身近で起きた事件を考える。

「もしかして、進のヤツも同じ状況に陥ったのか…？」

そう考えるのが非常に妥当な者だと思える。

「と、するならばアイツ：相当ヤバイだろうな」

石動進、俺の弟は非常に残念な事にデキが悪いという部類の人間だ。だが、だからといって本当に使えない人間という訳ではない。

ありとあらゆる意味で才能がない人間だが、それでもただ一つ誰にも負けないモノがある。

不屈の心。

どんな事であろうと諦めずに挑戦し続ける事が出来る人間、それが俺の自慢の弟だ。

それに引き換え、俺は弟と比較して良く『平凡』と呼ばれる。

万事において『それなり』にこなせる俺であるが、だからこそ才気

ある人間や努力できる人間には叶わないのだ。

やる気の問題だ、と上司にも言われた事があるがソレは置いておく。

「さて、さしあたってこの道の行き着く先はどこなのだろうかね？」

フアンタジ

「ご都合主義の基本としては、この辺りで美女、美少女の悲鳴の一つでも聞こえそうな者だけど」

『GYAAAAA!!!』

聞こえてきたのは野太い人外の悲鳴だった。

「ふむ、流石に気になるがどうするべきかねえ？」

等と考えていると次の瞬間木々の向こうで激しい剣戟の音がした。

「アレか、中世とか江戸時代とかそんな感じか？」

殺陣を見るのは好きだが殺し合いは勘弁だなあ…。

いやいやそれよりも俺がこの後どうするかだな」

選択肢 A. 様子を見るためこっそりと移動する。

選択肢 B. 君子危うきに云々という訳で逃げる。

考えている間に、剣戟の音と何か重い物がノシノシと歩く音が聞こえる。

そして、誰かの怒声と金属が金属を思いっきり叩きつける音…その後。

「ぐあああああ!!」

「い、いやああああ! アラン!!」

男の絶叫と女の悲鳴が聞こえた。

「……まあ、アレだ、助力できそうなら助けるって方向で」

呟いてから俺は木々を遮蔽物としながら声の元へ出来るだけ素早く近付く。

「（この辺りの技能、学生時代にサバゲーで培ってて良かったわ）」

ちなみに俺はサバゲーでは『アサシン石動』なんて妙なあだ名で呼ばれていた事がある。

まあ、アレだ、射程の短いエアガンしか所有してなかったのが必然的に至近距離までこっそり近付いて攻撃できる技能が必須だったのだ、俺には。

等と考えながら進み、木の陰から様子を見る。

「アラン！！アラン！！」

呆然としていた少女だったが直ぐに気を取り直して、直ぐ傍の死体に駆け寄った。

死体、そう死体である。

最早ピクリとも動かず、呼びかけにも応えられない存在だ。

「……」

一瞬我が目を疑い、もう一度目を凝らす。
そこに居たのは…

『%&#\$%&、○\$%&、\$#!』

「い、いやあ!!」

胴体が泣き別れた男：弟、石動進によく似た人物と、その幼馴染の沢崎浩太：の女性版と思われる人物だった。

男の方は金属製のブレストプレートと籠手や具足、片手には1m未満の金属製の剣のみが握られていた。

女の方は多少際どい部分のある衣装と短いマントを羽織、片手には木製の杖を握っている。

更にもう1人：いや、一匹？

緑の肌をしたごつごつとした肌とやや肥満体の腹を見せる醜惡なブタ面男：いわゆるオークって感じの変なの。

片手にはやたらゴツくて長く、紅いモノが滴れている長剣を握っている。

ついでにやたら大きなアレも股間から聳え立っているなのでこの後にあの野郎が何をしようとしているかは手に取るように判る。

と言うか判りやすいお約束だ。

ちなみに少女の方は気が動転していて倒れた男にしか意識が向いていない。

こうなれば現代日本人的紳士としてこのように事態にどうすれば良いかと言えば…。

闘うか、戦うか、たたかうか…だ。

逃げるがないって？

そりゃそうだろう：此処で逃げたら後で後悔するのは間違いないしな。

それに：手遅れではあるがまだ遺された者もいるしな。

とりあえず投げるか。

そう思ってエクスカリパーを引き抜き、投げると自分が予想していたよりも見事なフォームで俺はエクスカリパーをオークに向かって

投げつけていた。

「……あれ？」

投げつけたエクスカリパーは見事にまっすぐとオークの首を引き裂き、そして何故か手元に湧いて戻ってきた。

驚くほどさっくりと、華麗に引き裂き、突然戻ってきて俺は吃驚仰天だ。

ほら、女の子の方も口をあんぐりと開けて呆然としているし。

でも投げた俺の方がびっくりだよ。

「あ…ああ…う、うわあああああ！！」

少女が泣き始めてしまう。

正直、どうしたもんかね？

慰めの言葉を浮かべようにも、先ほどのアレのせいで微妙に声を掛けづらい。

ああ、そうだ今のうちにComp（仮称）のチェックでもしておくか。

起動スイッチを探し当てて押してみると、液晶パネルの画面に明かりが灯り、文字が表示される。

『General Arm Terminal System』

「G, A, T, Sか…微妙にゴロが合わないな。

Terminalの部分だけでも一字足してGateSystemと呼ぶか？」

本当に俺を元の世界に運ぶ門にでもなってくれれば嬉しいんだけどねえ。

けど、折角考えたけどC o m pの方がわかりやすいし、知名度が高いのでやっぱりC o m pと呼ぼう。
考えながら画面を見ていると、基本機能の利用ガイドの動画が始まった。

『ナノセーフシステム』

要するに、ナノサイズまで分解、再結合して手持ちの物品をコンピュータで管理するシステムらしい。

細かい原理は良くわからないが、とりあえずC o m pが金庫代わりになると言う事だ。

フアンタジー
ご都合主義だと思って全力で見逃そう。

ナノサイズに分解した物品は所有者の能力次第で運べる量が決まるらしい。

とりあえず、重すぎるのは無理という事だ。

後、生き物の類もダメだとか。

確実に死んでしまうようだ。

『次元ネット』

極普通のインターネットを見られる機能……だと思っただが、どうやら元の世界のインターネットに接続できる模様。

あれか、フアンタジーワールドにもこの世界の技術をもってこいとか、そういう事か？

てか、コレだけで俺S U G E E E E ! できるよね？

『ステータスディスプレイ』

俺の健康状態の表示や能力の数値化を行い表示するらしい。
どういう原理だ？

ちなみに、俺はどうやら精神状態が『やや無気力』身体状況が『十円はげ』らしい……って、何時の間にできた十円はげ！？

ニート時代か！？

技能欄とかあったけど今はまだいいや。

『マッピングシステム』

周囲の地形を記録し、マッピングしてくれるらしい。

後、方角とかもわかるようになるとか。

地味だけど大事な機能だ。

『意思疎通システム』

どうやら、コレは先ほどからずっと機能していたようだ。

ぶっちゃければありとあらゆる人間（或いは人間と同等かそれ以上の知能を持つ相手）と意思疎通が出来るようになるとのこと。

自分や相手が発した言葉がお互いに理解できる言葉として認識できるシステムらしい。

『生体センサー』

生命体を感じるセンサー。

ディスプレイに周辺地図の表示にかぶせるように表示される。

アレだ、メタルギアっぽいな、コレ。

ふう……此処はあれか、ファンタジーご都合主義万歳と叫ぶ所か？ いや、叫ばんけど。

さて、取り敢えずのチェックはこんなもんでいいか、あっちのお嬢さんは……ってまだ泣いてるよ。

困ったな、俺：こういう時どうしたら良いかわからねえよ。

取り敢えず声を掛けるか。

どうやら自分達より大型の何かが周辺をうろつき始めたようだし。

「傷心の最中申し訳ないが、何者かが周囲を囲んでいるようだ。

君には早急に選択してもらう必要がある。

この場を離れるか、この場に残るか、だ」

俺の言葉に応じる事無く少女は彼の死体にすがって泣き続けている。

「後、30秒以内に決めてくれよ？

その彼も納得してくれるであろう選択肢を、ね。

もし決められなかった時は容赦なく君を置いていくからそのつもりで」

少女は何の反応もしない、思わず溜息をつきたくなる。

元々関係ない人間だしね、このまま放って逃げるのもありか？

……こういうところが原因で恋人が出来ても余り長続きしなかったんだよね。

僅かな時間が流れ、彼女の決意と準備が固まった所で改めて話しかける。

「さて、君の選択は？」

「……私は――」

「しかし残念、どうやら答えを聞く時間は無さそうだ。

君自身が持つ不運を嘆くが良い、強制イベント開始だ」

「私が…」

少女が何か言おうとしたがそんなの関係ねえ！

Compのディスプレイに表示されるマークは直ぐ近くまで迫っているからだ！

いやあ、俺の見積もりが甘かったねえH A H A H A！

「正直、厄介ごとはゴメンなんだよな…じゃあな」

「え？」

愚痴って逃げ出そうとしたら、真正面に出てきましたよ、おっきな豚面の不細工さんが3人ほど。

「「FRESH MEET!!!」」

「何で今回に限り英語!？」

ぶっちゃければCompの機能のお陰なのだが焦ってる俺が気づく筈もなく。

「う、うわおおっと!？」

急に停まったのと、剣の重さになれずにバランスが崩れて思わず剣が適当に横薙ぎに振るわれるような形で流れた。

ソレは丁度豚面の戦闘に居る奴の胴を薙ぐコースであり…結論から言くと、豚面の胴を真っ二つにした。

木の皮も切れないくせに、何故か豚面に対しては『こうかはばつぐんだ!』と良いたくなるほど切れ味の良いこのエクスカリパー（仮）。

まさか……豚面キラーか!?

特定の相手のみに威力を発揮する超凄い剣なのか!?
すげー!

いや、調子に乗ると痛い目見るんだよな。

学生時代の経験でそういうのはこりごりだ。

「ヴァー!! ウゴクナ! オレガタタキルマデダ!!!」

ほらきた!?! 豚面が振り下ろしの一撃を放とうとしている。

やばい!!! と思った瞬間俺自身のビビりから来る体の硬直を無視して剣を持つ手が何故か勝手に動いて俺の頭に叩きつけられようとしていた豚面の剣をいなして弾く。

「…ふえっ?!」

思わず驚くがソレは相手も同じこと。

お互いに必殺であると思っていたからだ。

そして俺は相手よりも僅かに我を取り戻すのが早かった。

「どりゃああああ!」

とにかく無我夢中で切りかかる。

それも其の筈、俺は剣の使い方なんて知らないのだから。

そして俺は三度目の驚愕をする事になる。

出鱈目に振った剣は豚面を防御に使用しようとした剣ごと豆腐に刃を通すようにあっさりと切ってしまったからだ。

「……(な、なんじゃこりゃー!?)」

声に出せないほど驚いてしまう。

いや、待て俺：このエクスカリパーのトンでも性能はともかく、上手くやれば敵の殲滅も可能か。

ディスプレイのマーカーを確認する。

少女を中心に大型のマーカーが囲みを小さくしている。

だが、その囲みは現在一点に穴が開いた状況だ。

残る豚面の数はマーカーによると6体。

：と思っていると、マーカーの情報が更新された。

マーカーの下に文字列が現れたのだ。

『Lv23 オーク』

Lvってゲームかよ、と突っ込みたくなるが堪える。

とにかく、豚面の名前はオークってことらしい。

さて、此処まで来たら俺がすることは決まっている。

あの少女を助けよう。

さっきは逃げようとしたが、倒せる相手なら逃げる必要もないしな。それにだ：冷静に考えて土地勘の無い人間がこの鬱蒼と生い茂った深い森から簡単に脱出できる筈もない。

だから、どの道あの少女が俺には道案内として必要なのだ。

と、言うわけで『アサシン石動』の二つ名、とくと味あわせてやろう。

にしても、こいつらの死体を量産しておいてなんだけど、意外と動揺しないなあ：自分。

あ、ちなみにオーク達はもう全部片付けたぞ。

あいつらは意外に聴覚とか鈍いのか、背後から足音を殺して接近したら全然気がつかれなかった。

そしてエクスカリパー改めエクスカリバー（仮）の性能を頼りに後

ろから首を刎ねて一体ずつ処理。

やばい、これ持ってる俺”が”強くなったって勘違いしちまうよ。

閑話休題。

俺は剣を鞘に納め先ほどの少女の元に移動した。

「おや、まだ呆けていたのか？」

声を掛けると、少女がゆっくりとこちらを向いた。

その少女が俺を見た時、俺は言い様の無い悪寒に襲われる。

少女がニコリと笑う。

その瞬間、直感的に或いは本能で悟った。

これは……厄介事だ、と。

少女は俺を見ているがどこか不自然な笑み。

それはまるで親しいとに向けるような笑みだが……どうして此処まで怖気を感じる？

「アラン、こんな所において行っちゃうなんて酷いわ」

その一言で全て把握した。

この娘、壊れちまってるのか。

「そこの彼は…？」

「ダメみたい、オークに襲われて私を助けてくれようとしたのだけど…」

彼女は少し悲しそうに言う。

なるほど、そういう風に彼女は認識を歪めたのか。

本気で困ってきたな。

彼、アラン君は彼女にとって善意の他人とし、生きている俺に彼という存在を押し付けやがったか。

正直迷惑な話だ。

だが、どうしたもんかな……利用するにしてもどうするにしても、この場で見捨てるのは後味が悪いんだよな。

「アラン、今までへっばこだと思ってたけど、凄く強くなったのね！オークを一太刀で切り伏せるなんて熟練の戦士並よ！」

「偶々だ。運が良かったただけだ。後、俺アランじゃないから」

運と言うより武器が良かったけども言うけどな。

そのついでに自分はアランじゃないと告げたが、「アランはアランじゃない」と怖気のする笑顔で言われた。

さて、どうするどうする？

この子、見た目は美人だしそのまま……っていうのも美味しい話ではある。

だけど、ふつつーに考えてどう見ても爆弾です。

ヤンデレ……じゃなくてヤンデルちゃんです、本当に。

扱い間違えれば油断した所をNice boat. ですね？ワカリマス。

本気で困ったがとにかく選択肢が思い浮かばない。

結論、後で考えよう。

正直な話、何を考えようと此処を生きて抜けられなければ意味はない。

俺個人では戦闘はどうかなるだろうが、森からの脱出は自信がない。

更に手持ちの食料。

カバンの中に入っている烏龍茶500mlペットでしかも残り4分の1とカロリーメイト4本入りのが丸々一箱か。

彼女の手荷物はどう見ても着の身着のまま、大したものはない様だ。

長く見積もって2〜3日持てば良い方だろう。

自分の体力的に持たない気もするが。

「さて、こうしていても仕方ない：彼の遺品を預かってから移動しよう」

「そうね：この人の遺品、この人の大事な人に渡さなきゃ」

それはお前じゃねーの？と思わず突っ込みたくなったが溜息だけついておく事にした。

とりあえず、彼の遺体を漁り、彼の所持していた剣だけを貰い受ける事にした。

食料の類は彼も所持していなかったようだ。ガッデム。

剣を握っていた腕とは反対の腕には婚約指輪と思わしき物があつた。それだけは彼から奪ってはいけないと想い、指輪を奪うことはしなかった。

さて、初手から貧乏籤を引いた気がするが：どうなるんだかねえ？

追伸..

少女に「何時もみたいにエリーって呼んで」と死んだ目で微笑まれた。

怖すぎて俺には頷くことしか出来なかった。

< Side Elie

「さあ、君のご両親の為にも是非とも我が妻になっていたきたい」
「…っ！」

目の前の陰険な男の台詞に苛立ちが隠せない。

まさか、こんな所で先月の盗賊襲撃の際に父母が重症に陥ったことが響いてくるとは…。

「くくっ、我が愛しのエリー…君は怒りの表情も美しいな」
「っくくくく！」

この男を殴り飛ばす事が出来ればどれだけスカッとするだろうか！！
だが、そんなことは出来ない。

厄介な事に目の前の男は貴族…しかも、駄目貴族のお約束である傲慢で悪政で色好きという最悪の男だ。

今まで領地内の見た目の良い女は片っ端から犯されてきたという話しも聞いている。

しかも、小さい子も含めて、だ。

そして自身の屋敷に囲い込んで淫蕩に耽っているとも聞く。

領地の僻地であるこの村までやってきたという事は、相当な被害者数にもなっているだろう。

そんなことになっているのに反乱が起きないのは至極単純な話がある。

人質と、強力な魔道兵の存在だ。

魔道兵は強力な魔法を扱い、更に通常の兵士達の様に武器の扱いにも長けた存在。

その戦力は一騎当千でもある。

各地で反乱を起しても即効で潰されてしまうだろう。

事実、既に幾つもの犯行を企てた村が弔り殺しの目に遭っている。

「とっとくたばってしまえ、下衆!!」

「では、明日の朝に迎えに来る。精々体を磨いておくが良い」

私の言葉など聞く耳持たずに帰ってた。

ヤツが帰ってから私はこの後に待ち受ける処遇に悲嘆した。

私には想い人がいる。

アランと言う名の幼い頃からの友人で、つい先月婚約したばかりなのだ。

彼は剣の腕はイマイチだけど人柄がよくみんなに信頼されていた。

先月の盗賊が来た晩には未熟ながらも村のガードとして先頭に立ち、班を指揮する班長として皆を奮起させて活躍して見せたのだ。

そしてその次の朝、彼から私に結婚を前提としたお付き合いをして欲しいと言う告白を持ち出された。

私は迷う事無く頷いた。

幼い頃から彼だけを見てきた。

彼と結ばれると言うのは私の幼い頃からの夢だったからだ。

彼の為だけに美しくなろうと思って努力した。

彼の為だけに料理を始めとした家事の腕を磨いた。

彼の為だけに彼を補佐するのに必要な勉強もした。

なのに…なんで…?

目の前には切り伏せられ、上半身と下半身が分断されたアランの姿があった。

私のせいだ…私の所為でアランが…。

「い、いやああああ!アラン!!」

ピクリともアランは動かない。

「アラン！！アラン！！」

揺さぶってアランの顔を覗き込む意思を宿さぬ瞳が私を写した。

「あ……ああ……う、うわああああああ！」

私のせいでアランが死んでしまった？

私がアランに連れて逃げて欲しいと言ってしまったから？

嘘だ。

[illegible]

そうだ　こんな現実　全部嘘だ。
アランが死ぬ筈がない。

だってほら、そこに生きてるじゃない。

そこで死んだのはアランの偽者よね？

うん、そうだ、そうに違いない。

ねえどうしたのアラン、そんな怖い顔をして。

「正直、厄介ごとはゴメンなんだよな：じゃあな」
「え？」

アランはそう言って茂みの方に走りこんだ。

ワケが判らない。

だけど、オークの汚い声が聞こえる。

ああ、そうか彼は私の愛を試しているのね？

酷い人。

だけど彼は絶対に戻ってくる。

だって、私の愛する人だもの。

「おや、まだ呆けていたのか？」

声が聞こえた。

アレから数分と経っていないのに彼は戻ってきた。

詰まり安全を確保したのだ。

アラン、へっぽこだったのに私の為にきつと努力してくれたのね？

嬉しいわ。思わず笑みが浮かんでしまった。

でもね、私さっきの言葉、怒ってないわけじゃないのよ？

「アラン、こんな所において行っちゃうなんて酷いわ」

彼は渋い顔をして目をそらす。

ずるい人、でも反省してるみたいだし赦してあげよう、だって愛しい人だもの。

すると、彼はコイツの死体を見て私に尋ねる。

「その彼は…？」

ああ、なんて優しい人なのだろう…私を謀り連れ出した彼を気にかけてあげるだなんて。

なら、せめて彼の優しさに免じてあげよう。

「ダメみたい、オークに襲われて私を助けてくれようとしたのだけど…」

私の言葉を聞くと、彼は「そうか」と呟いて渋い顔をして考え込んでしまう。

きっと優しい彼はこの男の死を悲しんでいるに違いない。

なんというお人好しだろう。

でも、ソレでこそアランだと私は思う。

そんな彼を私は妻として支えてあげたいと思う。

そうだ、話題を変えれば陰鬱な気分も変わるかもしれない。

「アラン、今までへっばこだと思ってたけど、凄く強くなったのね！
オークを一太刀で切り伏せるなんて熟練の戦士並よ！」

実際に一太刀かはわからないのだけれど、剣戟の音が無かったしもしかしたらそうなのかもという推測をこめて尋ねる。

「偶々だ。運が良かったただけだ。後、俺アランじゃないから」

謙虚なのね、アラン。それと、貴方がアランじゃなくて誰がアランなのかしら？ウフフ。

「アランはアランじゃない」

そういうと彼は表情を僅かなうちで何度も変えた。
みていて面白いわね。

でも、何時までも此処でこうしている訳にはいかない。

彼が何か荷物はあるか？と尋ねてきた。

可笑しな人、着の身着のまままで逃げ出してきたじゃないの、と私は返す。

そういえばそうだったな、と彼が返した。

「さて、こうしていても仕方ない…彼の遺品を預かってから移動しよう」

「そうね…この人の遺品、この人の大事な人に渡さなきゃ」

やっぱりこの人は本当にお人好し。

こんな人の為にそこまで心を裂くなんて。

彼はコイツの死体から剣だけを？ぎ取った。

その時に私は気付いた。

反対側の腕に、アランとの婚約指輪がこの男の指に嵌っている事を。
きつとコイツが盗み出して盗人猛々しく身に着けていたに違いない。
アランはアレで結構抜けている事もあるからきつと見落としたのね、
仕方無い人。

私がキチンと彼の妻として彼の足りない所を補ってあげなくちゃ。
そう思いながら偽者の指から婚約指輪を取り返した。

彼には後でキチンと反省して貰わなくちゃ。

さあ、私達の新婚旅行に行きましょう。

ねえ、
アラン？

2. 幻想世界の商業都市・ユディツァ／姉夫婦の所へ

< Side RYU

あの後、エリーの案内で俺は森を抜けて街道に出た。

エリーは相変わらず俺にあの死体の少年、俺の弟にも似たアランの姿を投影し、俺をアランと呼びいちゃついていた。

正直な話、俺はかなり居心地が悪い。

美少女に好かれるのは嬉しい、だが…心を病んで恋人…いや、夫か？夫と間違われ続けるのはストレスだ。

開き直ってしまえば良い気もするが、残念な事に俺の神経はそこまですぐ太くない。

俺がストレスでぶっ倒れるのと、開き直ってエリーを抱いてしまうのはどちらが先になるやら、である。

ああ、そうそう…大事な事を言い忘れていた。

俺、なんか5歳ほど若返ってました。

5歳若返るってことは不幸なアラン少年とほぼ同年代で、更に更に不幸なアラン少年は俺の弟、石動進に鏡写しの様に良く似ていた。で、その進は俺に良く似ていた。

さて、コレで言いたい事はわかるな？

アランにくりそつだった俺は、衣装を除けば最初からアランと間違えられる要素たっぷりだったんだよ！！！！

まあ、茶髪か黒髪かって言う差もあったけどな。

さて、そんな俺達だがバカップルが如くいちゃつきながら街道を歩いていた。

正確にはエリーが一方的にじゃれ付いていた、と言うのが正しい。

「ねえ、アラン。ユディツアに着いたらどうしようか？」

「ああ、そうだなあ…取り敢えず仕事でも探るかエリー。金がないし」

「お仕事かあ…うん、私アランの為に頑張るね！」

「ありがとう、エリー。」

俺もエリーのために頑張るよ」

自分で言ってるんだが、どの口が抜かすってなもんである。

ぶっちゃけ、俺は仕事ではなく、どうすればエリーを自然な形で、後悔する事無く手放せるかとも考えている。

自然な形、と言うのはあれだ、エリーが他に好きな男を見つける、と言う意味である。

或いは愛想を尽かすでも構わない。

「そういえば、ユディツアにはアランのお兄さんと私のお姉ちゃんが住んでいたよね。」

今日はそこに顔を出してみない？」

キター！手放すためのフラグですね！わかります！！

プレッシャーもあるが、それ以上に罪悪感を手放すチャンス！

「そうだな、そうしようか！」

あ、でもどこだったか覚えてないや…エリーは覚えてる？」

「うん、勿論だよ♪」

商業都市ユディツア。

そこは俺達が今いる国、エインブレターン王国の最南端で、エリー

の故郷の村から街道を歩いて3日、危険なオークの住むフェチャシユの森を突っ切って1日の場所にある。

そこは隣国、西方のフロウエム・トアソフ連合国と南方のバナンイダコム共和国との境にあり商人たちが自治を行う自治都市でもある。：という事を道すがらエリーから聞きだした。

「久し振りに着たけど、相変わらずにぎやかだね、ユディツァは」
「そうだな。コレだけ大きな町なら、仕事も直ぐに見つけられそう
だ」

ユディツァは街道の丘の上から見ると六角形の形をした外壁に囲まれた都市だ。
三国の交易拠点として栄え、様々な流行は王都よりもこの都市から生まれる、という事らしい。

「それじゃあ、早速兄さん達に会いに行こうか」
「ううん、そうだね。わかったよ」

そして、俺達はアランとエリーの兄、姉夫婦が住まう少々こじんまりとした家に辿り着いた。

さて、勢いだけで此処まで来たが正直、向こうさんにはどう説明したもののか。

まあ、正直に言うのが一番か、面倒だけど。

そんでもって、エリーを引き取って貰えば俺は晴れて自由のみだ。彼等だって見ず知らずの住所不定無職の男に大事な妹を任せたくは無い筈だ。

そう信じたい。

「あら？もしかしてアラン君にエリーかしら？」

背後からかかる声に思わずギクリとする。

振り向くとエリーを少し大人びかせてスタイルを良くしたらこういう人だろう、と思わせるにたる女性がそこにいた。

「あ、お姉ちゃん久し振りー」

「……」

エリーは嬉しそうに姉に近寄る。

俺は取り敢えず会釈だけする。

「ええ、エリー、久し振りね…アラン君も…あら？」

「ええっと、色々と言わなければならぬ事があります。

取り敢えず俺の事は今はアランと呼んでください」

その言葉に、お姉さんは難しい表情をした。

「何言ってるのアラン？アランはアランじゃない」

「えっ？」

エリーの言葉に驚きを隠せないお姉さん。

何を言ってるのこの子、と言う眼差し100%である。

「その事に着いても、説明しますので」

俺は少しだけ溜息をついた。

ってーか、この人俺の幼馴染の奈菜によく似てやがるよ、畜生。奈菜のヤツ元気になってっかなあ…。

あぁっと思考が逸れた。

「……まあ、そういう事なので。」

積もる話もあるので、先ずはエリーを休める場所へお願いします。
エリー、疲れてるだろう？お姉さんに部屋借りて休ませてもらう
と良い」

「ええ、私を子供扱いしないでよ。
アランこそ疲れてるんじゃない？」

エリーが子供染みた感じで反論する。

「俺は大丈夫。体力と根性には自信があるからね」

「そうね、エリー貴方は女の子なんだからもう少し身嗜み、気を使
いなさい？」

髪の毛、土埃で汚れているわよ。お風呂を貸して上げるから浸か
って来なさい」

お姉さんがそう言うのとエリーが過剰に反応した。

「え、お姉ちゃんちお風呂あったの！？アルスさんって何時の間に
そんなにえらくなったの！？」

「この街じゃ、お風呂ぐらい各家庭に普通あるわよ。アルスが特別
って訳じゃないわ」

お姉さんはくすくすと笑いながら言う。

「それじゃあ、2人とも上がりなさい」

さて、ついに尋問される時が来た。
ちなみにエリーは風呂だ。

「さて、それでは改めて自己紹介をさせていただきます。

俺は石動涼と言います。現在、残念なことに住所不定無職です。
妹さんとはフェチャシュの森で出会い、死亡したアラン君の代わりに彼女を此処まで連れてきました。

遺品として持ち出したのはこの剣のみです…」

そう言って腰に挿していたアランの剣を差し出す。

「アラン君が…！？嘘ッ！？そんな…でも、この剣はアルスがアラン君に上げたものと…」

お姉さんは動揺しながらも渡された剣を手に取り確認を取る。

「何があったか…教えてもらえますか？

何故エリーが貴方をアラン君と呼ぶのかも含めて」

「最初からその心算です」

そして、俺はフェチャシュの森で見た事をそのまま伝えた。

「——以上が、俺の知る限りです。

ぶっちゃけた話、彼女達が駆け落ちであそこに居た位しかあそこに居た理由は知りません」

「そう…だったの…。あの子…」

お姉さんが呟く。

きつとエリーの為に心を痛めているのだろう、と適当に想像しておく。

「さて、為すべき事は為したつもりです。

後の事はあなた方にお任せして俺は宿に向かわせてもらいます」

そう言って俺が席を立とうとすると…。

「途中からだ話が聞かせてもらった。お前にはまだ用があるからそのまま居てもらうか」

「っ!？」

何時の間にか何ものかに背後を取られ、しかも刃物を首筋に当てられている。

やばっ、全然気付かなかった…!

「お帰りなさい、アルス。良い所に帰ってきてくれたわね」

「ただいまだ、マリ」

和やかに俺を挟んで会話する夫婦だが、首に当たっているものは正直どうにかして欲しい。

「とーりあえず、逃げも隠れもしないんで、コレ、どけてくれません？」

ちよいちよいと首筋に当たっているそれを指差す。

アルスはふん、と鼻を鳴らしてからそれをどけた。

ようやくキッチンと視界に収まったそれはすんごく切れ味が良さそうで、しかも超使い込んでいそうで一部に血の跡が残っている短剣だった。

正直ガクブルものである。

「なるほど、胆力はまあまあだな。だが、俺如きに背後を取られている事にも気づかない様では大した察知能力も無いな」

「いやいや、そもそも安全地帯と判断した場所で戦場と同じように気配探せてキツイって。」

「こちらら戦慣れしているわけじゃないんだしね」

そう言ってから振り返って彼を見ると…そこには俺（2Pカラー）が居た。

正確には、こちらの世界に来る前の俺に良く似た男だ。

まあ、アラン君のお兄さんと聞いていたしこういうのも想定してたよ。

「さて、アンタが聞きたいのは本物君がどこで眠りに着いたか、どうなっているか、だろう？」

正直な所、余り見に行くのはお勧めしないが…」

「それでも俺はアイツの兄だ。知る権利があるし…アイツをせめて埋葬してやらねばならん」

俺と同じ顔が確りとお兄さんをしていた。

「そうだね、その気持ちは判る。」

俺も弟がそうなれば同じ事を言うし同じ事をしようとするだろうしな。

彼は、俺の弟に良く似ていたからその気持ちは一入だよ」

「良く似ていた…？」

君に、ではなく？」

俺は静かに首を横に振る。

「俺にも似ていますがね俺以上に弟に良く似ていましたよ。」

それに、今の俺、とある魔導師との戦いで競り負けた際の呪いで何歳か若返ってる上に、記憶も一部奪われているんだよ。

この辺りに湧いて出た理由は魔法で空間跳躍させられたから、だ。本来の姿に戻ると、丁度アルス：君と同じぐらいの背格好さね」

まあ、それはともかく。

「彼の遺体、残念ながら弔う余裕は無かったからそのままだ。もしも弔うつもりがあるなら案内するけど：どうする？」

「勿論、弔わせてもらう。……だが、君はよくあの森を抜ける事が出来たな。」

あの森は中堅の冒険者達でも突破するのに一苦労する場所なのだが」

アルスは俺の問いに頷いた後、疑問をぶつけてきた。

「ぶっちゃければ、俺の持つ武器の性能のお陰、といった所です。俺自身は剣の扱いなんて素人以下ですし：。」

この剣、何でか知らんですが木に斬りつけても切り傷一つ出来ない癖に、

オークを剣ごとぶった切るとか言う離れ業、やってのけたんですよ」

そう言って、鞘ごと剣をアルスさんに差し出してみる。

「抜いてみる、と？」

「ええ、どうぞ：興味があるのでしょう？」

「それはまあ：そうだ」

そう言ってアルスさんが受け取って：モロに落とした。

「っ！？すまない！今——な、なんだコレ持ち上がらんぞ？！」

落とした事に慌てて、急いで拾おうとするが、何故か持ち上がらないようだ。

「お前、こんな馬鹿みたいに重い剣を使っていたのか!？」

「馬鹿みたいに重い…? ありえないでしょ、それは。」

俺程度の貧弱ボーイでも持てる剣ですよ?」

「だが、俺は今コレをもてないのだが…例えるなら大岩を持ち上げようと頑張る子供の気分だぞ!」

「んな馬鹿な」

俺はそう言ってヒョイッと剣を持ち上げた。

うん、やっぱり重くない。

昔に部活で使っていた剣道の竹刀を多少重くした程度の重さはあるが、その程度だ。

俺は不審に思って首を捻る。

「アルスさん、ちょっと腕相撲して見ませんか?」

「…判った、やってみよう」

どうやら俺の意図している所を正しく理解していただけたようだ。

「それじゃあ、審判は私ね?」

「ああ、頼むよマリ」

そしてテーブルの上でがっつりと組み合う俺とアルスの腕。

「開始!」

『フツ…!』

お互いに力んだ瞬間、勝負が呆気なく決まった。
誰が勝ったかって？

決まっている、アルスだよ。

「「……………」」

微妙な沈黙が落ちる。

「ちなみに、一切の手加減なしの全力でコレです」

テーブルに打ち付けられた手の甲が痛いなぁと重いながら俺はアルスに言う。

「ええっ！？でも、お前：幾らなんでも、この結果は男として情けなすぎるだろう」

「…………言わんでください、昔から何故か腕力だけは付き辛いんです。
それに、俺は戦士ではなく：どちらかと言えば技術者としての側面の方が大きい」

派遣社員で色々な技術職を転々としていたからな、間違いではない。
本当は一本に絞ってやりたかったのだけど、よく言えば万能、普通に言えば扱い易い器用貧乏な俺は様々な場所に出されたのだ、上司の命令で。

この世界でどのぐらいが求められるか知らないが、少なくとも日曜大工程度は軽くこなせる自信がある。

それに、イザと言う時はCompから元の世界への情報検索が出来るようなのでモノヅクリに関して困る事が有れば材料ぐらいだろう。
にしてもComp便利すぎる。本当に大事にしよう。

その後、その日はアルス達の家の客間に泊めて貰った。
エリーはお風呂のあとそのままベッドに入った様でぐっすりと寝て
いたのをみてやっぱり女の子に旅をさせるもんじゃないな、と思っ
た。

あ、後面倒ごとに関わる事も確定した。自業自得だな、こりゃ。

さて、翌日、2人に泊めてもらった礼を言おうかと思ったのだが、
起きたら既に昼で二人は急用でしばらく出かけると言う伝言をエリ
ーから聞かされた。

そして、2人からの伝言で自分達が居ない間、家は好きに使っても
良いとか言う話だとか。

あの2人が帰ってくるまで、この家の留守はキッチリと俺とエリー
で護ろう、と俺は思った。

明らかにエリーの扱いに困るのは間違いないだろうな。とも思いな
がら。

< Side Elie

あの後、私とアランは森を抜けて街道に出た。

アランはあの偽者の事をずっと気に掛けていたみたい。ちよつと嫉
妬しちゃうなあ。

時々くらい顔をしていたから、元氣付ける為にちよつと大胆に腕を
組んでみたり色々と話してみた。

アランは紅くなったり驚いたり何時もみたいに反応してくれる。

心配事が多くてお腹が痛くなりそうだ、と言っていた。

私は彼のために妻として今まで以上に支えてあげなくては、と思っ

た。

そういえば、勢いだけで此処までできたけどユディツアに着いたらどうするか決めていない事を思い出した。

「ねえ、アラン。ユディツアに着いたらどうしようか？」

「ああ、そうだなあ：取り敢えず仕事でも探すかエリー。金がないし」

どうやらアランも決めていなかったみたい。

「お仕事かあ：うん、私アランの為に頑張るね！」

「ありがとう、エリー。」

俺もエリーのために頑張るよ」

アランが少し気弱に微笑む。

アランは少し疲れているみたいだしやっぱり私がフォローしてあげなくちゃ。

「そういえば、ユディツアにはアランのお兄さんと私のお姉ちゃんが住んでいたよね。」

今日はそこに顔を出してみない？」

2人が結婚したのは大体4年前だったかな？

あの2人の結婚を見て、私も2人みたいにアランと幸せに暮らしたいとずっと考えてきたのだ。

「そうだな、そうしようか！」

あ、でもどこだったか覚えてないや：エリーは覚えてる？」

「うん、勿論だよ♪」

アランはやっぱりどこか抜けてる、それをフォローできるといふ事は私にとってとても幸せだ。

久しぶりに訪れたユディツアはやはり村と違ってとても人が多く活気にあふれていた。

あんまり人が多いので少し煩わしく、故郷の村の長閑な光景がもう懐かしいと感じてしまう。

「久しぶりに着たけど、相変わらずにぎやかだね、ユディツアは」
「そうだな。コレだけ大きな町なら、仕事も直ぐに見つけられそう
だ」

確かにコレだけ大きな都市ならば働き手は幾らあっても足りないと思
私思う。

アランは努力家だから、きっとどこに行っても重宝されるだろうと思
も思った。

「それじゃあ、早速兄さん達に会いに行こうか」
「ううん、そうだね。わかったよ」

そして、私達は姉夫婦が住まう少々こじんまりとした家に辿り着い
た。

お姉ちゃん達に会うのは久しぶりで、少し迷惑掛けるけど…大丈夫
だよな？

「あら？もしかしてアラン君にエリーかしら？」

考えていると、懐かしい声が聞こえた。

「あ、お姉ちゃん久し振りー」
「……」

私は声を掛けてお姉ちゃんに近寄り。
アランは静かに会釈だけしてる。
なんだか硬いなあ、アランは。

「ええ、エリー、久し振りね…アラン君も…あら？」
「ええっと、色々と言わなければならぬ事があります。
取り敢えず俺の事は今はアランと呼んでください」

アランとお姉ちゃんの遣り取り。
アランはまた変な事を言うなあ。

「何言ってるのアラン？アランはアランじゃない」
「えっ？」

私が言うとお姉ちゃんの変なものを見た時みたいな顔をする。

「その事に着いても、説明しますので」

アランが何か説明をするらしい。
溜息をついているから余り説明したくないことなのかなあ？

「……まあ、そういう事なので。
積もる話もあるので、先ずはエリーを休める場所へお願いします。
エリー、疲れてるだろう？お姉さんに部屋借りて休ませてもらう
と良い」

「ええー、私を子供扱いしないでよ。」

「アランこそ疲れてるんじゃない？」

私も疲れているけど、アランも疲れている筈だ。だって、街道からここまでもずっとアランは1人で戦闘までしていたんだし。

「俺は大丈夫。体力と根性には自信があるからね」

「そうね、エリー貴方は女の子なんだからもう少し身嗜み、気を使いなさい？」

髪の毛、土埃で汚れているわよ。お風呂を貸して上げるから浸かって来なさい」

その言葉に私は自分の失態を悟った。

ああ、なんてことだろう私はアランのために何時でもどんな時でも最高の状態で居なければいけないのだ。

それは勿論身嗜みも含めてだ。

だからこそ、この様な失態は許せない。

だけど、余りに見苦しく動揺するのもアランの前ではしたくない。

「え、お姉ちゃんちお風呂あったの！？アルスさんって何時の間にそんなにえらくなったの！？」

「この街じゃ、お風呂ぐらい各家庭に普通あるわよ。アルスが特別って訳じゃないわ」

お姉ちゃんはおくすくすと笑いながら言う。

当たり前のようにお姉ちゃんと言うが、村ではお風呂なんて共同サウナぐらいしか存在せず、個人の家で持てるものではなかったから非常に驚きである。

「それじゃあ、2人とも上がちなさい」

家に入って直ぐに私はお姉ちゃんの家のお風呂に入れさせてもらった。

このお風呂はなんでもユディツアの北にある、美味しい水としても有名で、そしてこの大陸でも有数の大きさを誇るエクアルタ湖から水を引っ張ってきて、更にそれを魔法施設を利用して各家庭に給水しているらしい。

そして各家庭では給湯器という魔道具を使ってお湯に変化させてお料理やお風呂に使っているらしい。

扱い方の方はお姉ちゃんに先ほど教えてもらえたのもうバッチリだ。

「ううん、やっぱりお風呂って凄く気持ち良いのね」

村に居た頃は、水を汲んできて体を洗ったりしていたが、やっぱりお湯の方が気持ち良い。

それに、お湯を作るのに薪を使って火の調節をしなくて住むのも嬉しい。

ユディツアって本当凄いわ。

「あ、でも余り長風呂はしないようにしなきゃ。水でしわしわになった肌なんて、アランに見られたくないし」

そう考えながら手早く、確実に体中の汚れを落とす。

後、何時アランに貰われてもいいように重要な場所は念入りに洗っておく。

余り念入りにやり過ぎて、予想以上に長くなってしまったのは置いておこうと思う。

お風呂を上がり、お姉ちゃん達と合流しようとおもったらアルスさんが扉のまで私に背を向けて立っていた。

どうやら部屋の中の話聞き耳を立てているようだ。

そしてアルスさんは極自然に、しかし音を立てずゆっくりと静かにアラんに近寄りナイフを抜いた。

「さて、為すべき事は為したつもりです。

後の事はあなた方にお任せして俺は宿に向かわせてもらいます」

そう言ってアランが席を立とうとすると…。

「途中からだ話が聞かせてもらった。お前にはまだ用があるからそのまま居てもらおうか」

「っ!？」

私はここまで何も出来ずにただ驚愕と怒りとが混じりあった感情を抱いていた。

その後私は何時の間にかベッドに身を投げていて、気付いたらアランがベッドの横で右膝を抱くような形で眠っていた。

私はアランを起さないようにベッドから出て、リビングの方に向かう。

リビングにはまだ明かりが灯っており、話し声が微かに聞こえた。

『アラン………残念………殺………エリー………』

『あのバカ………愚か………仕方ない………森………遺体は………一緒………死………』

あの2人の話している内容が私の繋がってきた。

私とアランを殺そうと言うの!?

そう思った瞬間、恐ろしい光景が脳裏に走る。

アランを斬り殺す何か、怯えて竦むことしか出来ない私。

そして…。

殺そう、殺すしかない。

私とアランが幸福になる為にはあの二人は邪魔殺さなきゃいけない
どうやって殺す? ああ丁度良いアランの剣があるからソレで斬って
潰して砕いて刺して貫いて焼いて炙ってさあ剣を手に執り敵を殺そ
う。

そう思って私が『アランの剣』に手を伸ばすと…。

「ハーイ、ストップ。そこまでだよエリー」

「え、アラン?」

振り向くとそこにはアランが居た。

シャツとズボンだけという姿で、眠そうな顔をしているけど間違い
なくアランだ。

「素人が剣を持つのはお勧めしないなあ」

「あっ」

彼は私がおかをするよりも早く、ひょいっと違和感無く剣を取り上
げてしまう。

「アラン、剣を渡して。それがないと私――」

あの二人を殺せない、と続けようとした所で私の口はアランの唇で

塞がれてしまった。

キスだ。

普段はアランからはしてくれない、キス。

アランは何時の間にか剣手放し、私を抱き寄せる。

そしてアランの舌が私の口の中に入ってきて、私の舌といやらしい音を立てながら絡み合う。

気持ち良い、心が融けてしまいそう。

アランってば、何時の間にかこんなに情熱的で上手なキスを出来るようになったのかしら？

1秒毎に心臓が早鐘を打つ。頭がボーっとしてくる。もう、アランの事しか目に入らなくなってくる。

そしてアランは私を見据えて宣言した。

「俺も取り敢えず覚悟を決めたよ。放って置くと、害しか残りそうに無いからな。

彼らにゃ悪いが：エリー、君は俺のモンだ。

エリーが俺を嫌いになるまでずっとだ。『愛してるよ、エリー』」

私の意識はそこで真っ白になった。

朝、目が覚めると私はやっぱりベッドの上で、アランはベッドの脇で眠っていた。

今度は膝ではなく剣を抱いて眠っていると言う様子だったが。

あのアランとの情熱的なキスは夢だったのだろうか？

そう思っていると、下着が濡れている感じがした。

「~~~~~!」

アランは気付いていないだろうか？
様子を見るとぐっすりと眠っている。
気付かれる前に、下着を替えよう。
ものが無いから姉さんから借りる事になるけど…大丈夫よね？
そう思い、姉さんが居ると思われるリビングに向かった。

「あら、エリー。早いわね」

「だが、丁度いいともいえるな」

「お姉ちゃん、お義兄さん。おはよう」

「「おはよう」」

挨拶を交わした所で、お姉ちゃんが少し変な顔をしてから問いかけ
てくる。

「ねえ、『あの』アラン君の事、エリーは好き？」

変な問いかけだ、私はアランのことが好きだって事…お父さんやお
母さん以上に良く知っている筈なのに。

「うん、私…アランのこと大好き。愛してるわ」

迷う事無く返す。

そうすると2人はどうしてか困った顔をした。

「そう……か。アランも果報者…だな」

お義兄さんは何故か背を向けてそう言った。

「エリー、私達は今日から一度、リュエシカまで戻るわ。」

そこでお父さんとお母さん達にエリーとアラン君のこと、伝えてくるから。

本当は、当人達が向かうのが良いけど、そう言う訳にもいかななしね」

「そっか…ごめんね、お姉ちゃん、お義兄さん」

2人が私達の為に行ってくれると言うのなら、きっと昨日の夜に聞いたこと私の勘違いか何かだったのだろう。

だって、お姉ちゃんは優しいからそんなことしないよね…？

「私たちが不在の間、この家にあるものは好きに使っていいわ。

後、アラン君には仕事の紹介、アルスの仕事仲間をお願いしてあるから後出来てくれる筈よ」

「うん、わかったよ」

私が頷くのを確認してから、お義兄さんは立ち上がり、お姉ちゃんに声を掛ける。

「そうか、それじゃあ行こうマリー」

「ええ、それじゃあエリー…またね？」

2人はそうして出て行った。

3. 脱ヒモ生活！そして厄介事への道が拓かれる／（前書き）

今回はリョウ編とエリー編は諸事情により分割してお送りします。

3. 脱ヒモ生活！そして厄介事への道が拓かれる／

< Side RYU

さて、アルス達が居なくなって1週間。
俺は一つ、思い出した事がある。

「ヒモ生活は…もう、いやですがな」

この一週間はアルス達もそのうち帰ってくるからゆっくり勉強と情報収集しながらがんばるべーよ。

と、思いながら主に読み書きの勉強をしていました。

ちなみに教材はCompだ。

この素敵な籠手型のコンピュータに搭載されているネットワーク機能を通じて、この世界の言語とか文字の書き取りと読み取りの勉強に適したデータを大量に集めてひたすらに勉強したのだ……主に絵本を。

最初の内はゆっくりと勉強していたのだが、途中で事情が変わった。エリーが妙に……そう、妙に甲斐甲斐し過ぎるのだ。

まるで、このまま飼育殺しでもされるんじゃないかと思ってしまうぐらい。

加速度的に甲斐甲斐しさが酷くなるに連れて俺は悟った。

「俺、今めっちゃヒモじゃね？」

女に寄生して生活している駄目男。

それが今の俺だと気付いてしまった。

そして曲がりなりにも社会人でありキッチンと働いていた俺としては自分よりも若い女の子に寄生って言うのは正しく恥じである。

ならばどうするか？

決まっている、働くのだ。

昔からよく言うじゃないか、『働かざる者喰うべからず』と。

そして俺は働く為に基礎となる読み書きの勉強に更に熱を入れた。

気分は学生時代のテスト前って感じだった。

ちなみに、エリーは何故か…。

『何かに必死になってるアランって素敵ね』

なんていって素敵な笑顔で俺を応援して来た。

この言葉で俺は少し理解した。

エリーって悪気無しで男を駄目にしかねない過剰な世話女房タイプだって。

多分、アランがかなりダメダメだと言う噂があるのは半分近くエリーの影響じゃなからうか？とも思い始めた。

きっと、元の世界でもアランに良く似ていたと思われる割りとダメな弟がアランほどダメっ子じゃないと今俺が感じるのは、エリーのような過剰な世話女房が居なかったからだな、と頷く。

そんなこんなである程度：最低限名前と数字の読み書きと生活に多用される単語の読み書きをマスターし、俺は就職活動をする事にした。難易度的には英検三級並だろうか？

しかし、だ。

ある程度の知識を付けた所で未だにこの世界の職については詳しいわけではない。

と、言うわけで俺はこの世界に関してそれなりに精通している人間を頼る事にした。

「って訳で、いつまでも居候っていうのもアレだし、無職も格好悪

いんで働こうと思うんだけど…。

エリー、なんかアドバースないか？」

「アドバースって言われても…」

エリーが困ったような笑みを浮かべる。

まあ、確かにそりゃそうだってなものである。

「いやあ、どんな職でも良いんだけどさ、エリーの意見があればそれにしようかなって」

と、俺が言うと。

「前みたいにガードの…防衛関連の仕事は駄目なのかしら？」

「ガードか…」

どうやらアランは嘗て村や町の防衛に関わる仕事をしていたようだが、先日エリーが居ない場所で聞いたアルス・マリー夫妻のアラン評から考えて、それほど頭が良かったわけでも、腕っ節が良かった訳でもないのだろう。

ついでに言えば、エリーもアランが腕が良いとは思ってなかったのも知っている…と言うか本人が行ってたしな。

ガードの仕事も良いが…正直あんまり興味ないんだよな。

「ガード以外の仕事を考慮してみようかと思ってたんだ。勿論、ガードが嫌って訳じゃないけどね…。

折角環境が変わったんだから色々やってみたい、そう思ったのさ」

前半はアランを演じる俺の方便、後半は俺自身の考えでもある。

「なら、冒険者はどうかしら？」

読み書きとそこその能力が無いといけないうだけれど、色々やってみたって言う面では最適だと思うわ」

「あ、それじゃあそれで」

この街は五角形の形をしており、其々の角の頂点に門があり、そこから中央に向けて主要な通りが作られている。

五つに切り分けられた面はそれぞれ区画整理されており、北西・住宅街、北東・高級住宅街、南西・商業区、南・行政区、南東・工業区。

更にオマケを作ると都市外周部・スラムがある。

アランとマリーの家は当然の如く住宅街にあり、これから向かうギルド（正式には異職種間相互扶助協会というらしい）は勿論行政区に存在する。

この街におけるギルドとは、冒険者ギルド、職人ギルド、商人ギルドの3つが合わさったものだ。

冒険者ギルドは他ギルドから依頼を受けて様々な活動をし、モンスターを倒したり探索を行って物作りの素材を得る。

職人ギルドは冒険者ギルドが得た素材を買い取り、物を作って商人ギルドに売り渡す。

商人ギルドは冒険者ギルド、職人ギルドの双方に依頼をして、得たものを売りに出す。

そういった一連の動きがあるのだ。

では、何故この3つのギルドが一つになったかというところ、バラバラのままだと書類手続きが面倒だ、という声が大きかったからだそう。そして、ギルドでは冒険者や職人、商人はそれなりに多いのだが、肝心要のギルドの運営に必要なギルド職員が少ないのだという話をエリーがした。

ちなみに、この街には無いが、聖職者ギルドや魔術師ギルドなるものも別の街には存在する。

この街ではその二つを含めて冒険者ギルドで統合されていたりするが、まあその辺りは些細なことである。

利用する側もされる側も、相手がキチンと機能するのならば文句は無い、というのが基本スタンスだから。

「なるほど、エリーは教えるのが上手いな。わかりやすかったよ」

少なくとも触りの部分はこれで良く分かった。

エリーは『アラン』に関連する認識こそ歪んでいるが、それ以外は非常によく出来た少女だ。

頭脳明晰、容姿端麗、性格：『アラン』抜きで考えれば温和で温厚、運動神経も悪くなく手先も器用。

正直ドンだけ完璧人間なんだ？と、言わんばかりである。

その彼女が言うのだからとりあえず、前提知識はコレで十分だ。

エリーに案内されて向かったギルドの建物は、3階建てで石造りのやけに大きめの建物だった。

「ここがギルドよ。アランの事だから忘れてると思うけど…」

どれだけ信頼されて無いんだ、アラン…。

一階は依頼の受付と依頼報告用のカウンター。

そして酒場や道具屋、武具屋が併設されている。

二階はギルドの事務エリアと格安の宿屋（カプセルホテルの様な物）があり、両者は行き来できないようだ。

三階は幹部の事務室と会議室があるらしい。

「エリーって本当に物知りだな」

「えへへ、アランと一緒にになる為にイロイロな事、勉強したんだよ」

エリーは褒めて褒めて、と言わんばかりの良い笑顔で俺に微笑みかける。

ただ、その瞳が映しているのは俺の姿ではなく、俺を通して見るアランだと言うのだから…。

「そう、だな。凄いよエリー」

「でも、まさかお姉ちゃん達みたいに夫婦でギルドに勤めれるなんて、思わなかったわ」

「え？」

思わずエリーの言葉に反応してしまう。

「アラン一人だけに働かせるのは申し訳ないし、それに不安なもの。それに私、いろいろ出来るのよ？」

弓だって覚えたり、純粋魔法、水氷魔法や火炎魔法も初級の物なら扱えるわ」

「弓に魔法を3系統も？……何時の間に」

多分、アランが見ていない間についてことなんだろうが…明らかに話に聞くアランよりも才色兼備ですね本当に（ry：ってなもんである。

つか、この子冒険者になって俺の仕事手伝う気？

勘弁してよ、それじゃあ

現在の俺は、多分だがアランよりはマシ程度の実力だろう。

特に戦闘能力は武器がチートだからな、仕方ない。

てか、こんなチートな剣を使っていると実力つかねーよ。

さて、そんな思考の脇道にそれながらもようやくギルド内に入ると、一瞬だけだが色々な場所から視線が飛んできたのを感じた。

アレだ、遅刻した時に『誰が今頃来たんだ?』みたいな感じで見られたときと同じ気分だ。

そんな居心地の悪さを感じながら俺は受付に向かう。

「いらっさいませ。依頼ですか?」

受付に居たのは、見た目6歳ぐらいの少年だった!

「……君が受付の担当?」

「はい、それですよ!」

明らかに幼い子供です。

この世界じゃこんな子供まで仕事するのか!? やっく・で・かるちやー!!!!

と、心の中で叫んでいると、その光景を見ていた身内と思われる壮年の男性が急いでこちらにやってきた。

身長は170ぐらいで:俺と同じぐらい。やや筋肉質で腕っ節が強そうだが、紳士的な顔をした人物だった。

彼は子供を慌てて下がらせて場所を代わる。

「息子が失礼しました。ようこそユディツァ総合ギルドへ。

私は当ギルドのヴァン・ホーテンと申します」

「あ、コレはご丁寧にどうも。

俺はアラン:と名乗っています。

後で個別でお話するので今はアランと」

ああ、ついに自分で事情も知らない相手にアラン名乗っちゃったよ。

一応、小さな声でヴァンさんに言ってエリーに自己紹介を促す。

「アランの婚約者のエリー・ウェアドと申します。よろしく願います」

アランの、であって俺のではないよなーと思わず心の中で愚痴る。こう言っただけなんだが、俺はコレでも恋愛純情派を自称している。そんな俺としては、結婚するならばやはり理想は恋愛結婚である。エリーとしては満足だろうが俺は不満ありまくりですがな…俺、アランじゃないし。

ってか、エリーの家の名前ってウェアドって言うんだ。初めて知ったよ。

ヴァンさんが俺とエリーを視線だけでささっと見て、話を進めた。

「……。さて、お二方は本日はどのようなご用件ですか？

依頼ですか？それとも…冒険者登録ですか？」

「冒険者登録でお願いします。」

一応、読み書きは出来るし戦闘も…出来なくはないが表立って戦うのは苦手だ。

剣や短剣、後弓を扱えるが、どちらかといえば手先の小細工とかが得意だな」

「私も冒険者登録です。」

短弓と純粹魔法、水氷魔法や火炎魔法の初級を扱えます」

その自己紹介を聞いてヴァンさんは少し考えた後に言う。

「ふうむ、少々特殊な形ですが『剣士っぽいスカウト』と『弓使いの魔導師』ですか…本当に珍しい組み合わせですね。

それに、お嬢さんみたいに複数属性扱う魔導師も珍しい。

さて、それでは契約としましょう。

こちらの書類をよく読んで、同意していただけるのならばサインしてください」

そういつて渡された契約書だが……残念な事に知らない単語が多かった。

契約書をしっかりと読み終えたエリーが、様子に気付いたのか口を出してきた。

「契約自体には問題なさそうだし、サインしても問題ないよ」

「むう……そっか、ありがとう」

俺達の遣り取りをヴァンさんは微笑ましいものを見るような目で眺めていた。

何となく悔しい……コレではまるで俺は頭の足りない子のようなではないか。

とにかく俺はエリーからは見えない角度で素早くサインをする。

”リヨウ・イスルギ”と。

そしてヴァンさんに手早く渡す。

「はい、これに俺の”本名”書けばよかったんだよね？」

書いておいたから見てくれ」

「ほう、なるほどなるほど……」

受け取ったヴァンさんは意味深げに頷く。

「では続きまして実技試験を課したいのでアルスさんは剣士としての実技試験を行うので着いて来て下さい。

エリーさんは私の妻が魔法実技試験の場所に案内しますので少々

お待ちください」
「わかりました」

ギルドって一族経営だったりするの？
んなわけないか。

そんな事を考えていると、ヴァンさんはとっとと奥の方へ引っ込み
金髪の女性と話している。

どうやらその女性が奥さんのようだ。

再び思考する時間が出来たので、俺は今手持ちのモノに思考を移す。
俺が今持っている中で特筆すべき物はC o m pと戦闘時だけ凄い剣
と無限バンダナの3つだ。

そういえば俺が元の世界であの女に持たされた剣とバンダナに関し
て詳しい事を何も言って無かったよな。

先ずエクスカリパーなんだが、本来は『聖剣ライトニング』とか言
う中学二年生ぐらいが大好きそうな名前の剣だった。

C o m pを使って調べた所によると、所有者の意思に応じて無制限
の切れ味を発揮し、身体能力も格段に上昇するというチート武器。
更に所有者に危機が迫り所有者の能力では対応しきれない場合、一
時的に肉体を操作を行う自動防御機能付き。

そしてユーザー認証機能まであって所有者が手放しても一定距離を
離れると一瞬で手元に戻り、所有者以外が持とうとすると絶対持て
ない重さになるとか言う素敵具合。

そしてもう一つ、裏地に無限とびっしり書かれた通称『無限バンダ
ナ』なんだが、コレ：本当にただのバンダナだった。

C o m pでどれだけ調べても『ただのバンダナ？』と結論付けされ
ただけだった。

実際に身に着けて家に置いてあった弓と矢で実際に射ってみても矢の数は無限じゃなかったしね。

そもそもスーツにはバンダナは似合わないの誰かに上げてしまいか、コレ。

「そうだ、エリー。コレあげるよ」

「な、なにこれ??」

唐突に渡されたバンダナ：の裏地を見てエリーは若干引いてる。なんとなく、気持ちは判らないでもない。

「以前、仕事中に人助けしたらお礼につて渡されたんだ。

何でも、『蛇』って呼ばれる潜入工作のプロで、英雄とも言われた傭兵が使ってたバンダナの模造品らしい。

どんな時でも必ず生きて帰れるとか? ご利益はあるみたいだよ」

ご利益と出所に関しては咄嗟に出た嘘だ。

つか、そもそも嘘つきっ放しなんだしこのぐらいの嘘、今更だよな。そう思いながら手渡すと、手渡した瞬間にエリーの表情が変わって何か思考顔で呟き始める。

「……え、うそ。これつて…」

「?」

何を考えているのかわからないが、尋ねようとした所でヴァンさんが着たので俺は質問を後回しにする事にした。

その後、俺はヴァンさんの案内に従いギルドの裏門から街の外に出て柵に囲まれた訓練場と思わしき場所につれてこられた。

訓練用の案山子やらも幾つも置いてあるようだ。

「こんな所にも街の外に通じる場所があったんだ」

「ギルドでは冒険者の訓練もやっているからね、訓練を出来る場所に直ぐ行ける様に、と言う配慮だよ」

俺の言葉にヴァンさんが応じて答える。

「なるほどねえ…」

治安とか大丈夫なのか？と思ったが俺の思考が表情に出ていたのかヴァンさんが言う。

「ギルドには常に何人か冒険者が詰めて居るからね。」

魔族：この辺りだと近場の森に生息しているオークが大軍でも率いてこない限りは大丈夫さ」

遮蔽物や障害物があれば、俺一人でも何とかできる可能性があるが、それは言わぬが華。

と、いかライトニング使って殲滅できても俺の実力とは言い難いよなあ。

そんな事を考えながら辺りを見る。辺りにはまばらに人の姿が見える。

共通項としては大抵の人が近接武器を装備しているところだろうか？

「ここでは近接武器の訓練を？」

「その通り、ここは手に入れたばかりの近接戦闘用の武器を振り回したり、組み手をするための場所さ。」

ここでは訓練はもとより、君の様な新規登録の冒険者の実力を測

ったりすることもしている」

「なるほど」

「さて：一応、冒険者には色々と判断基準が合ってね。

中でも一番大事なのは『信用』と『信頼』だよ、何故かはわかるね？」

その言葉には試す意味も含まれていると思うが、一般常識を含めて考えれば答えは一目瞭然だ。

「信用がない相手に仕事を失敗されても困るし、信頼が出来ない相手はそもそも頼れないし任せれない。

そう言う事で良いですね？」

「まあ、それで良いでしょう」

ここいらで教えておくか。

「んじゃ、なんでまた俺、リョウ・イスルギがアランなんて別人の名前を騙っているかをご説明しましょう」

「ああ、頼むよ」

そうして俺はエリーと出会い、本物のアランと出会った時の事を嘘偽りなく語る。

「：ってなワケです」

語り終わった俺は、どこかスッキリした気分になって空を見上げる。

「……君は、自分が行っている事を本当にそれで良いと思っているのかい？」

その言葉は何度も自問自答した。

「さあ？正直何とも言い難いが本音ですよ。

彼女に嘘をつかなければ、少し急ぐ必要があったあの場では拙かったですし。

今はもう嘘の訂正すら無駄となってしまっている状態。

結果、俺が得た物は自業自得の苛立ちと有能過ぎな美人の彼女、です。

嘘が身を滅ぼすとはよく言ったもんだ。

今回の冒険者登録だって、本当はエリーと一緒に居る時間を一秒でも減らす為に始めたんだ。

だってーのにこの状況だ。とんだ皮肉だよ」

「……………」

ヴァンは何も言わずに俺を見ている。

その表情は無表情にも近いが同時に敵意のようなものを感じた。

「……余計な事まで喋りすぎたな。

さあ、試験を始めようヴァンさん」

「良からう、試験は単純明快。

君の実力を見せてもらおう。

武器は訓練用の木剣でいいな？」

そういつて、壁に立てかけられていた木で作られた剣を放り投げてコチラに寄越す。

俺はそれを受け取り、軽く3回ほど振り回してから正眼に構える。

長物を持つのは学生時代の剣道の授業以来だが、やってやれない事は無いと考えて相手を見据える。

ヴァンさんは木剣を片手で持ち自然体の姿だ。

木剣故に片手でも十分に振り回せるからだろう、と言うのが理解で

きる。

「君のチカラ、見極めさせてもらう！」
「っ!!！」

相手が素早く疾走して接近する。

そして同時に構えは袈裟にぶった斬るコースに変わっている。
気付いた所で剣を振るわれる。

「せりゃあっ！」

「うわっ!？」

俺は及び腰のまま相手の木剣を防ごうと手に持っていた木剣を前に出すと。

木剣と木剣がぶつかり、相手の力に耐え切れず相手の剣と一緒にあらぬ方向に体が泳ぐ。

「おうわっ!？」

体が泳ぐのと同時にバランスを大きく崩し、気がつけば相手もやや体勢を崩していて、頭が丁度勢いで大きく持ち上がっていた俺の片足が直撃するコースだった。

そして、その片足はソコソコの勢いで相手の後頭部を強く叩き付け、一撃でダウンさせてしまった。

蹴ってしまった時の感触から、かなり良い一撃になってしまったと思われる。

「……えっと、大丈夫か？」

「――」

ヴァンさんからの返事はない。

その状態に俺は焦る。

冗談ではないぞ、頭を強く打ったら色々と拙いんだからな!?

「ちょ!?!だ、誰か医者呼んでくれー!!」

俺の言葉を聞いて、様子を見ていた外野の一人が急いでギルドに戻っていった。

残っていた数人は驚いた風に俺とヴァンさんを見ている。

「おい、あの変な服の新人見たか?

へっぴり腰だと思ってたけど一撃でヴァン教官をのしちまったぞ!?!」

「見たぜ、あいつ…もしかして実はトンでもねー凄腕の新人か?」

「いやいや、ありやどう見てもまぐれだろ? じゃなきゃ俺たちが報われねーよ。

だって、教官ってアレで騎士団の元・団長だったんだろ?」

「いや、待て…:もしかしたらアレは相手の油断を誘い、受け流しとカウンターで相手を倒すと言う流派の技なのかも知れんな。

そういう流派が極東の国から流れてきていると言う噂を聞いた事がある」

「うげっ、まじかよ!?!じゃあもしかして本物!?!」

あ、あははは…:なんか素敵に誤解されているような。

つか、極東って何処だよ。日本とか中国っぽい国か?

それから暫くしない内にヴァンさんはギルド職員に運ばれ、俺はギルドの待合室まで連れて行かれた。

そこでエリーと合流し、ヴァンさんの奥さんと思わしき女性から『

2人とも合格だよ、明日には必要なものコッチで揃えて渡すから明日の正午ぐらいに来ておくれ』言われ、今日はもう家に帰って休むことにした。

ちなみに、ヴァンさんはあの後救護室で暫く休ませて居たら復活したらしいが、まだ調子が悪いとかで出てくることはなかった。

「アラン、なんだか凄く噂になってたね。

元騎士団の団長様の剣をいなして蹴り一発でダウンさせた凄いやつって！

森でのオーク達との戦いや街道での魔物との戦い、それにあの騎士団長：アラン別人みたいに強くなっちゃったね」

「はっはっは、本当に別人だったりして。

まあアレだ、運が良かったんだよ俺は」

未だにアランと呼ばれるとイライラするが、褒められている事は嬉しい。

もっとも全部俺の実力じゃないけどさ。

チートな武器と今回に限ってはとんでもない偶然だ。

まあ、道具も運も全てひっくりくるめれば実力の内だけど。

なんだかコレを機に身の丈に遭わない事をやらされそうな、そんな気がする。

だって、似た様なことが元の世界でもよくあったしなあ…。
俺の明日はマジでどっちだ。

（エリー編に続く）

4. /魔導と反則的な魔力。そしてアランへの疑問

< Side Elie

姉夫婦が旅立って一週間。

私はアランに今までの花嫁修業で覚えた様々な料理を振る舞い、家事技術を存分に振るってみせた。

特にアランは私の料理の全部に一々感想をくれた。長ったらしい物ではなく、単純に一言。

シチューを作った時は…。

「結構美味い。でももう少し煮込んでみると良いと思う」

サラダを作った時は…。

「このドレッシング、少ししょっぱさが強いな、もう少し控え目にすると思う」

得意のクッキーを焼いた時は。

「このクッキーは文句なし！最高だ！！」

正直、アランの舌がここまで良い物だとは思わなかった。

その全てが言われてみると確かにその通りだと納得できたし、クッキーを褒めてもらえたのは嬉しかった。

私が家事に精を出している間、アランは調べ物があるといってお義兄さんの部屋で色々な書物を手にとって何かを調べていた。残念ながらタイトルは読めなかったけれど、勉強嫌いのアランが書物に興味を持ってくれた事を私はうれしく思う。

コレを機にアランと一緒に本の事を話題に出来れば嬉しいなと思い、私は全力でアランを応援することにした。

先ず、眠気対策で良く飲まれることがあるカヒの炒り豆茶。

独特の苦味と芳ばしい香りが人気の庶民が愛飲する飲み物の一つだ。それを持ってアランの部屋に行くと、アランは驚いた表情で問い掛ける。

「どうしたんだい、エリー。何か問題でも起きたか？」

どうやらアランは何か問題が起きたと勘違いしている様だ。私はちよつとだけ笑ってから。

「頑張っているアランって素敵ねって思っ

カヒの炒豆茶を持ってきたから、良かったら飲んで頂戴」

そう言っ

てアランに渡すと少し驚いてからアランは『ありがとう、頑張るよ』と軽く笑いかけてくれた。

アランが扉の向こうで何か言っていたようだが、その時の私にはあまりに小さな声でよく聞き取れなかった。

「……まさかコッチでもコーヒーがあるとはねえ」

それから私は夜になってもアランが頑張って勉強をしている事を知り、是非頑張っ

て欲しいと言う思いから毎晩カヒの炒豆茶を持って行くようにした。

そして時間が今に戻るのだけど。

「って訳で、いつまでも居候っていうのもアレだし、無職も格好悪いんで働こうと思うんだけど…。」

エリー、なんかアドバイスないか？」

「アドバイスって言われても…。」

アランの言葉に私は思わず困ってしまう。

勤労意識があるのは喜ばしいのだけど、この一週間の穏やかな日々が終わってしまうのは惜しいと思う。

それにアドバイスと言われてもアランがどういった職業を求めているのか判らないから何とも言えないもの。

「いやあ、どんな職でも良いんだけどさ、エリーの意見があればそれにしようかなって」

意外な事に、アランは「どんな職業でも出来て当然」と言わんばかりの態度で私に言った。

「前みたいにガードの…防衛関連の仕事は駄目なのかしら？」

「ガードか…。」

アランは少し考える素振りを見せてから頭を軽く横に振ってから私に言う。

「ガード以外の仕事を考慮してみようかと思ってたんだ。勿論、ガードが嫌って訳じゃないけどね…。」

折角環境が変わったんだから色々やってみたい、そう思ったのさ」

その言葉を聞いて少し考えてみる事にした。

アランの実力では正直殆どの技術系の職業ではやっていけないと思うし、こう言ってはなんだけどアランは知識があるほうでもない。だとすると、やはり普通の職業は無理。

ならいつその事冒険者でも勧めてみようかしら？

多少危険だけれど私がフォローに回れば良いだけの話だし。きつとうまく行くだろう。

あの時の様にアランに任せっきりにする積りはもうない。

私はそう結論付けた。

「なら、冒険者はどうかしら？

読み書きとそこその能力が無いといけないのだけれど、色々やってみたって言う面では最適だと思うわ」

「あ、それじゃあそれで」

アランの返事は即断即決のものだった。

家を出て、ギルドに向かう途中に余り外の情報を知らないアランにこの街について教えながら歩いていると、アランは相槌を打ったり関心しながらキツチリと話を聞いてくれた。

「なるほど、エリーは教えるのが上手いな。わかりやすかったよ」

アランは何時になく殊勝な返事を返して私にお礼を言った。

ここ最近のアランは以前より大人っぽくなったと思う。

それがどこか頼もしくて、少し寂しく感じてしまう。

アランを連れてギルドの建物の前まで来た。

ここは行政区の特に街の囲いとなっていて、外壁に近い所にある巨大な施設で、建材も全て石造りで非常に頑丈だ。

アランは立派な建物に驚いたのか感慨深そうに建物を眺めていた。なんだか私のこと、すっかり忘れていそうで少しだけ意地悪したくなってしまう。

「ここがギルドよ。アランの事だから忘れてると思うけど……」

そう、既に一度来たことがあるのに、これなんだもの。

アランは少し罰が悪そうな表情をした後、誤魔化す様に中に入ろうと言って先に入ってしまった。

私はアラン追いながらギルドの施設の基本的な説明を行う。

と、言ってもこのあたりは全部お姉ちゃんとお兄さんの受け売りなんだけどね。

「エリーって本当に物知りだな」

「えへへ、アランと一緒にいる為にイロイロな事、勉強したんだよ」

感心した様子で私に言うアラン。

だけど、何故か一瞬表情が曇ったように見えた。

なんでかしら？

「そう、だな。凄いよエリー」

追求するか、それともまだ様子を見るかの判断は、今回は後者にすることにした。

お話をする機会はこれから幾らだってあるのだし。

「でも、まさかお姉ちゃん達みたいに夫婦でギルドに勤めれるなんて、思わなかったわ」

「え？」

アランが驚いたように声を上げる。

ああ、そういえば私の考えをまだ一度も告げていなかったっけ？

「アラン一人だけに働かせるのは申し訳ないし、それに不安なもの。それに私、いろいろ出来るのよ？」

弓だって覚えたし、純粋魔法、水氷魔法や火炎魔法も初級の物なら扱えるわ」

「弓に魔法を3系統も？……何時の間に」

アランの言葉を尻目に私は辺りを軽く見やる。

ギルドの中には多くの人がごった返していた。

ギルドに依頼をしにきた街の人や、職人に依頼したモノを受け取りに来ている人、奥の方で商談を行っている商人。

そして何より依頼を受けたり結果を報告しに来ている無数の冒険者たちだ。

年齢は20代から30代が多い様に見える。

もちろんそれ以上の年齢の人もしれば、私達よりも若い少年少女の冒険者達の姿も見える。

多くの人が一瞬だけ私たちに注目して、すぐに注意をはずした。

歩みを進めてカウンターまで進んで声をかけると、予想していたよりも下のアングルから声がかかった。

「いらっさいませ。依頼ですか？」

受付に居たのは、見た目6歳ぐらいの子供だった。

「…………君が受付の担当？」

「はい、それですよ！」

アランがあっけにとられたように子供に尋ねる。

子供は物怖じすることなく元気よくアランに返事を返す。

おかしいわね、このギルド……そんなに人手不足って話を聞いたことはなかったのだけれど。

その光景を見ていた子供の身内と思われる壮年の男性が急いでこちらにやってきた。

身長はアランと同じぐらい。やや筋肉質で腕っ節が強そうで、渋い顔をした誠実そうな人物だった。

彼は子供を慌てて下がらせて場所を代わる。

「息子が失礼しました。ようこそユディツァ総合ギルドへ。

私は当ギルドのヴァン・ホーテンと申します」

「あ、コレはご丁寧にどうも。

俺はアラン……と名乗っています。

後で個別でお話するので今はアランと」

「アランの婚約者のエリー・ウェアドと申します。よろしく願います」

アランに引き続いて私も挨拶をする。

態々婚約者って言ったのは、私なりに色々と保険をかけたかったからだ。

あの貴族の男がまだ私を諦めていなければ、面倒なことになってしまうから。

「……。さて、お二方は本日はどのようなご用件ですか？
依頼ですか？それとも……冒険者登録ですか？」

ヴァンさんは少し呆気にとられたのか沈黙した後、突っ込まずに話を進めることにしたようだ。

「冒険者登録でお願いします。

一応、読み書きは出来るし戦闘も…出来なくはないが表立って戦うのは苦手だ。

剣や短剣、後弓を扱えるが、どちらかといえば手先の小細工とかが得意だな」

アランがすらすらと自分にできることを話す。

勉強を頑張ってたのは知っているけど、弓なんて何時の間にかできるようになったのだろうか？

「私も冒険者登録です。

短弓と純粹魔法、水氷魔法や火炎魔法の初級を扱えます」

弓と純粹魔法と火炎魔法は村に居た時に覚えたもので、水氷魔法はこちらに着てから覚えた魔法だ。

今は電撃魔法の勉強もしているけど、こちらはイメージが難しくていまだに習得ができない。

魔導士としては今一つ物足りないところだ、と私は思っている。

私達の自己紹介を聞いてヴァンさんは少し考えた後に言う。

「ふうむ、少々特殊な形ですが『剣士っぽいスカウト』と『弓使いの魔導師』ですか：本当に珍しい組み合わせですね。

それに、お嬢さんみたいに複数属性扱う魔導師も珍しい。

さて、それでは契約としましょう。

こちらの書類をよく読んで、同意していただけるのならばサインしてください」

え？複数属性を扱う魔導師って珍しかったの…？

私のお母さんもお姉ちゃんも私よりも多くの属性の強力な魔法を扱うから全然自覚がなかったわ。

もしかしたら、これは私が考えていた以上のアドバンテージかしら？
そう思いながら手渡された契約書に目を通す。

書いてあった事は要約すると…。

- ・ギルドに所属するからには無闇矢鱈に暴れえるな。
違反した場合はそれ相応のペナルティを与える。

- ・クエストで負った怪我や病気に關してはこちらではなんら保障はない。

自己責任で済ませること。

- ・ギルドに登録する事により、ギルドメンバーとしてクエストを受けることができること。

- ・ギルド関連施設がサービス価格で利用可能であること。

- ・犯罪者となった場合、ギルドメンバーとしての全ての権利を剥奪し、追放されること。

という事ぐらいだった。

細々とした部分が多く書かれていたが、重要なのはこの辺りだろう。
そしてこの辺りは冒険者としては当然のことなので問題はない。

確認し終えてからアランを見ると、まだ云々と唸っている姿が見え

てしまう。

その姿に少し苦笑してしまいがちながらも助言することにした。

「契約自体には問題なさそうだし、サインしても問題ないよ」

「むう…そっか、ありがとう」

アランは少し悔しそうに返事をする手早くサインをしてヴァンさんに手早く渡す。

「はい、これに俺の”本名”書けばよかったんだよね？」

書いておいたから見えてくれ」

「ほう、なるほどなるほど……」

受け取ったヴァンさんは意味深げに頷く。

どうしてだろうか？

「では続きまして実技試験を課したいのでアルスさんは剣士としての実技試験を行うので着いて来て下さい。

エリーさんは私の妻が魔法実技試験の場所に案内しますので少々お待ちください」

「わかりました」

ヴァンさんは奥の方へと行き、金髪の女性と話している。

どうやらその女性が奥さんのようだ。

アランはその間に最近手に入れたらしい不思議な籠手を弄っていた。なんでも『こんぷ』というらしい、とても便利な道具だという話なのだけど…。

何がどう便利なのか、私にはちんぷんかんぷんでまったく理解できなかった。

アランは籠手を弄り終わると衣装の上着から緑色の布切れを取り出して私に差し出す。

「そうだ、エリー。コレあげるよ」

「な、なにこれ??」

唐突に渡されたバンダナ：の裏地を見て私は若干引いてしまう。

良くわからない記号が延々と書き連ねられているのだ。

不思議な力を感じるけど、それ以上に不気味さが目立つ。

「以前、仕事中に人助けしたらお礼になって渡されたんだ。

何でも、『蛇』って呼ばれる潜入工作のプロで、英雄とも言われた傭兵が使ってたバンダナの模造品らしい。

どんな時でも必ず生きて帰れるとか? ご利益はあるみたいだよ」

アランはスラスラとこの布切れ：というかバンダナ? の出所の説明をする。

それがどこまで本当かはわからない。

だけど、これに不思議な力があるのは確かだ。

そう、持っているだけで魔力が体中に満ち溢れてしまいそんな感覚が…。

「……え、うそ。これって…」

「?」

私は気づいてしまった。

このバンダナはアランが思っているよりもすごい物だわ!

神器といってもおかしくは無い。

そしてアランの言葉も嘘ではないと確信してしまった。

（このバンダナ：持っているだけで魔力が溢れかえる…！）

私の感覚が正しいのならば、魔導士にとって自分の持つ全てと引き換えにしても欲しがってしまう様な神器だ。

（無限の魔力を持つ『蛇』のバンダナ：ちょっと長いから『無限バンダナ』というところかしら？）

アランにさらに詳しく尋ねようと考えた所でヴァンさんが着たので私は質問を後回しにする事にした。

アランがヴァンさんで行ってから何分もしないうちに、先ほどカウンターの奥に見えた金髪の女性が私のところまで来た。

「はじめまして。エリー・ウェアドさんですね？

ギルド職員のピュコア・ホーテンです。

これから魔力測定と魔法の訓練場へと案内いたしますのでついてきてください」

「はい。よろしく願います、ピュコアさん！」

ピュコアさんに案内されて辿り着いたのはギルドの地下にある試射場だった。

試射場は2種類あり、一つが弓やスリング等の試射場、もう一つが魔法の試射場だ。

弓の方の試射場は個人で利用する際はそれほど費用は必要ないが、魔法の試射場は維持費が高い為に利用する為の費用も馬鹿にならない。

「それじゃあ、先ずは弓の扱いから見させてもらいましょうか。

的のより中央に当てる事、そしてなにより短い時間でこなすのが

ポイントが高いわ。

ただ、勿論外してしまえば意味がないからそこだけは気をつけて欲しいわね。

射る回数は5回だけよ。

それと、今回使う弓と矢はこれね」

「わかりました。それでは早速」

私は支給品の弓と矢を持ち、的を見据えて一息に矢を番えて引き、構えながら的を射抜く自分のイメージを得る。

大よそ30m先にある幾重にも丸を描いた的。その大体真ん中のあたりを射抜けるイメージ……！

これは私なりのやり方なのだけど、弓を射る際に一番大事なのは直感的なイメージ力だと思う。

的を射抜くイメージを得られれば、その通りに当たる事が多いし、その逆ならば外れることが多い。

そんな事をふと一瞬だけ脳裏にちらつかせながら、私は現実とイメージの一致を感じた。

「——っ！」

矢は私のイメージした道理に進み、的の中心からやや上の位置に突き刺さった。

ほぼイメージ道理であり、若干の精神の高揚を感じながらも努めて冷静に二射目を行う。

「——っ！」

しかし、矢はイメージと現実が一致せず的からやや逸れて当たらずに終わった。

これは矢を射るタイミングがイメージよりも若干早かったせいだ。先ほどの成功で調子に乗ったせいだと自覚する。続いて三射目。

「——っ!!」

時間をややとってしっかりと狙い、射る。

今度は当たりはしたがイメージに迷いが出て中心から大分ずれている。

四射目。

「——っ!」

今度はイメージと現実が理想的なまでに一致。

詰まる所はど真ん中に命中だ。

五射目。

「——あっ!」

弓を引いたのは良いが、指先で汗で矢を手放してしまう。

明らかな誤射だ。やってしまった・・・と思いつつも矢の行方をきっちりとする。

すると、矢は的のふちに何とか刺さっている、という様相だった。

「最初と四射目が特に凄かったわね。修練を積みめばもっとうまくなれそうね、アナタ。

五射目に関しては自分の状態をよく把握しましょうといったところかしら。

あなたの腕前は大体わかったわ。次、魔法の方に行って見ましようか」

「はい」

褒められはしたが、同時に自分の未熟さも浮き彫りになった気がする。

もつと頑張ろう。

次に連れて来られたのが壁中に魔法文字が彫られ、彫られた魔法文字がうっすらと輝いている魔法の試射場だ。

広さは弓の試射場よりも若干狭い。

「まず、ここの説明からしたほうがいいかしらね。

ここでは非実態系魔法の射撃の試射を行えるの。

的はあの吸魔の水晶よ」

私はピュコアさんに言われて水晶を見る。

吸魔の水晶は澄んだ透明の石の塊で、聞いた話によると魔力を吸い取って輝くらしい。

それ故に魔法に対しては絶大な防御力を誇るとか…。

そして、魔法の属性によって輝きが異なる、という話も聞いたことがある。

だが、それより何より気にするべき所は非常に高価すぎるということだろう。

クルック（この世界で言うところの鶏）の卵程の大きさと金貨1枚（日本円で百万円相当）だと聞いたことがある。

的となっている吸魔の水晶は卵の5倍ぐらい大きい。

だとすれば、金貨5枚…どころかさらにその五倍である金貨25枚ぐらいの価値はあるのかもしれない。

「自分の実力で打ち出せる最大火力で攻撃してみて頂戴」

「わかりました…行きます！
我が内に眠りし力の流れよ、我が前にありしモノを貫く槍となれ！
フォトン・ランサー！！」

イメージして紡ぎ出すのは何者をも穿ち貫き通す私の最高の槍！
それを制御しきれる最大魔力で編み出し…。
それを弓を要る時のように構え…。

「いけえっ！！」

射出する！

普段よりも遥かに強い魔力を込めて打ち出した私の魔力で編まれた
光の槍。

それに一瞬で多くの魔力を吸い込まれる虚脱感を感じたが、それも
即座に無限バンダナからの魔力供給で回復してしまう。
本当にこのバンダナ…ずるいわね。

でも全力で魔力を使った後のこの一瞬の虚脱感…少し良いかも。

さて、私が軽く思考をずらしている間にフォトン・ランサーはキチ
ンと吸魔の水晶に命中し、そしてとても良く輝いた。

それはもう輝き過ぎで、様子を見ていた魔導士の一人が「うお、ま
ぶしっ！？」とか言ってしまう位にだ。

「これ、凄い逸材ね…でもこれだけ撃っても…この子ケロリと
してるわ。

末恐ろしいわね、最近の子は」

ピュコアさんが戦々恐々としながら呟いていた。
もしかして、いえ、もしかしなくてもやり過ぎかしら？

「魔力の扱いも制御の方も問題無さそうね。

これだけの實力があるなら街周辺の魔物狩りも問題無さそうね」

「そう…でしょうか？」

私は思わず弱気になってたずね返してしまう。

故郷の村では弓や魔法を使つての狩をお父さんと一緒にしていたが、村を出て以降は一度も戦つてはいない。

むしろ、アランに任せきりだった。

アランの本当の剣の實力を考えると、私は本当に足手纏いだつて思えたから。

「実戦経験が無いんだとしたら少し心配だけど、魔導士としてはこの辺りで冒険者をしてる魔導士に引けを取らないんじゃないかしら？」

弓もそこそこ使えるし魔法は一級品。中距離から遠距離の攻撃に關しては拔群ね。

そうになると近距離が不安になってくるけど…後は貴女の婚約者と一緒に頑張つて見なさい」

「はい」

その後は他愛も無い雑談をしながらピュコアさんと待合室まで行つて、アランとヴァンさんを待つこととなった。

会話をしている最中、いくつか判明したことがある。

それは姉夫婦とピュコアさん、ヴァンさんは王国と神殿からの依頼で一時期は隊を組んでいたという事。

ホーテン夫妻は元々ヴァンさんが王国騎士でピュコアさんが太陽神神殿の司祭様。

駆け出しの姉夫婦は初々しいカップルで、それに当てられて自分たちも恋して結ばれて。

そして王国と神殿の依頼を無事終えた頃にはピュコアさんの妊娠と

出産をきっかけに隊は解散。

ホーテン夫妻は様々なしがらみから抜け出す為にお役目を辞してから正式に結婚し、ギルド職員として働き始めた、ということ。

司祭と騎士団長というだけあって双方には婚姻には厳しい制限があるし、そもそも政治と宗教で色々あったのだろう。

そういう風に見る事もできる……お母さんの教えだけでも。

「でも、驚きです。ヴァンさんが元は騎士団でしかも団長様だったなんて。

結婚の後は元の騎士団に戻られることは？」

「あの人なら、それも可能だったのだけれど……」

アルス君達との冒険が忘れられないって言って、それに騎士団だと決まりだの何だのと大変だしいまさら戻る気も起きないって、ね。もつともそれは私も同じ。

私とヴァンは国の為、人の為、神の為に頑張って来ていたのだけれど、それに疲れてきちゃってもいたから。

丁度良い機会だったのかもしれないわ」

ピュコアさんは少しだけ寂しそうにそう言う。

未練が多少はあるのだろう。

「ふふっ、ごめんなさいね、少し詰まらない話をしちゃったわ」

「いえ、そんな！ピュコアさんや姉達の冒険者時代の話を聞いたのでとても興味深かったです」

その後はお互いの得意料理の話や料理におけるコツなどの情報を交換し合って有意義に時間を過ごしていると、

アランが待合室に入ってきた。

なんでも模擬戦でヴァンさんと遣り合ったそうなのだけれど、本人

曰く。

『偶然に偶然が重なった上での奇跡的な無傷の勝利』

を得たらしい。

どこまで本当なのか疑わしく思う。

だって、アランは私にだってオークを一太刀で切り捨てれる本当の実力を隠し持っていたのだから。

それを聞いていたピュコアさんはため息を一つついてから、事務的に私たちに言う。

「お2人とも合格です。おめでとうございます。

明日には必要なものこちらで揃えてお渡しますので、明日の正午にまた受付まで来てください」

そう言い終った後に、ピュコアさんは一言だけアランにお説教。

「それとアラン君、ヴァンは腐っても元騎士よ、謙遜もそこまで行くと嫌味にしかならないから気をつけて頂戴」

「いや……あー、わかりました。気をつけましょう」

ピュコアさんからの言葉に困ったように視線を彷徨わせた後、仕方無し、といった具合に頷くアラン。

「それでは、私はこれで失礼いたします」

そういつてピュコアさんは席を外した。

「それじゃあ俺達も行こうか、エリー」

「そうね、アラン」

二人揃って待合室を出ると、ギルドに來た時よりも強い好奇の視線が私たちに向かってきている事に気づいた。

そして周囲で私たちを噂していることにも気づいた。

私に対しては『王宮魔導士並の魔力を持った怪物新人』。

アランに対しては『元騎士団長を剣を軽く捌いて蹴り一撃で葬ったバケモノ』何て言われている。

他にも色々と言われているけど、とりあえず無視しておくに限るわね。

「アラン、なんだか凄く噂になってたね。

元騎士団の団長様の剣をいなして蹴り一発でダウンさせた凄いやつって！

森でのオーク達との戦いや街道での魔物との戦い、それにあの騎士団長：アラン別人みたいに強くなっちゃったね」

「はっはっは、本当に別人だったりして。

まあアレだ、運が良かったんだよ俺は」

アランは参ったなあと言いながら苦笑する。

だけど、そうは言いながらもアランは褒められている様で嬉しそうだった。

それは私も同じだ。

私たちは少しの喜びを胸にしたまま家に戻って、アランは疲れたから少し休んでくるといって部屋に戻っていく。

私は時間的にそろそろ夕食の用意にかかる時間だったので、調理準備に取り掛かることにした。

「今日は……そうね、鍋物にしようかしら。

確か昨日買ったお肉がまだあったはずだし、野菜がまばらにあっ

たから：うん、この材料なら問題無さそうね」

材料を確認して頂く。

ごった煮になってしまいそうだが、そこで上手く味を引き出すのが女の腕の見せ所だわ。

お母さんから鍋物に関しては凄くみっちりと教えられたのだし、頑張らなきゃ！

そう思って料理をしていると、アランがいつの間にか部屋から出てきていた。

私はアランに背を向けたまま、鍋の日の様子を見続ける。

「アラン、お夕飯はもう少し待っていてね。もう少し煮込めば美味しくなる頃だから」

「ん」

返事をするアランだけれど、何でか気配が近くなっていた。

「アラン——ん！」

いつの間にか至近距離にまで来ていて、振り返るのと同時にキスされてしまう。

驚きで半開きになっていた口にアランの舌が差し込まれ、そして私の舌と絡み合う。

「——！」

お料理が気になって少しだけ拒むけど、アランはさっと私の腰と後ろ頭に手を伸ばして、情熱的にキスを続ける。

息がしづらくて少し苦しいけど、段々と気分が高揚してきて頭が蕩

けてしまいそう。

そして、少しの間だけ唇と唇が離れる。

「あ…」

唇が離れてしまった事を大いに残念に思っていると、アランの目の色がここ最近の少しイライラとしたけど大人っぽく見える物や、今さっきの私を求めるものから、何時もの慌てん坊のアランに戻っていく。

「……あ！そ、そのごめんエリー！

君を見てたら凄くキスがしたくなってその…あの…ごめん！」

アランは本当に正氣に戻ったのか、いつものアランらしく慌てて去っていった。

「……もう、アランってば本当に判ってないんだから！」

アランは何時も私にお預けをする。

それは本当にずるいことだと思う。

ここ最近のアランは少しおかしい。

昼間はやっている事が大人っぽくて少し凛々しいアラン。

夕方頃は時々情熱的で、私を融かしてしまいそうなキスをするアラン。

夜は時々だけど何時もの慌てん坊で、だけどほんとでできるアラン。

そういえば、アランが慌てん坊のアランの時は、何時もあの不思議と引き付けられるあの剣を持っていないような気がする。

もしかして…あの剣に何かあるのかしら？

「あ、いけない！お鍋！！」

目を放している隙にお鍋は噴出していて私は久しぶりに失敗したと
感じる。

「アランの事もそうだけど、今はお料理に集中するべきだったかし
ら」

私はアランに対して抱いた疑問を一時保留し、食事の準備を続けた。

アランは今日のお夕飯に対しては美味しい美味しいというだけで、
余り詳しい評価が聞けなかったのが残念だった。
嬉しいけど残念というのは欲張りなのかしら？

Extra 01. とある冒険者夫婦の帰郷〜故郷壊滅〜(前書き)

いわゆる外伝話でやや短めですがかなり超展開(?)です。
アルスとマリーが主人公のエセ戦記モノ…?

Extra 01. とある冒険者夫婦の帰郷と故郷壊滅

アルスとマリーがユディツアを出て半日ほどの時間が経った頃、二人はフェチャシュの森の中、一番死臭が強い場所に居た。

ここに来るまでは二人が予想していたよりも非常に簡単だった。

何せオークを始めとする魔族やヴォルフ（凶暴な狼のような魔物）達の屍骸があちこちに散らかしっぱなしになっていたのだ。

それはアランの死を伝え、現在エリーの相手をしているリヨウ・イスルギから二人に齎された情報の通りだった。

そして、死臭の強い場所の中央に彼…アランの遺体は遺されたままだった。

「アラン…！アラン…！！うう…ああ…あああああ…！！」

「アルス……」

アルスがアランの遺体に駆け寄り、アランの奇跡的に無事だった頭を胸に抱いて咽び泣く。

「馬鹿野郎…！馬鹿野郎…！馬鹿野…郎…！！」

「……………」

泣きながら馬鹿野郎と連呼するアルス。

マリーはその光景を見て悲しげに目を伏せる。

暫くした後、アルスはアランが身につけていたネックレスと自身が身につけていたネックレスを交換する。

「悪いな、マリー待たせた…」

「構わないわ：アラン君のことですもの」

「ああ……。それじゃあ、頼んでいいか？」

「判ったわ、墓穴は私に任せて」

マリーはそういってアランの前まで進み、魔力を練りながら言葉を紡ぐ。

「母なる大地よ、命失いし哀れなる汝が子を優しく抱き安らかな眠りに着かせたまえ：」

マリーが即興で作り上げた魔法はアランの遺体を包み込むように地に沈み込んで行き、そしてその後には墓標とも言える石版が出来上がっていた。

更に、魔道に長けた者ならば気付くだろう、この墓の周辺に認識障害の結界と浄化の結界が張られた事を。

「アルス、この後はどうするの？」

「一度ルクツーに行こうと思う。」

アランの事とエリーの事を話さなければならぬからな」

アルスは弟を失った悲しみを押し堪えて努めて冷静にマリーに返す。

「リョウ君の事はどうするの？」

エリーの事もあるから、彼と：早めに何か対処を考えるべきだと思っただけだ」

「……情けない話だが、俺はこういった場合どうすれば良いのかまったく見当もつかない……。」

いっその事、エリーがアランの事を全て忘れてしまえば良いなんて思ってしまったぐらいだ。

……とてもじゃないが現実的じゃない」

アルスが辛そうな表情をしながらマリーに言う。
しかし、マリーはその言葉ではっとした。

「……待って、現実的じゃない……なんて事は無いかもしれないわよ」
「どういうことだ？」

「リヨウ君が私たちに言った言葉、覚えてないかしら？」

”呪いで記憶の一部が奪われている”って言う言葉を」

その言葉でアルスもハツとする。

詰まり、呪いではあるが記憶の一部を奪う、という方法があるのだ。
そしてその被害者も実在する。

ならば諦める必要は無い。探せばいいのだ……冒険者らしく！
そう考えた二人であるが、それがリヨウのでっちあげた嘘だという
事には気づいていない。

「なら、早速魔法に関して詳しい人物に尋ねて回る必要があるな」
「なら……ウチの母さんに聞いてみましょう？」

あの人、なんだかんだで昔は魔女と言われる程凄腕の魔導師だったって私たち姉妹に自慢していたもの」

「あ……そういえば腕利きの魔導師だっけ？けど殆ど引退してたんじゃない？」

今のアイリさんって学者で教師だと思ってたぞ、俺がずっと」

「それは仕方ないわ、あの村では教師役を勤められる人が魔導士である母さん以外に居なかったんだもの。」

そうなれば村でモノを教えられる母さん以外誰も教師役が務まらないじゃない？」

マリーはやれやれと言わんばかりに肩をすくめている。

彼女の旦那は剣技に関しては王国でも有数の使い手だが、知識に関してはどうにも覚えが悪い。

まあ、だからこそ自分がフォローできるし共に居るのだけど、とマリーは思う。

（ただ、フォローし過ぎてダメになる典型例：アランとエリーって
いう反面教師があったからこそ今の私たちの関係だとも思うけどね。
）

アランとエリー、ぶっちゃければ故郷であるルクツーの村で一番の
純真バカップル。

悪運が強く、優しくてまじめだけど才能に恵まれないアランと才能
と容姿に恵まれるけど…その実、運という物に見放されてるエリー。
誰から見ても…お似合いの二人だと言われていた。

特に、アランの悪運でエリーの不運を凌ぎ切っている姿が。

しかし、アランの悪運も遂に不運に負けてしまった。

崖崩れに遭っても、崖から海に落ちて海の魔物に襲われても、食中
毒で村中ダウンしていた時期でもしよっちゅうエリーの不運を肩代
わりしてギリギリの淵から生還したアランは今回ばかりは生き残る
ことが出来なかった。

「村に帰るなら、親父にもアランの事、教えなきゃな」

「辛いわね…」

「…ああ」

この後、アルスとマリーはルクツーに辿り着いて予想外の事態と遭
遇するとは欠片も思っていなかった。

半日かけて森を脱出した二人が見た村は、家が焼け落ち、死体が当たり散らばる廃村だった。

村を炎が包み込んでいる。

悲鳴が聞こえている。

その現実をまるで悪夢だと言わんばかりに二人の思考がわずか一瞬であるが固まってしまう。

「ど、どういう事だ!？」

「——っ!？」

アルス! 敵よ!!」

うろたえるアルス、しかし先に彼が慌てたおかげで冷静になったマリーが周囲の気配に気がつく。

周囲に居るのはこの辺一帯を支配する領主の囲っている私兵の軽鎧を着込んだ男たちが4人。

「冒険者か、運が無いな貴様ら…見られたからには生きて返さん!」

男たちの中で一番実力のありそうな男がそう言って剣を向ける。

「まさか…! 領主が村を襲撃したと言うの!？」

「反逆者が居る村…だからな」

マリーの言葉に男は返す。

マリーはその言葉でおよその事情が読めてしまった。

（まさか、あのクソバカぼっちゃんのエリーが手に入らなかったからってこんな馬鹿げた事を!？」

まったく成長してない! むしろ最悪じゃないの!?)

嘗て、アルスとマリーとはある依頼を通じて領主の息子と遭遇したことがある。

それは領主の息子にかどわかれた村娘を助けて欲しい、と言うものだった。

当時のアルスとマリーは領主が良い領主だと聞かされていたので何かの間違いではないか？

等と思いつつもその依頼を受け：そして領主の息子が父親の威を借りて鬼畜の所業を行っていたことを知ったのだ。

領主もこの事実を知らず、それを知って息子を館の離れに軟禁し、教育をしないおすと宣言したのだ。

それがこの結果：：マリーはあの時キチンと証拠を残さず殺しておくべきだったと思わずにはいられない。

本当に、アレは後味の悪い事件だったのだから。

「この村に反逆なんて考える馬鹿な奴が居るわけないだろう！？反逆なんて考えなくてもこの村は十分にやっていていたんだから！！」

キスミの領主は何を考えている！？」

「我々は、命令を遂行するのみだ！やるぞ、貴様たち！！」

（ごめん、反逆者候補ならここにいますわ）

マリーが一瞬だけアルスに心の中で告げるのをよそに、兵士達が剣を構えて二人に襲い掛かる。

「この：馬鹿野郎がああああ！」

アルスは吼える。

怒りと嘆きを込めて大きく吼える。

同時に鞘に収めていた剣を抜き放つと同時に剣の腹で兵士一人の胴を風ぐ。

「冷徹なる氷の鉄槌よ我が怒りの一撃となりて敵を薙げ!!」

アイス・ハンマー!」

マリーも同時に魔力を高めて氷の鉄槌を自分に接近する兵士に向かって横薙ぎ放ち、相手を吹き飛ばすだけに留める。

二人は共通して殺ではなく戦闘不能を目的とした戦闘にスイッチを入れている。

『可能な限り殺しはしない』それが冒険者としての二人のやり方だ。何度も甘いと言われて来たが、それでも崩すことの無い不殺のスタイル。

それが此処でも発揮されている。

「我が風の如き剣筋、貴様に見切れるか!？」

アルスが素早く駆け寄り兵士の一人に切りかかる。

兵士はアルスの一撃を防ごうとするも、その防御をするりと抜けてアルスの剣は再び兵士の一人の胴を薙いで気絶させるにいたる。

「ぬ、ぬおおおおお!」

「小さき炎よ爆ぜろ、プチ・ファイアボム!」

僅かな言葉だけで小さな炎を生み出し、その炎を兵士に投げつけるマリー。

炎は兵士の胸当てに当たると強い衝撃を巻き起こし、兵士を大きく吹き飛ばした。

二人は駆けた、故郷を救う為に。

親しかった人々を救う為に。

だが、全てを救うには既に遅すぎた。

村の人口の半数が死亡し、若い女性の大半は兵士から暴行を受けた後だった。

「遅すぎたって言うのか：俺達は！親父まで：！！」

そう、アルスの父であるルクツーの村長であるアレン・ルクツリア村長は死んでいた。

それも、この騒ぎの一番初めに殺されてしまったのだ。兵士達の刃を納めさせようとして、それも適わずに。

村人の誰もが嘆き悲しんだ。

村人の誰もが怒りに震えた。

そして…。

「アルス君：いや、新たな村長よ。

村民たちに指示を：貴方の指示にみんな従うわ。

疾風剣と呼ばれ有名を国中に馳せた冒険者である貴方に」

そう告げたのはアイリ・ウェアド：マリーとエリーの母親であり、この戦いにおいて多くの敵兵を屠った魔導士である。

その瞳には彼女が嘗て常日頃浮かべていた暖かくやわらかいものは無く、刃の様な鋭く、そして凍えてしまいそうな冷たい意思だけだった。

アルスはこの時点です。

（やばい、これは詰んじまったか：俺の冒険者人生。

まあ、仕方ないよな……俺も、これは許せない……絶対に！」

こんな時に考えてしまったのがもう冒険者には戻れないな、等と言う事なのに自分自身苦笑してしまう、だが同時に決めてしまった。

「これより先は俺、疾風剣のアルスと氷炎の魔女マリー！そしてアイリさんでこの村の舵を取っていく事になる。

だが、その前に俺達は一度この件の落とし前を領主にきっちりと払わせてやらねばならない……そうだろう皆！」

きっちり自分だけでなく、マリーとアイリを混ぜる事で責任者の枠に確実に入れておく。

まあ、マリーはともかくアイリは殺る気満々なので文句は言わないだろう、という計算がアルスにはあった。

「そうだ！復讐だ！」「俺の家族を殺した領主達に復讐を！」

「領主を殺せ！皆殺しにしろ！！」「もう、あの糞野郎の言う通りになんてなるものか！！！」

生き残った村人達が怒りの声を上げる。

「ならば、皆さん：我々は一時、この村を捨てて剣を取り、弓を持ち、槍を手には立ち上がらねばなりません。

戦う術、守る術、この極光の魔女アイリ・ウェアドが全て授けよう！」

その言葉と同時にアイリが持つ奇妙な形の杖が輝き、大地から鋼鉄製の武具が生えてくる。

その様はまさに御伽噺の『魔法』である。

（極光の魔女？……おいおい、冗談だろ？

20年以上前にこの辺の地域で猛威を振るってた魔女ってもしかしてアイリさん！？）

思わずアルスはドン引きしながらアイリの横顔を見る。

魔女といわれてみるとなるほど、すごく納得だ…もう40代入ってそんな年齢なのに、見た目年齢がマリーとまるで変わらないところとか。

そして極光の魔女とは20年以上前に突如この地域に現われ、人も魔も関係なく猛威を振るった魔女だ。

だが、それもおおよそ20年前から音沙汰がなくなったとかで、一説では討ち取られただのもう死んだだのというのが冒険者の間では流れていた。

アルスとマリーもまさか損な大それた人物が身近にいたとは思わなかったので、大して気には留めなかったのだが…。

「アルス……私が思うに、これ凄く拙いわよ？

母さんが魔女だったのは知らなかったけど……。

それをさっぴいても自力の差があり過ぎで勝てるとは思えないのだけど」

マリーが憤怒で熱狂する村民に慄きながらアルスに話しかける。

だが、アルスはそんな心配は無用とばかりに自信満々に言う。

「その辺り、どうにかなるよ。

勘だけどな」

王国暦530年3月26日 後にルクツー・キキスミ戦役と呼ばれる内乱の幕開けである。

Extra 01. とある冒険者夫婦の帰郷〜故郷壊滅〜（後書き）

リョウ（アラン）とエリーがどのタイミングで関わるかは今の所未定です。

多分後で本筋はそのままにそこそこ修正入ります。

Extra02. とある来訪者の現状確認／Wikiで見た情報は非常識ばかり

Extraのお話を読まなくても本編に対して影響はありません。
いわゆるおまけ話です。

Extra 02. とある来訪者の現状確認／Wikiで見た情報は非常識ばかり

ギルドから戻って一休みした後、目を覚ますと既に深夜だった。

眠った時の事は細かく覚えていないのだが、どうやら迂闊にもベッドで堂々と寝ていたようだ。

お陰で俺の左腕はエリーの抱き枕となっていた。

そしてその少しだけ苦笑してからゆっくりと左腕の拘束を解き、ベッドから出る。

俺は内心でやれやれ、と呟きながらあっと思う。

「あっちゃー、夕飯食いそびれたか？」

まあ、あんま腹減ってないし良いか」

疲れも既に十分にとれており、目もバッチリと覚めてしまった。
今から寝直すのは少し面倒だ。

「んじゃ、今のうちに調べ物をしておくか」

具体的にはCompにインストールされているアプリの動作確認だ。
以前、コッチに来て直ぐの時にほんの少しだけ触ったけど、それ以降はすっかり忘れていて全然調べていなかった。

現状特に使っていない機能は『ナノセーフシステム』と『ステータスディスプレイ』の二つだ。

逆に『次元ネット』『マッピングシステム』『生体センサー』『意思疎通システム』の4つは既に何度も使った事がある。

例えば…次元ネットを使えばどうやら元の世界だけではなく、更に別の世界の情報も収集が可能なようだ。

で、その一例としてはこの世界以外の別世界のニュースサイトでアニメか漫画、小説のどれかで見たような地名と事件がさも当然の様に載っていたり。

Wikiで魔法に関して検索すると、糞真面目に様々な系統の魔法や魔術、その類の力の扱い方が小学生でも理解可能な説明付きで載っていたりする。

マッピングシステムはもうそのままである。

労する事無く現地点から半径20mの地形情報が自動で記録される。コレは非常に便利だ。

この世界で売られている地図はその殆どが手書きで精度は結構曖昧だったりする。

だが、コレならばそういう曖昧な所はない。

マッピングシステムの情報を元に地図を起して売ればそれなりの金になるだろう。

勿論、売るならば地域ではなく山や森の道程、洞窟、遺跡：場合によっては城や館、砦の内部情報と言った所か。

生体センサーは半径20m以内の生命体を感知して、マッピングシステムと連動してディスプレイに情報を映し出す。

これは魔獣狩りや警護等で非常に役立つことこの上ないだろう。

意思疎通システムは、ある程度以上の知能がある相手に対して自動で意思疎通が可能になる。

目下一番役に立っている。

コレがなければ俺はこの世界でマトモに会話できるようになるまでかなり時間をかける事となっていただろう。

さて、現状で使っていないのは先ほど最初に上げた『ナノセーフシステム』と『ステータスディスプレイ』だ。

実の所ナノセーフシステムについては次元ネットと同レベルでトンドモ機能だ。

実際、どういう風に機能するのかイマイチわからない。

「まあ使ってみれば判るか」

ナノセーフの使い方は非常に簡単で、Compの端に付いているナノセーフシステムの端末にかざして『しまう』と考えれば良いだけだ。

取り出す時は、取り出したい物をイメージすれば良いらしい。

と、言うわけで早速使って見る事にした。

対象はこの世界に来る時に俺が持っていた通勤カバンだ。通勤カバンをかざして俺は一言呟く。

「しまえ」

それだけで片手で持っていたカバンの重荷が消え、カバンは瞬時に光の粒子となりCompに吸い込まれる様に消えていく。

そしてCompのモニターにアイコンとタイトルが表示される。

『通勤カバン』

それを選択して詳細情報を見る。

詳細情報には大きさ、重さ、材料、こういった用途で使われるか等が詳細に書かれていた。

「おお！？これ、すっげえー！！！」

思わず子供の様にはしゃいでしまう。

正直どういう原理かまったくわからないが、まるでドラえものの『四次元ポケット』のようだ。
重量制限と生物はダメって言う制約があるけど、コレは非常に便利だ。

ちなみに重量制限は（体重×2）×筋力となるらしい。

それを越えると俺の肉体動作にいきなり負担がかかり動きが遅くなるんだとか。

流石に試す気はないので保留にしておく。

俺の体重は大体60kgなので倍にすれば大体120kg。

筋力の方は正直な話、基準が良く分からん。

少なくとも米袋（20kg）を片手で持つのも抱えるのも余裕だから、それ以上の力はあると思うが。

まあ、最低限で2トン以上いけるのか？

それにしまった物の詳細情報まで分かるのがすばらしい。

この機能と次元ネットの機能を組み合わせれば、物次第では自作したり生産技術を確立して売りに出すことも出来るだろう。

そう考えると、自分が持っている物がどれだけ世の中を左右しかねない可能性を持つものなのか実感が強まってくる。

勿論、世の中を左右すると言ってもそこまで辿り着けるかは別だというの言うまでもないが。

……とにかくすげえー！！これがSFすっぴんふしぎの力か！

今、どこぞの有名な漫画家にケンカを売った気がするがキニシナイ。
だって、SFすっぴんふしぎじゃなくてどう考えてもSFすげえふしぎだろう、これは。

閑話休題。

現状、単独や最小限の2人組みで行動すると考えて、水、食料、衣類、その他生活雑貨をコレ一つに十分以上に収納することが出来る。なんせ2トンである、トラック1台分だ。

それを苦もなく運べるとか、ドンだけチートなシステムだ？

そういえば、ギルドの依頼には『配達』関連の依頼もあった筈だ。上手く配達依頼をこなせばそれだけで人財産築けるんじゃないだろうか？

そしてその報酬を元手に新しいものを作り出し、技術を売れば大儲け。

おーけい、俺はやはり戦闘依頼よりも普通の仕事っぽい事の方が相性が良いみたいだ、素晴らしい。

そもそも現代日本人が命の駆け引きをしまくる状態とかありえないだろう。

それと、儲け過ぎて欲を掻いて自分の首を絞めかねないから、今は只の妄想としよう。

それにコレは所詮、取らぬ狸の皮算用。

全てが自分の思うとおりに行くだろうか？答えは否だ。

世の中は厳しい物である。

あ、そうだ、配達依頼を受けてエリーからトンズラしてしまうのも有りだな。

正直エリーといるのは俺にとって苦痛だし。

何が苦痛かと言うと、散々何度も思い至ったことだが、愛情を向ける対象が俺ではなく、俺を通してみるアランという故人だからだ。

延々と故人と間違われ続けるのはマジで苦痛だ。

苦痛だ苦痛だと言い続けている俺だが、きっとそれでも見切りがつけない気がする。

自分で言うのもなんだが、優柔不断だしなあ…。

一閑話休題（そんな事はおいという）。

そういえば、まだ『ステータスディスプレイ』とか見て無かったよな。

日本語で言えば状態表示だ。

ゲームで言えば能力値とか状態異常、手持ちの技能を見るのに使ったりする。

「さて、想像通りの機能なのか、それとも全く違うのやら？」

まえに一度だけ起動して十円ハゲとか診断された覚えがあるが、それはもう忘れた。

忘れたと言えは忘れたんだ。

改めてCompの画面を見る。

ちなみに、Compのインターフェイスは何故かPS3等で使われるメディアクロスバーだった。

俺はメインメニューの項目からステータスディスプレイを選択し、更に下位層のメニューのトップにある『状態』を見る。

HP…98%

MP…32%

状態異常…

ステータス異常…5円禿、神経性胃痛、亡霊憑依……

……亡霊憑依って何さ？

……ナニコレ、怖いぞおい。

俺、今の所誰かに恨まれるような事をした覚えは……ないな。

そもそも俺の知り合いは基本的に全員生きてる。

まあ、この世界に來た後は知らんけど。

元の世界で亡霊に憑かれて呪われてたとは思いたくないから、詰まりこの世界に來た後？

だとしたら、該当はあるな。

俺が斬り殺したモンスター……じゃなくて、魔獣とか魔族って呼ぶんだったか、この世界じゃ。

一応意思疎通上では十分に相手に通じるけど正しくは魔獣と魔族だ。なんでも、魔獣はともかく魔族は人型……人に良く似た容貌（二腕二足ってだけ）を持ち、独自の文化を形成しているとか何とか。

ぶっちゃければ、こちらに來たばかりの頃に散々斬り殺したオークが該当する。

こいつらは独自の文化や言語体系を持ち、人間と敵対しており言葉も通じないとか。

俺の場合、Compのおかげで意思疎通は出来そうだが……それだけだろう。

っていうか、亡霊憑依の隣にあるカッコの中にやたら小さく文字が書いてあるじゃないか。

何々……？

アラン・ルクツリア
亡霊憑依

………。

「な、なんだって………!!」

思わず某ミステリー調査班の班員っぽい驚き方をしてしまった。

閑話休題。

とりあえず呪いに関して次元ネットを使って何とか解呪する方法がないか調べてみよう。

ついでに神経性胃炎とハゲを治す方法もだ。

後、市場で胃に優しい食事とかお茶の類でも探してみるか、特に鎮静効果のあるお茶を。

その辺りはエリーに訊けばどれか判るかもしれない。

……なんだかんだで、彼女に頼ってるなあ、自分。

まあ、気を取り直して技能欄を見てみるか。

技能…自発的に習得可能な技能（上限Lv10）

カリスマLv1 …小さなグループのリーダーを張れる程度の魅力と指揮能力を持つ。

車両操縦Lv2 …自動四輪車両（普通車）及び大型自動二輪を操縦するための技能。

自動4輪中型を普通に運転できる程度の技量。

特殊技能…自発的に習得不可能な先天的、後天的な技能。（上限Lv4）

強運 Lv1 …1段階で常時10%ずつの確立で都合の良い事態が舞い込んだり都合の良い物が手に入ったりする可能性を得る。

当人が都合が良いと感じるかは別。

女難 Lv4 …対人関係で、特に女性と致命的なトラブルを起こしやすい。

1段階上がる毎に、自身と関係のない相手でも厄介事が舞い込む確率が5%上昇する。

凡才？ ..ありとあらゆる面での能力・技能の成長率が一般的な平均値に至るまでは3倍となる。

その代わり、平均に達した技能のその後の成長率は0.7倍となる。

環境適応Lv2 ..ありとあらゆる社会環境や人間関係に馴染み、溶け込む事が出来る。

根性（偽）Lv1 ..意思や体力に関する面での成長率が1.2倍となる。

趣味や興味のある事柄に対しては普段以上に努力できるが、それ以外は並程度となる。

特定傾向の技能に対して1.4倍、それ以外は0.9倍となる。

成長限界突破…種族的な能力上限を超越して能力を伸ばすことが出来る。

不老不死 ..不老にして不死である事を示す能力。

上位世界から下位世界に肉体を持ったまま墜ちた者は総じて不老不死となる。

ただし、痛覚などは当然あり、精神等の保護はされていないのでそのままでは精神が磨耗してしまう可能性が高いとされる。

死んだ際は最寄の復活ポイント（通称…ホーム）に自動で転送され肉体が再構成される。

「…………女難って何だよ女難って……」

力無く呟いて思わず溜息をついてしまう。
覚えがある。

エリーの事は勿論、元の世界でも女難だった。

詳しいことは俺の黒歴史。思い出す事さえ忌まわしいのでまた機会があったらにしておこう。

俺が一時期ニートになっていた原因だ、とだけ語っておく。

オレノハジメテガー…。

それにしても、明らかにこの技能は不老不死や成長限界突破、強運の所を除いて元の世界のまんまだと確信させた。

不老不死ってなんだかイメージがどこぞのゲームで全滅した後の復活とかそんな感じだし、限界突破はそもそも成長の限界まで辿り着くかどうかすら怪しいぞ。

「……つたく、冗談はマジで勘弁してくれ。

ステータスディスプレイ、あんまり当てにならないんじゃないのか、もしかして」

俺はあんまりにもバカげた特殊技能に軽い頭痛を感じながら溜め息を思わずついてしまった。

しかし考えてみれば今『ココ』に自分が存在することそのものがバカげた現象の成れの果てってなものである。

そもそも、かつて俺をココに送り込んだ黄色いモッコス（自称神様）は何故俺をココに送り込んだのか、今更だけど思い出すべきだろうか？

正直な話を言えば、全然覚えていないというのが現実だ。

つか、次元ネット辺りに載ってねーかなあ情報…。

載ってたら俺、神様信じちゃうよ？

「検索ワードは： 元の世界に戻る方法 ストレートに先ずはコレで探すか」

俺は次元ネットのWikiを使い、そこにワードを打ち込んで検索をかけると：ご都合主義万歳、と言わずにはいられない事態がそこで待っていた。

『元の世界に戻る方法』

前提条件

元の世界に戻る方法は前提条件として自分の肉体を維持したまま下位世界に降りた人のみ可能です。

もしも元の世界（上位世界）でお亡くなりになり、下位世界にて転生した方は残念ながら存在の位階が圧倒的に下となってしまいう為、上位世界に復帰することは叶いません。

戻る方法

即ち【ハッピーエンド】を目指すことです。

かなり略してますが、基本方針は【生き抜くこと】 【ハッピーエンドを目指すこと】です。

上位世界存在は基本的にそれなりに危険な世界に派遣される可能性が非常に高いです。

それは全て元の世界を救うための【創造力】を得るためです。

強い想像力を手にし、最高のハッピーエンドをその手に掴んだ時、元の世界に戻る方法を自然と手にすることになります。』

『創造力について』

創造力というのは人によって様々な力を発揮しますが、言えることは唯一つ。

人の意思で世界そのものに影響を与える力です。

上位世界存在である我々は、その力を無意識に、或いは自覚して発揮することが出来ます。

基本的にはありとあらゆる人がその力を内包していますが、より上位の存在であればある程創造力は強くなります。

創造力が強い人間は様々なイベントと遭遇しやすく、様々なフラグが乱立しやすいので痴情の縛れなどで刺殺されない様気をつけましょう。

※一番死傷率が高いのが痴情の縛れです。

我々上位世界存在は誰よりも周囲に影響を与えやすい存在です。行動は慎重かつ大胆に、後悔しない様に行いましょう。

また、創造力は個人だけが持つものではなく、集団のイメージが世界そのものに影響を与える創造力が存在します。

いわゆる集合無意識と言われるものです。

こちらに影響を与えるにはより強い想像力を持つ者が多くの人間に強い想像力による影響を与えることが必要になります。

例で上げるのなら、救世主や英雄、勇者となり絶望に傾きつつある世界中の人々に希望を見せ付ける行為が該当します。

更に、創造力が強大な人間は文字通り【創造】に近い能力を扱えるようになります。

例・・物にこめられた人々の願いや願望、或いは原型となったモノや能力を呼び出す力。

該当・・聖剣ライトニング、無限バンダナなどe t c . . . 』

『元の世界の危機と創造力』

現在、世界そのものが【滅びの創造力】によって滅んでしまおうとしています。

【滅びの創造力】の正体はその世界に存在する人々の集合無意識です。

何故、集合無意識が滅びを望むかと言えば、多くの人々の中に絶望があり【強烈な自殺願望】が出現している為です。

これにより、集合無意識は強烈な影響を受けてしまい滅びの創造力が発生してしまったのです。

その影響により人々の思考に【コレからどんな世界は悪くなっていく】というイメージが浮かびやすくなり、更に滅びの創造力が力を増していくのです。

これを回避するために、下位世界に降った人々は【ハッピーエンド】を集めて滅びの創造力を打ち消し、世界の創造力を良き方向に向けて行く事が命題となります。

これらは全て世界を救うための予行演習であり、何より多くの下位世界を救う為の行為となります。

また、下位世界にも当然の事ながら集合無意識は存在します。そしてそれをうまく誘導できれば滅びの創造力に対抗しやすくなるでしょう。』

『不老不死に関して

年老いて活動不能になることもなく、また殺されてもホームまたは安全地帯で復活する能力です。

上位世界存在は不老不死ではありますが、それ故に多くの人間に狙われやすい存在でもあります。

また、不老不死だからと言って何度も死んでいると自身に滅びの創造力が染みて行き、余計に死に易くなります。

更には精神状態も躁鬱状態になりやすくなっています。

可能な限り死ぬ事無くハッピーエンドを目指すようにしましょう。

」

俺は特になにも考えずにズラーツとWikiのリンク等を辿ってそこそこ気になった所を見た、が…。

「なんというか、私見っぽいが多いなあ…。

WikiはWikiでもエンサイクロペディアというよりアンサイクロペディアだろ、これ」

暇つぶしとしてみるのならともかく、これを本気で読む気は正直起きない。

しかし、これはSFすうひいごうしゆな状況で得られる数少ない情報である。まったく考慮しない、と言うわけにも行かない。

「はあ、頭が痛くなりそうなことばかりだな。

ったく、この状態でどうやってハッピーエンドを目指せって言うんだ？

しかも創造力？まったく理解できん。

もういいや、寝て忘れよう」

俺は自身の精神衛生を保つため、再び布団に潜り込んだ。

今度は先ほどと違ってすんなりと眠りに付くことが出来た。

勿論、翌日の朝には創造力うんぬんの話は綺麗さっぱり忘れていたのは言うまでも無い。

5. もうどうにでもなくれっ／故郷とそして…

< Side RYOU

なんだか最近、夢遊病の気があるんじゃないかなろうかと思ってるリョウです。

いや何でかって言うと、昨晚は客間と思われる部屋のベッドで毛布に包まって寝ていた筈なのに、

今朝目覚めるとエリー（正しくはアルスとマリー）の部屋のベッドの上って……寝惚け過ぎにも程があるだろう。

その答えは、俺が『幽霊に憑かれている』から、みただけだな。

それを理解したのはある晩に起きた後、余りにも不自然だったので何かわからないかと思ってCompを起動して『ステータスディスプレイ』を見たら一目瞭然だったのだ。

ステータス異常…5円禿、神経性胃痛、アラン・ルクツリア亡霊憑依

コレを見たとき、俺はあらゆる理不尽の理由を俺に取り憑いてる超弩級の馬鹿野郎のせいと言う事にした。

俺が若返ったのも、俺がアランと間違われるのも、俺の胃がしょっちゅうキリキリ痛むのも、俺が異世界に居るのもゼーんぶコイツのせいだ！

八つ当たりと理解しているが、俺は別に聖人でもなんでもない、ふっつーの人なのだ。

何かに八つ当たりしなければやっていられないっていうものだ、この理不尽は。

というわけで、俺が、やつ当たるのも、仕方ない。

以上、言い訳終了。

さて、俺が冒険者の仲間入りをしてから2週間に時間が過ぎた。

冒険者の仲間入りに際して受け取ったのはスタンプカードと丈夫な表紙を持つ図鑑だった。

スタンプカードはギルドなどで受けた依頼の受理と依頼結果の評価を記録するスタンプを押すスタンプカード。

図鑑の方はこのユディツァ周辺やその他にも北方王国、西方連合国、南方共和国でも有名な魔物や魔族の情報が記されている図鑑だ。

スタンプカードは表紙に顔写真のようなものと名前が魔法で刻印され身分証明になるらしく、

同時に冒険者ランクも刻まれており、こちらは依頼難易度と達成度に応じて変化していくものらしい。

図鑑には魔物や魔族を退治した際に退治した証明となる部位や魔法等の触媒使う部位が懇切丁寧に記載されており、

どの程度の額で取引されるかも書かれている。

白紙部分も多く、そちらには図鑑に記載されていない魔物の特徴や容姿を描いてギルドに提出すると新発見の魔物や魔族だった場合、僅かながらも報奨金がもらえるらしい。

以上、ギルドでピュコアさんから聞いた説明を大分はしょって大雑把に語りました。

その期間の間、俺はギルドの依頼で、主に『労働系依頼』と呼ばれるようは人の手が足りないから手伝って欲しい、と言った要望の依頼を受けてそれらをこなしていた。

一言で言えば日雇いのバイトの様な物だ。

ギルドの報酬としても一番安い依頼である。

ただそれでも冒険者への依頼であるわけだから、それなりの見入りはある。

1日働けば、日本円にして2万から3万円相当の報酬になる。

少年時代であれば街の外や戦闘に関わる様な依頼に燃える事もあるだろうが、こちらら下手に落ち着いてしまった時期だ。

安定して稼げれば割とそれで良いとも思っている。

別段、『物語の主人公』張りに活躍したいと言う願望でもある訳でもないからだ。

ある程度蓄えつつ、稼げる環境。

コレが安定して行える現状は中々手放しがたい。

そう思いながら俺は本日請け負っていた市内での配達業務依頼を完遂し、依頼人に報告して一度家に戻るのだった。

その一方で、エリーは現在、しきりに魔物退治の依頼に借り出されている。

それというのも魔導師としてランクが下手に高い事が災いしているらしい。

またアルス・マリーのルクツリア夫妻という凄腕の剣士と魔導士が抜けた穴が大きいと言うのもあるそうだ。

俺としてはエリーに多少の同情の念を覚えるが、同時に胸がすつとした感覚を覚える。

それはやはりと言うか俺がエリーのことを負担だと思ってた部分があるからだろ。

ちなみに俺はランクが低いので呼ばれすら掛からない、平和である。

そう思っていたら、ヴァンさんに呼び出された。

「何のようですか、ヴァンさん」

「『何の用ですかー』じゃない！お前は自分の恋人が命張って戦ってるのになんとも思わんのか！」

俺がギルドのカウンター越しに話しかけると、ヴァンさんは顔を真っ赤にして怒りを表現した。

この人はどうにも『アツイ展開』が好みの様で、俺が煮え切らない態度をとってる事を齒がゆく…というか凄く苛立っているらしい。

「うわっ、見事なまでの勘違い。本当に勘弁してください。

誰が誰の恋人ですか？俺たちの事情、初日に伝えましたよね？

エリーの恋人はもう20日以上前に死んだアラン・ルクツリアであって俺ではありません。

彼女は俺にアランの姿を求めているだけです」

「だが、貴様はあの娘ともう一月近くも同じ屋根の下で暮らして、あの熱々ぶりだろう。

それを否定など、出来ると思うのか？」

その言葉を聴いて、ヴァンさん：いや、もう敬意を払うのはやめよう、疲れる。

ヴァンは相当に頑固で石頭で自分の信じた道しか進まないタイプだと改めて思われる。

こんなのが良く騎士団長からギルドマスターに鞍替えなんて考えたもんだ。

「ああ、もういい、もうそれで良いよ。あんたが意見を変えないのはわかったよ。

それよりも、だ。なあにか亡霊に憑かれてるみたいなんだけど、どうにかならない？」

「はあ？亡霊？ピュコアに頼めば出来ないことは無いけどお前何に憑かれてるんだよ」

「知らないよそんなの。大方ぶっ殺しまくったオークにでも憑かれ

たかね？

なんにしろ、実生活に悪影響が出始めている。早めに対処したいからピュコアさんに話を通して欲しい」

「…じゃあねえな、話を通してこよう」

そういつてヴァンはカウンターの奥へ姿を消した。

その姿を見て俺ははあっとため息を憑く。

果たして、今、アランを祓う事を何よりも願っているが、その影響がどう出るかまったくわからない。

俺に憑いているのがアランと知れた場合、彼らはどう動くか、とか考えると少々怖いものがあるが。

…まあ気付いていないことにすれば良いだろう。

どちらにしろ、このまま肉体を乗っ取られれば俺としてはたまったものではないのだから。

考えながらロビーで壁を背に目を瞑って立っていると、色々と噂話が聞こえてくる。

「そーいやよ、お前聞いたか？

どうやらあの辺境のルクツーの村、領主に村ぐるみで反逆したそーうだぜ」

ルクツーの村…確か、エリーとアラン、ルクツリア夫妻の出身がそこだったか？

んで、街道で行けばここからは片道で3日の行程だったか…。森を突っ切れば1日と少しと聞いたけど…。

「らしいなー。」

他にもあの辺りの領主に反感持ってた奴等が合流して結構な所帯になってるって話だっけ？」

「んだな、噂じゃ凄腕の美女姉妹の魔導士が三人も居るって話だぜ。一度会ってみてえなー出来ればお近づきになりてーぜ」

ほほう、美女姉妹……男として俺も実に気になる。

あれかなー、アニメや漫画みたいになちよつとエロかったりセクシーだったりする衣装なのかな。

そうだったらとても素晴らしい。

物見遊山で見に行くのも良いかもしれない。

テロに加わるつもり、無いけどな。

そんなことを考えていると聞き慣れた声が近付いて来る事に気付いた。

彼女に対してはいまだイラつきもあるし、胃も痛くなるし、頭の禿も気になるが、それでもなんだかんだで手放しがたいと思ってしまう自分が居る。

等と詮無いことを考えたりしていると、大きな声が思考をさえぎった。

「ええっ!？そ、そんな事ないですよ!まだそこまでは……」

「えー!?でもエリーって彼とすっごい熱々じゃない」

「んだな、未だに床を共にして無いってのは信じられねーぞ」

エリーの声、それと聞き覚えのある女と男の声だ。

チラリとそちらを見ると、身軽そうな革の軽鎧を纏った短剣二本とショートボウを背負った若く活発な印象の女性。

革の鎧を着た剣を腰に挿し、槍を背負った大柄でアニキって感じの

男性。

そして、普通の布の服の上にマリーさんの上質な魔法のローブを勝手に借りて羽織っている長杖を持ち、ショートボウを隠し持つエリーの姿。

ちなみにエリーは俺が渡した無限バンダナ（笑）を渡した翌日から毎日腕に巻きつけて使用している。
そんなに気に入ったのか、アレを。

女性の方はリエラ・アムノーク。

男性の方はジェンキンス・B・ハザード。

どちらもまだ18歳だと言っていた。

彼らは13歳から冒険者をしており、既に5年も続けている中堅の冒険者だった筈だ。

んでもって、二人の関係は『あくまで腐れ縁の幼馴染！』だとも言っていたかな。

この世界、幼馴染の男女は冒険者になる暗黙のルールでもあるのかねえ？

ちなみにジェンの方とは同じ男同士で手合わせをする事もあれば一緒に飯を食いに行くこともある仲だ。

いわゆる友人という奴だ。

「あ、アラン！」

「いよう、エリー」

こちらに気付いて幼い子供の様に笑顔でぶんぶんと手を振るエリー。
正直そういう仕草は微笑ましい。

……大分毒されたなあ、自分。

「おおっと、リョーじゃねえか！なんだ嫁の迎えにでも着たのか？」

「そんなんじゃないよ、ジェン。
ギルマスからの呼び出し、後こっちからも頼みがあつたからそれ
の待ちだ」

それだけ言うと「そーかそーか」とジェンはニヤニヤと笑う。
うん、コレは絶対にからかうつもりだ。

ジェンは俺の事情を全て話してあり、既に理解と納得をしてもらっている。

ゆえに、エリーとの関係を囃し立てる時は欠片も本気ではなく、ただのからかいであり、エリーへの配慮の一環だ。

本当はもうやらなくても良い気がするが、少なくともアルス達と連絡が取れるまでは続けるつもりだ。

一応、家を借りてる恩があるしな。

ちなみに、エリーに対して俺の本名である「リョー」こと「涼」に
関しては渾名として通している。

俺の名前の由来「涼しげに物事を成し遂げる人物になって欲しい」という両親の願いが籠ったもので、今回はそれをそのままエリーに
伝えた。

「呼び出し？」

好い加減戦闘依頼に出るとか？

ランク自体は不自然に低いけど、お前の実力は俺と遣り合っても
良い線行ってるしなあ」

「はは、相性のお陰だ。」

俺は長物相手には自信はあるが、リエラみたいなすばしっこくて
手数が多いタイプは苦手だよ」

ちなみに、ここで言うランクとは戦闘における信頼度のようなもので、
わかりやすく戦闘ランクといわれる。

他にも、冒険者には総合ランク、信用度ランク、実績ランクが存在したりするが、後者二つに限っては初期は誰もがーG（最低）ランクとなる。

ちなみに俺のランクは信用D、実績D、戦闘Gで、総合Eランクとなっている。

本来は戦闘Cランクとピュコアさんが決めようとしていたのだが、ヴァンと揉めたせいで戦闘ランクは最低値になったのだ。

まあ、俺としては危ない橋を渡る気は無かったので万々歳でもあった。

ちなみに、おまけで言うところとジェンが戦闘Cでリエラが戦闘D、エリーが戦闘C+となっている。

エリーは魔法攻撃力が非常に高いから能力的にはC以上なのだが、戦闘経験が足りないと言うことで制限を掛ける意味でC+という暫定ランクに据えられているそう。

ちなみに、実績と信用はこなした数と依頼主からの評価が物を言うので、エリーの信用と実績はEランクで止まっている。

「なあ、今度また手合わせしねーか？」

お前のあの鉄壁の護り、今度こそ突破して見せるぜ！」

「また今度な。今は依頼こなしたばかりで疲れてるだろう？」

今日は報告が終わったらゆっくり休め、明日以降には相手するから」

「約束だからなー」

それだけ約束するとジェンは報告用の依頼カウンターへと向かう。リエラも後に続く。

「それじゃ、アラン、また家でね？」

「ああ」

エリーとそれだけ言葉を交わし、見送る。

その直後に見計らっていたかの様にピュコアさんがやってきた。

「こんにちは、リョウ君。お払いをして欲しいってヴァンから聞いたのだけど、どこで呪われちゃったのかしら？」

「それがさっぱり。魔物を斬ったのだってこの街に来る直前のオークたちが始めてだから、そいつら位しか恨まれる相手、居ない筈なんだよね」

「そう？ だけどそれだけで呪われるって言うのは余りない筈なのよね。」

だって、そんな事になっていたら今頃冒険者は呪い憑きばかりよ」

なるほど、それは納得の話だ。

「んじゃー、アランとかどうです？」

アラン・ルクツリア。

彼ならば俺を呪うに相応しい相手の様な気がしますけど」

「なるほど、自分の恋人を寝取った訳ではないにしろ…。」

ほぼそれに近い状態で過ごしてる男だしね、その線は無きにしも非ず、ね」

ピュコアさんは考えながら自分の推論を述べる。

ちなみに、ピュコアさんはヴァンさんと違って結構クールだ。

と言うよりも、公私の切り分けがきちんとしているというのが正しい。

頑固で直情なヴァンとクールで冷静な

「実際、色恋沙汰で呪うだの取り憑くだのは歴史的観点や私の経験から見ても無い訳じゃないわ。

美貌の王を慕っていたけど体よく袖にされた魔女が王を呪って不能にしたり呪い殺したり、

愛を捨てて名と実を選んだ男が捨てられた女が自殺して悪霊になって取り憑いた、とかは本当、良くある話よ」

「なるほど、確かに良くありそうな話だ」

ラノベとかホラーとかでそういう話はお腹がいっぱいです、と言わんばかりに良く聞く話だ。

実際に遭遇するかどうかは置いておくとしてだ。

「で、先ずは憑いているのがアラン・ルクツリアだったとして：祓う事って可能？」

「……………」

俺の問い掛けに、ピュコアさんは目を瞑り沈黙する。

「可能、だけど本当に祓うべきか悩むって所ですか？」

「……………」

一瞬、僅かに反応があったのでそういう事も考えたのは間違いではないのかな？

ならば、問い掛けを変えよう。

「彼は俺が寝ている間に体を勝手に使用している形跡がある。

それを踏まえて、神官としての貴方はコレがどういう状況か俺に説明をお願いしたい」

「……………」

はあ、わかったわ。まだ詳しく調べたわけじゃないから推測だけ。まず、状況として『時間限定で被害者の肉体を乗っ取る』と言う段階に及んでいる、間違いないわね？」

「間違いありません、ただしくは俺が『寝ている間のみ』と付け加えるのが正しいか。」

ちなみにアランはキスでお互いの口周りがよだれでベトベトになるまで濃厚なのをしても、今の所まだ行為には及んでいない様子。

理由は家でそういう痕跡が一切見られなかったことと、俺自身にそういう事をした後特有の疲れが一切ないから」

ちなみに俺は素人童貞では有りません。

とつくの昔に脱童貞しております。

……誰に向かってこんな事を考えているのやら。

「なるほどね、アランって子、あったことは無いけど…案外ヘタレかしら？」

「俺の弟に似ているっばいなら間違いなくヘタレだな。あいつは四の五の考えてその挙句に暴走するけどね。」

アイツと同じパターンだとするなら、キスまでは手動を握れてもそれ以上は相手側からの強烈なプッシュがうまく乗らないと行為には辿り着かないね」

「…………結構抜き下ろすわね」

「全く知らん他人に、背負わなくて良い苦勞を、無理に、背負わされているんだ。愚痴ぐらい勘弁してくれ。」

そもそも、俺がエリーと居るのだってアランとマリーの家って言うタダで使える宿を提供してもらえるからだ。

それ以上の理由はないからなっ」

本当は、ただ見捨てるのも後で後味が悪いし逃げ出す様な行為は好きじゃないからだ。

出来るのならば、納得の行く、後味の悪くない終わりを模索したいから今はまだあの家に留まっているのだ。

だが、状況が変わってしまったのだ。

アラン・ルクツリア。

亡霊となったアランが想定外の事をしてくれているお陰でこちらが安穩としていられる時間が無くなった。

いや、そもそも時間なんてこちらの都合に合わせて余裕を残してくれるものじゃないか。

俺が知る以前のアラン評は『優しい男』『多少頑固で真面目でヘタレ』『イザという時はとても勇敢』という評価で、もしも『アランがルクツィ及び周辺の町村の反逆』という事を知れば、俺の体を使って何をしでかすか、という恐ろしさがある。

ちなみに、エリーとヤツちまう可能性に関しては目を瞑る。

もう、そうなった場合はそうなった場合で諦めても良いやと『どうにでもなれっ』てな気分だからだ。

本当に

、、・。

—、*。

，°∩*
°

+（・ε・）*。+。

もうどうにでもな

れっ

って、踊ったりもした。

「たたかわなきや、げんじつと！」

「……はっ！ ごめんなさい、今何となくこう言わなければいけない気がしたの」

自分でも何故そんな事を言ったのか判らない様子で取り繕うピュコアさん。

まあ、そんな事は置いておこう。

俺はこの世界で楽観視する気は徐々にだが無くなって来ている。

最初の頃は聖剣ライトニングなるチート武器があるから無謀なことをしても良いかな？とか思っていた。

だけど、エリーの魔法を実際に見てから意見は180度変わった。魔法って言うあのチート技能、通常の魔力弾だけでもそこそ早くて威力は小爆発つきで凶悪なのにとんでもない弾幕を誇っていたんだぜ。

俺はアレを見て、剣を持っていたても能力向上で回避しきれる自信も防ぎきれる自信も失せた。

それに加えて『自分の魔導士としての実力は並ぐらい』だの『お姉ちゃんはおっと凄くてお母さんは伝説級』だなんてどんな冗談？

アレか、アランの死は実は無理にじゃばった拳句の無駄死にでしたよって言うオチですか、なんて思ったもんだ。

まあ、まず間違いないくそうなんだろうなあ…。

せめてあの夜に二人が協力して戦っていれば絶対にアランは死ななかつたに違いない。

そういう結論に至ったのは何も今回が初めてではない、度々エリーの魔導士としての戦闘能力の高さを思い知る度に実感する事柄だからだ。

「……………はあ。それでお祓い、頼めるんですか？」

「……………わかったわ。多少の準備が要るから少し待っていて」

ピュコアさんはそれだけ言う素早く席を外し、10分ほどで戻ってきた。

手に持っているのは何かのハードカバー本と無意味に凝った形をした小瓶。

ついでに衣装はなんだかエロイ女性用神官服…と思わしきものになっていた。

何でエロイかって？

決まっている、半袖で切れ込みがある為肩が露出していたり、胸の谷間の部分の布が無かったり、妙に胸…というかスタイルが強調されていたり、スカートらしき部分は強烈過ぎるスリットが存在して前と後ろにしか布地が無い状態だ。

ソレナンテエロゲってなもんである。

「……………神官服って、もう少し布地の多いお堅い衣装かと思ってました」

「……………最初は誰もがそう思うわ」

どこか悟ったような表情で遠くを見るピュコアさん。

なるほど、そういう表情をする理由はなんとなくだが理解できた。

「お祓いと言っても私達神官に出来るのはあくまで協力よ。

取り憑いた霊は、自分の精神世界で自分自身の力で追い出さなければいけないの。

つまり結局の所精神世界で最後に頼れるのは自分の意志の力よ。

それだけは覚えておいて」

その後、俺はピュコアさんの指示に従い小瓶を渡され、指示されたとおりに中身を飲み干すと、そのまま眠るように意識を落としてしまった。

「次に目を覚ます時には、厄介事が無けりゃ良いけど」

俺はかなり複雑な表情をしてこちらを見ながら呪文を唱えていた。ピュコアさんにそう語りかけた。
もつとも、言いたいセリフを全てきちんと言えたかは疑問であるけど。

ああ、眠い…。

< Side Elie

アランに濃厚なキスをされてから2週間の時が過ぎた。
その間、私とアランの距離は…縮まる事は無かった。
今になって思い返せばあんなのは全然アランらしくなかった。
なんだか少し、怖かったような気がする。

昼間のアランはやはり少しそっけなく、だけど頼れる感じで優しくしてくれる。

だけど、夜のアランはなんだか怖い。

何時からか私はそう感じるようになっていた。
そんなことを考えながら歩いていると、仲間二人から静止させられた。

「いたな…まさか外壁周辺に本当に出てくるようになってやがったとはな」

私たちが居るのはユディツアの外壁周辺でスラム街となっているあたりに程近い場所であり、同時にフェチャシュの森から伸びている林が近い場所でもある。

この辺りには非常に稀ではあるが森からハグレて出てきた魔物などが出ることもある。

目の前に迫るのはウォルフの5匹の群れとそれを使役している武装したオーク4人組の小隊。

その編成は今朝、ギルドの報告にあった通りの数と構成だった。

「俺が突撃、リエラが弓でかく乱、エリーが魔法で一体ずつ確実にトドメのいつもどりのパターンで決めるぞ！」

「あいよ、任せておきな！」

「わかりました、無茶はしないでくださいね」

指示を出す槍を持った同い年ぐらいの標準的な革の鎧を着た少年、ジェン。

それに当然といわんばかりに答える弓を構える標準のそれよりもパーツの少ない革の軽鎧少女、リエラ。

そして私は杖を構え、意識を集中して最初にウォルフ達に向かって魔法を仕掛けることにした。

「我が内に眠りし力の流れよ、我が前にありしモノを貫く槍となれ！
フォトン・ランサー！！」

頭の中で描いた光の槍が私の目の前で以前の私では扱えなかった程の魔力で収束し、そしてウォルフに向かって襲い掛かる。

光の槍は群れていたウォルフにぶつかり、そして炸裂する。

炸裂した光の槍は小さな爆発を起こして周辺にも二次被害を齎す。

「続けてあたしが仕掛けるわ！ハッ！ヨッ！タッ！」

殆ど狙いをつけていないように見える弦を引いてすぐに射るリエラの弓のスタイル。

しかし、それは彼女の経験と技術をもってすれば、射程こそ短くないがちだが素人のそれと違って相当の的中率を誇っている。

彼女の放った矢が何を逃れたウォルフとその後ろにいるオークに襲い掛かる。

「リエラ、遠いからって狙いが雑だぞ！」

ジェンが槍を構えて突撃し、リエラの討ち漏らしのウォルフをなぎ払う。

その隙を突こうとオーク2匹がジェンへ、残りのオーク二人はバラけて私とリエラに向かってくる。

「エリー、アンタはバラけて向かってくる方を！私はジェンの援護をするわ！」

そう言ってリエラは即座に矢筒から弓を数本同時に引き抜き、弓に番えて手馴れた動作で速射を行う。

その矢はオークの身体のだどこかに当たればいい、程度で放たれ片方への攻撃は外れるもののもう一匹のわき腹と左脚に突き刺さり、動きを止めることに成功する。

「サラマンデル炎の精よ、汝の力強き炎の力を以って我が敵を射抜け！
フレイムショット！」

『！”#\$!%&&‘\$‘”）”！#”||！！』

私が左右に放った二発の炎の矢は両方とも見事にオークに的中し、

オークは私には理解不能な鳴き声を大きく上げてオークは炎に巻かれて絶命した。

「こいつで一氣に決めるぜえっ!!」

ジェンが槍を素早く突きと払いと斬撃を放つ。

それらの攻撃はオークの腹に突き刺さり、反撃として振り下ろそうとした両手で大上段に構えた石斧の一撃をあわやと言う所で腕ごと切払い、最後に一撃で頭を真つ二つに切り裂いた。

「ま、こんな所だな!」

ジェンが得意気にそう言って槍に付いた血を払う。

「お疲れ様ジェン、それにエリーも。

これで今回の依頼は終了! いやあ、エリーが来てから先頭が楽になったわあ。

アタシ独りじゃ援護しきれない場面って多かったのよねえ」

リエラが組み立て式の複合弓を折り畳みながら私に言う。

「そうでもないわ、リエラの弓の牽制、私が本当に必要なのか疑問に思うほど早くて正確なもの」

此処二週間で既に何時も道理になってしまった作業。

アランが私にくれた『力』。

私には元々、母さん譲りの魔法を操る才能があった。

とはいえ、母さんからすれば私は万分の一の力しか持っていないそうなのだけれど…。

魔力を圧倒的に強化する魔法の道具：無限バンダナ。

これさえあれば、何があっても『今度こそ』アランを護れる。

この時の私は、以前に何があったかを忘れて純粹にそう思い込んでいた。

その後、私達はヴォルフとオークの肉体の一部を確保してからギルドに談笑しながら戻った。

その道すがら私とアランの関係についての話になった。

「で、リヨ：じゃなくて、アランとはどこまで進んだんだエリー！お前さんたちのべったり具合だ、もう『男と女の仲』まで進んでんדר？」

「そうそう、傍から見てもすごいもんねえ。」

なんていうか、熟年の夫婦並よね、あんた達って。

普段のアイツだってなんかエリーの事信頼した上でのそっけなさって言うか…。

あんたたちが未だに子供1人も設けていないのが不思議でならないわ」

その言葉を聞いて顔が一気に熱くなったのを感じた。

た、確かに私たちぐらいの年齢（18歳）ならもう結婚して子供が1人や2人設けていてもおかしくない年齢だし言ってる事はおかしいけど…。

「ええっ！？そ、そんな事ないですよ！まだそこまでは……」

「えー！？でもエリーって彼とすごい熱々じゃない」

「んだな、未だに床を共にして無いってのは信じられねーぞ」

2人は仲良くがつつと私に問いかけてくる。
あうう、なんとか話をそらせられないかしら。

そう思ってギルドの中を見渡すと、壁に背を預けて目を瞑って何かを待っている様子のアランが居た。

「あ、アラン！」

「いよう、エリー」

アランは少しけだるげに返事を返してきた。

「おおっと、リョーじゃねえか！なんだ嫁の迎えにでも着たのか？」

「そんなじゃないよ、ジェン。」

ギルマスからの呼び出し、後こっちからも頼みがあったからそれの待ちだ」

それだけアランが言うのと「そーかそーか」とジェンはニヤニヤと笑う。

そういえば、ジェンはアランの事を何故かりョーと呼ぶ。

アランもそのことに関しては喜んで受け入れている。

二人が言うには「涼しげに物事を成し遂げる様な人物を目指す、故に渾名はリョウ」だそうだ。

「呼び出し？」

好い加減戦闘依頼に出るとか？

ランク自体は不自然に低いけど、お前の実力は俺と遣り合っても良い線行ってるしなあ」

「はは、相性のお陰だ。」

俺は長物相手には自信はあるが、リエラみたいなすばしっこくて手数が多いタイプは苦手だよ」

アランは謙遜してそういうけれど、実際の所は多少苦手そうにしているけれど、模擬戦では今のところ負け無しだったりする。

なんでも「アイキドー」とかいふ武術を以前冒険者に教わったそう
で、護身術としてはとても有効なんだそうだ。

それによると、相手の動きを見切って、相手が引こうとする力や押
そうとする力を上手く使って相手の動きを留めたり投げ飛ばしたり
するそうだ。

アランが言うには自分ではクロオビにも届かないとか。

クロオビと言うのはアイキドーという武術のランク付けの目安らし
くて、クロオビを貰えて初めてランクを貰えるという事になるらし
い。

なら、何でランクもないのにアランが2人をアイキドーで圧倒でき
るかといえば、アランは『あの剣』が近くにある時はどうにも能力
がとても強くなるらしいと聞かされた。

そのお陰でジェンやリエラの動きに何とか付いていき、アイキドー
で攻撃を封殺できるのだという。

「なあ、今度また手合わせしねーか？」

お前のあの鉄壁の護り、今度こそ突破して見せるぜ！」

「また今度な。今は依頼こなしたばかりで疲れてるだろう？」

今日は報告が終わったらゆっくり休め、明日以降には相手するか
ら」

「約束だからなー」

ジェンが片手を上げて報告のカウンターへ向かい、リエラもそれに
続く。

そして私も…。

「それじゃ、アラン、また家でね？」

「ああ」

短い遣り取りだけど、そこには確かにそれが当然、という意味があつて、私はそれを自覚できて少し嬉しくなった。

その後、依頼の清算を終えて私達はギルドを後にして近くの酒場に入る事にした。

「そういえば、エリー…お前、ルクツーの出身だったよな？」

「え？ ええ、そうですけど」

ジェンに聞かれて私は少し戸惑いながらも応える。

「ああ、そのなんだ…お前さんの村なんだがよう…その…」

ジェンは非常に言い辛そうに何かを口にしようとしている。彼にしては非常に珍しいと思う。

彼は普段は快活でこの様に口籠る事は滅多に無い。

「ああもうじれったい！ アタシがいうわよ！！」

エリー、2週間以上前にルクツーの村がキクスミの領主に攻撃されてほぼ壊滅状態って噂よ」

「そ、そんな！？」

リエラの言葉に私は思わず大声で反応してしまう。

だが、リエラは涼しい顔でどうどうと私を宥めて続ける。

「あくまで噂よ。続きもあるから一応最後まで聞いて頂戴。

更に噂で、ルクツーはどうも反逆しようとして立って事になってるらしいわ。

まあ、コレに関しては眉唾モンだと思っていたんだけど……。

どうも生き残り達が死なば諸共！ってな感じで復讐する気で本気で反逆するみたいよ。

で、更に問題なのは…彼らのリーダーがこの街きっての冒険者、疾風剣アルス・ルクツリアと氷炎の魔女マリー・ルクツリア。

それに伝説の極光の魔女まで加わっているって話よ…」

「アルスさんに姉さんが…？でも、極光の魔女って…」

極光の魔女、端的に言えば強烈な光の魔法により立ち塞がる全ての敵を葬り、また相手の攻撃は凶悪なまでに頑丈な魔法障壁により全て防ぎ切ると言われている。

私が生まれる2、3年ぐらい前までルクツー周辺に居を構え猛威を振るっていたという話を聞いたことがあるけど…。

「もしかして…領主達の事は置いておくとして、魔女が再び活動を開始して自分の住処の周辺で暴れた領主を制裁する為にみんなを煽った…？」

「魔女が何を考えてるかわからないが、領主に反逆するなんざそうでもなきゃ考えられないわな」

私の言葉にジェンが「ありうるなあ」と頷きながら言う。

ソレとは逆に、リエラは…。

「リエラ、その噂って…何時の…話なの…？」

私は恐る恐るリエラに問いかける。

「大体一ヶ月くらい前の話よ。」

彼らは今、フェチャシュの森に籠って各村から有志を募って戦力を増強中よ。

ちなみに、武器とかはどうも極光の魔女が用意しているらしいのよね。

なんでも地面からよきつと鋼鉄製の剣や防具が生えてくるらしいわ」

「なっ！？なんて羨ましい：一々武具を揃えるのに金を使うのが馬鹿らしくなってくるな」

「確かに：ってそうじゃなくて、フェチャシュの森に籠るなんて自殺行為じゃない！！」

そう、あの森に籠るなんて自殺行為だ。

あの森にはヴォルフとオークは勿論のこと、主であるフェチャシュという凶悪な魔物が生息しているから。

いわゆる森の主：と言うべき存在で、希少種のモンスターでもある。その容貌は相当大型のヴォルフと言われていて、素早い身のこなしに加えて強靱な顎を用いた噛み付きと切れ味の良い爪の一撃、そして何より強烈なのが雷のブレスを用いた雷撃。

どの様に雷のブレスをはいているかは諸説あるが、一番有効な説は魔法の一種ではないか、と言う見解だ。

なぜなら、魔法は魔力を持ち、尚且つ術式とイメージの二つがあれば使える。

ちなみにこの場合の術式とは『○○がこうだから□□がこうなって△△になる』という様な形のもので、ぶっちゃければこの辺りはこじつけであって、魔導士に求められるのはそのこじ付けを更に強化するイメージだ。

勿論、術式が理路整然としていれば魔法は強力にもなるし消費する魔力も少なくて済む、この辺りは昔、私が5歳ぐらいの頃にお母さ

んが色々と教えてくれた。

そして、お母さんはこうも言っていた。

『魔法っていうのは一種のプログラムみたいなものみたいね。

私は向こうじゃホームページ運営ぐらいしかしたこと無いから微妙だけど…。

それでもHTMLとJavaを使える程度の人でも、魔力を感じられればココまでできるって訳よ…って言っても分からないか。

こういうのはリョウ君やナナの得意分野だったんだけど…あの子達どうしてるかしら』

えいちていーえむえるとじゃばという言葉は私には今でも理解できないのだけど、どうやら魔法の術式とはまた違った術に使うものらしいと言うことが分かった。

どちらかと言えば、何かの学問…の様な者なのだろうとも思ったけど。

それよりも、お母さんが見せた少し寂しそうな懐かしい様な表情が今でも印象に残っている。

そういえば、以前アランが勉強の最中にこんぷを弄っていた時…。

『んー、やっぱ次元ネットも一応HTMLなのか…。

つつー事はCompのプログラムも基本はC++とかVBとかその辺なのか…？

いかん、細かい所考えると気になり過ぎて勉強所じゃなくなるか。勉強勉強っ』

何でか知らないけど、アランもぷろぐらむやえいちていーえむえるに関して知っているみたいだった。

今度、聞いてみたほうが良いかしら？

あ、だめだ思考が変な方向に逸れてしまった。

とにかく、フェチャシュには魔法を扱うだけの高度な知性があるかもしれないっていう事だ。

まあ、知性無しで本能で魔法を使っている可能性もあるのだけれど。非常に強くて厄介な相手と言うことに変わりはない。

それ故に遭遇したら熟練の冒険者でもただでは済まないと言われている。

つまり：お姉ちゃん達でも苦戦するか、下手をすれば重傷：村の人たちだったら死んでしまう可能性ですらある。

「フェチャシュの森に関連する依頼、無い？」

フェチャシュの森に関連する依頼は二人は把握しておらず、その後にギルドの依頼を見に行つて、フェチャシュの森関連の依頼を発見してギルドマスターのヴァンさんに受領申請を仕様としたのだけだ。

「あのなあ、エリー。この依頼は高ランクの冒険者向けの依頼なんだ。

総合ランクB以上じゃなきゃ受けさせるわけにやいかねーんだ。
信用、実績、戦闘能力：これらのどれが欠けても受けさせるわけにやいかん。

そして、今のエリーにやまだまだ実績が足らん！

それに、だ…。

分かつちゃ居ると思うがあゝの森は非常に多くのオークとヴォルフが生息しているし、それ以外にも蜂の魔獣や蜘蛛の魔獣だっているんだ。

まだまだ経験の足りない青い嬢ちゃんに任せられるわけねえだろうが。

ジェンやリエラが居ても同じだ。

いや、そもそも3人で言うのも無茶な話だな。

CランクDランクの冒険者が3人じゃ普通に考えれば自殺しに行くだけだぞ」

「それでも構いません！」

「こっちが構うんだよ！無謀者！！

てめえ自分ごと仲間も死なせるつもりかっ！！」

「……………！！！！」

ヴァンさんの言葉をきっかけに私の頭に、この街にくる時に死んだ『偽者』の姿が浮かんできた。

結局、私はヴァンさんの言葉に反論することもできず、意気消沈して家に帰ることになった。

「……ただいま」

「おかえり、エリー」

リビングでぐだーとお茶を飲んで居たアランが笑顔と共に私の帰りを待っていた。

何であそこまで笑顔なのだろうか？

「…？ アラン、何か良いことあったの？」

「ああ、うん。とても良いことがね。

それよりもエリー…あのさ…」

「うん？」

何があったのかは知らないけれど、それは後でも良いかと思いつつアランが何かを言おうとしているので待つ。

「そろそろ結婚、しないか」

「え、ええええええ！？」

Extra 03. とある魔女嫁の活動く村人は怒っていますく

こんにちは、私はマリー・ルクツリア。

愛する夫と共につい十数日前まで半ば引退状態の冒険者だった魔導士よ。

それが妹が私と旦那アルスの所に来た辺りから、事態が超展開だわ。

うん、正直ドン引き。

私とアルスの故郷、ルクツーを襲撃したのがキキスミに住む領主の私兵である事が正式に判明した。

何で正式にかと言うと、この度正式に『反逆者』の烙印を領主から村全体に押されてしまったからだ。

更に、何時の間にか私とアルスが首謀者という情報まで出回っている。

どこから漏れたのよ、私たちの情報。

そして何故私たちが首謀者？

わけがわからない。

これじゃあグダグダに話をにがらせてみんなの戦意がなくなった所で解散とか出来ないじゃないの。

まあいいわ、こうなってしまうえば私に出来る事と言えば逃げるか戦うか。

今更交渉でどうにかならないだろう……領主も領主の息子も。

と言うか、どうにかなるという可能性があればそれも選択肢に加わっていただろうし。

でも、それはない。

領主の息子は愚行を繰り返し、そして最悪の愚行まで犯した。

反逆者改め、反乱軍のメンバーは怒れる村人×150（そのうち戦闘員60、非戦闘員90）と狂える最凶の魔女。

そして最近流されっぱなしの魔導士である私と楽天家な天才剣士で私の最愛の夫であるアルスだ。

「これではどうにか出来る筈がないわよ…」

思わず執務机にぐだーっとへたり込んでしまう。

領主の軍は常時300の訓練された私兵がおり、戦時ともなれば傭兵も雇うし冒険者にも依頼が行くので最低で600近い兵力になるだろう。というかなる。

如何にお母さんが最凶で、私とアルスが冒険者として名を上げているからと言っても、これだけの敵を相手に戦えるはずもない。

いや、戦えるけど私達だけで殲滅してしまつては意味が無いのだ。

だって、自分達だけで勝って今以上に名が売れでもしたら私の目標である『アルスとのゆっくりライフ』が実現できないじゃない！…

…まあ、反乱軍の副団長で実質指揮執つてる人間がもうゆっくり暮らせるとは思ってもいないけどね。

私とアルスは彼らが理性を失った暴徒にならないよう舵を切るのが役目だ。

母さん？ いやあの人には任せたら、怒りのままに突撃し、後に残るのは一人の最凶の魔女と死山血河と化した荒野だけじゃない？

「と言っても初っ端から参ったわね、これは」

幾らうちの母さんと言う鬼札が居ても、補給物資の類は正直どうにもなら無い。

主に生活雑貨の類のことだ。

食料は森の中なので何とか見つけれられない事もない。

武器とかは母さんの魔法で『練成』出来るので問題ないらしい。

ただ、武器防具は練成できても何故かそれ以外は練成できないらしく、微妙に不便だ。

あ、誰かが慌しくこっちにやってきている。

「副長！盗賊が襲撃を仕掛けてきました！

その数120！！」

「っ！！防衛戦闘準備！迎撃を行うわッ！

前衛攻撃部隊及び防御部隊を出撃させて待機！！

後衛陣地防御部隊は弓を持つ様に伝令！！」

私は一介の魔導師のはずなのに、何故かこんな指揮官の真似事をする破目になっていた。

って言うかアルス、団長は貴方なんだから指揮はあなたがとっ……たら戦線はグダグダね、間違いなく。

さて、先ず此処で私達の陣地に付いて説明が必要だろう。

私達の陣地はルクツーから程近いフェチャシュの森に少し入った場所に森を切り開いて、開いた土地に極光の魔女ことウチの母さんことアイリ・ウェアドの『鍊成』という魔法によって大地を頑強で背の高い石堀と砦を作り上げた。

正直色々とずるいと思ったけど、この魔法のお陰で村のみんなが避難する場所を作れたのだから文句は言わない。

この陣地は守りが堅く攻め落とすのが難しいように作られている。と、いうのも私とアルスが過去に依頼で攻め落とした一番落とし辛かった砦を模倣したものなのだ、此処は。

ここにいるのが極少数を除いてほぼ9割が普通の村人だ。

基本的に農業や商業、ものづくりに従事してた人々が殆どだ。

そんな人たちにいきなり戦えといって武器を持たせても、幾ら怒っ

てがむしやらに切りかかったって敢え無く傭兵部隊に迎撃されるのがオチだ。

と、言うか実際嘗ての自分はそういう風にやっていた事もある。

そこで私達は……というか私はみんなに戦う為には先ずは戦い方を知れと力説したのだ。

そりゃウチの一家みたいに魔導師一家（父さんだけ獵師だったが）なら問題はない。

だけど普通の人は基本的に剣の振り方も、ましてや戦場の空気も生き物を殺す感覚も知らない。

いきなり萎縮されて潰走する様になったらオシマイだ。

と、言うわけでそれなりに戦闘の機会があるフェチャシュの森に潜伏し、部隊の戦闘能力を底上げしつつ来るべき日に備えていたのだ。

そして、訓練と魔物相手の戦闘を続けある程度実力が付いてきたので部隊分けが行われる。

剣と盾を持ち槍を背負う前衛攻撃部隊40人、指揮はアルスが行っている。

大盾を持ち弓矢を背負う、前衛防御部隊20人、指揮は母さんが行っている。

そして弓と火矢を持って陣地から支援攻撃を行い、陣地の防衛を行う後方陣地防御部隊非戦闘員全員は私が指揮を執っている。

本当なら私と母さんのポジションは交換した方がいいのだけど、母さんには実の所マトモな戦闘の経験はないらしい。

あるのは一方的な魔法攻撃による蹂躪のみだとか。

それなら前に出てもらって指揮を執って貰う方が良いつてなモンである。

まあ、この場合指揮をとるというよりもみんなの士気を上げて貰うと言った方が良いか。

「みんなおまたせ。状況は？」

私が辿り着いた先は砦の塀の上にある物見櫓兼矢倉の上だ。
この矢倉は塀を介して繋がっており、行き来は非常に楽になっている。

勿論、此処に相手が上ってきた時の対策はしてある：けどそれはまたの機会があれば説明しよう。

「敵盗賊団は前方から来てるわよ！」

マリーちゃん、どうすんだい！？」

私の問いに答えたのはルクツーに住んでいた頃に近所に住んでいたベルお婆さんだった。

「訓練どおりに何時もの場所を越えて攻め込んで来たら先ずは矢で相手の勢いを殺すわ。その後は母さんとアルス達にお任せね。」

そうそう、目の前のだけとは限らないから矢倉の全てに人員を直ぐに戦える状態で配置、人選はベルお婆さんに任せるわ」

「それじゃあ他の矢倉に向かう人はあたしが選んでおくから、あんたは確りとみんなを勇気付けておくれよ！」

「任せてよ」

それから程なくして盗賊団がこちらの攻撃射程に入り込んできた。

「一斉射撃！撃て！！」

私が愛用の長杖を振り下ろすのと同時に全員が火矢を盗賊団に向かって撃つ。

そして私自身も。

この射撃の目的は相手に命中させるより、相手の動きを牽制して動

きづらくさせるための攻撃だ。

矢は相手の中央よりも相手の周囲にばら撒かれ、良い感じに動きを鈍らせる事に成功した。

「情熱の炎よ、汝の炎で我が敵を焼き尽くせ！レイジングファイア！」

そして私の魔法で回り込もうとしている盗賊たちの道を塞ぐ様に火柱をいくつも発生させる。

その直後、狙っていたかのようなタイミングでよく通る、透き通るような声で詠唱が響き渡った。

『極光よ集え、我が前に束となりて大地をも穿つ力となれ！』

オーロラ・バスター！！』

前衛防御部隊が相手を矢で足止めし。私の火柱で迂回路を塞いだ所に母さんのごん太の光の塊である極光魔法で敵本体を薙ぎ払い、半数近くを殺している。

極光魔法は虹色の光を収束して攻撃する閃光と熱の魔法であり、結論から言うところかなり強力だったりするのだ。

そして極光の光に焼かれた盗賊達は一瞬で蒸発、その周囲は衝撃波で爆発を起こしてしまう。

燃える、ではなく蒸発。

つまり跡形も残らないし焼かれた地面はガラス化しているほどだ。

なるほど、過去の悪名に偽り無しとも言える威力だ。

……母さんがあんなトンでもない魔導師なのに、何で自分はそこそこ……中堅より上程度の実力なのか。

……私、母さんの敵じゃなくてよかった、本当に。

まあ、それはともかくとして。

コレにより盗賊団は既に浮き足立って逃げ出そうとしている。
そしてその隙を逃す筈もなかった。

『野郎ども！敵の本体は総崩れだ！！』

追撃を仕掛ける！容赦はするな！！』

前衛攻撃部隊、突撃ー！！！！』

アルスが前衛攻撃部隊に発破を掛けて突撃を仕掛ける。

『おおおおおおおお！！！！』

『前衛防衛部隊！弓を持って散らばって逃げようとする賊を討ちなさい！』

一人も逃がさない、そういう意思を母さんの指示から感じる。

確かに一人も逃がさない、と言うのは賛成だ。

準備期間中である今の内にもっと多く、もっと質の良い敵が来て貰っては困るのだ。

『ブオブオオオオオ』

誰かが吹いたのか、というか何時の間に用意したのか誰かが角笛を吹いていた。

それが前衛部隊の士気を更に上げていく。

「あの角笛、誰が用意したの？」

「ああ、あれはアタシの甥っ子の遺品だよ。

吹いているのはアタシの弟さね」

独り言のつもりで呟いた言葉にベルおばさんが答えた。

「弟っていうと……そっか、ゼンおじさんのお子さんか」

私が村を離れていた間にやはり色々なことがあったんだなと理解する。

ゼンおじさんは私が村に居た頃は独身だった筈だからその後の話だと。

そしてそれはこの間の襲撃によって蹂躪されてしまった事も。

「……ふう」

私は実質この団体の参謀だ。

感情に動かされてはいけない。

みんなの為の最善、それを選ばなければ。

それから暫くしない内に、前衛攻撃部隊の手によって盗賊団は殲滅できた。

村人達は、其々に色濃い疲労を表情に出している。

私と母さんとアルスは会議室の一室に集まって反省会をしている。

「みんなの様子はどうだった、アルス？」

「前衛部隊の大半がへばってるな。みんな実際の戦闘、特に『殺人』がよほど堪えてるようだ。

まあ普通はそうだよな」

アルスはみんなが『殺人』に抵抗がある事に関して少し安心した様に言う。

何の忌避感も持たないよりは全然マシだけど、逆に忌避感が強過ぎる戦意喪失心身衰弱などという事になったら目も当てられない。

「母さんの方は？」

「こちらは特に問題無しね。弓に専念すれば特に問題ないし、そもそも弓や魔法を使えば殺人の感触は少ないものね。

私自身も久し振りだからつい手加減も出来ずに跡形もなく消してしまっただけど……まあ良いわね」

いや、良くないわよ。

確かに埋葬の手間が省けるけど、奴等の持ってた装備とか道具とかを剥ぎ取ればそれなりにお金になったはずなんだから。

とか思ってしまうのは冒険者時代に追剥の追剥や盗賊狩りをしていた賜物かもしれない。

そんなことよりも、みんなの精神面に気を向けたほうが良いか。

「アルス、みんなに宴を開くと告げて。

お題目は……そうね、初勝利記念って所かしら。

母さんは後方部隊のみんなに伝達よろしく。

出来ればお料理とかそっちの方面にも加わって欲しいわ」

「了解、いつてくるよ」

「わかったわ、マリーはどうするの？」

「私は必要になりそうなものと各方面に出す手紙を用意しておくわ」

そういえば、エリーたちに一度も連絡を取ってなかったわね……。

直接手紙を送るのは流石に拙いから……誰かをギルドに送ってヴァンかピュコアのどちらかに手紙を渡してもらうようにしようかしら？
そうすれば二人に手紙はキッチンと渡るでしょうし。

それに、エリーのことを任せたりヨウ君は聞く限りではアルスに匹敵する……あるいはそれ以上の剣士の可能性がある。

彼にも何とか助力を願おう。きっとそれがいい。

まあ、勧誘に失敗してもたぶんエリーと一緒にくるぐらいはしてくれるだろう、きっと。

一番最悪なのは、エリーが相手側に人質に取られる事なのだし。

私はそれだけ考えると羽ペンを手にとって早速手紙をしたためる事にした。

Extra 04. とある死者の遣り残し／死者と生者のお茶会／（前書き）

前回から結構間が空いているのに短くなってしまいました。
待っていてくれた人にはごめんなさい。

色々と首を傾げる所があるでしょうが、割とわざとです。

Extra 04. とある死者の遣り残し／死者と生者のお茶会／

<Side Alain

うたた寝をしていた時の様な微妙に眠く、だけど直ぐに起きれそうな気だるい感覚。

ボクは……なにをしていたんだっけ？

そうだ、エリー……。

エリー……。

『ハイハイ、エリーの事を気にするのも良いが俺の事を忘れてもらっちゃ困るぜ？』

目の前から声がした、目の前？

ボクは横になっていたんじゃないや……。

『ここは俺の精神世界だよ、だから上も下も無いし右も左も無い。ここはそういう場所だよ、アラン・ルクツリア』

誰？

『そうさな、先ずはキッチンと起きろ。脳味噌……はお前のはもう無いが、キッチンと頭を働かせろ話はそれからだ』

良く分からないけど、分かったよ。

『素直だな。ウチのひねた弟よりも素直だ。アルスが羨ましくなるな、少しだけ』

目を開けるとそこには見慣れぬ衣装を着た、兄さんにそっくりな人が居た。

兄さんとの違いは髪の毛と目の色だろう。

顔や背丈、それに表情や雰囲気は兄さんに良く似てる。

だけど、彼が兄さんとは別人である、というのがボクには何故だか良くわかった。

『さて、俺のことは誰だか分かるかな？』

いえ、全然まったく……どこかでお会いしましたか？

『一応、な。とはいえ一方的に俺がアランを知っているだけとも言える』

それじゃあ分かるはずありませんよ。

それより改めて聞くんですけど、ここはどこです？

『さっきも言ったけど、俺の精神世界だよ』

何でボクはそんなところに？

『それは決まっている、お前が勝手に俺の中に住み着いたからだ』

え？

『自覚はなしか、まあ仕方ないとすつか』

彼はそう呟くと、急に浮遊感がボクを襲う。

うわっ!?

その後にしりもちを付いてしまう。

『つと、わりいな。立ち話もなんだったから椅子とテーブル、それに飲み物を用意させてもらったぞ』

え? ええ!?

なにをどうやったの!?

『言っただろう、ここは俺の精神世界だ。』

俺の精神……心の中なんだから俺の思うがままにできるんだよ』

彼がそういうと、真っ白な世界は次第に色づき、世界はどこかの酒場のような場所になった。

『酒場じゃなくて、喫茶店だ。まあ知らないかもしれねーけど。』

それよりも、さっさと席について用意した茶でも飲め、落ち着くぞ?』

あ、はい。戴きます。

椅子に座り、何時の間にか用意されていた貴族達が使いそうな豪華な茶器に入れられたお茶をご馳走になる。

このお茶……すごい!家で飲むのとは大違いのおいしさだ!もしかして、この人って貴族なのか!?

『別に豪華って程でもない。そこいらで1000円もしない程度の少し見栄えの良いティーカップだ。』

茶の方は100円ショップの安モン。そして俺はどこにでも居る

一般人だ。

最近是一般人の枠からはみ出しつつある感じだが』

良く分からないが、彼にとっては安いものなのだと言うことは理解できた。

本当に一般人の人なんですか？

だって、よく見たらその服だって凄く綺麗だし。

『これはスーツっていつてな、働く人々の半数ぐらい……が日常的に着ている服だ。多分。

ちなみにこれが綺麗なのは当然だ、俺の幼馴染が選んでくれた、俺に良く似合う一張羅だからな』

とても誇らしそうに彼は言う。

『さて、それではアラン・ルクツリア。君は今、外……ああ、つまりこの精神世界の外がどうなっているか、理解しているか？』

いえ、どうなってるんですか？

時々、エリーと一緒に暮らしている夢を見た様な気はするんですが、それはなんだかボクだけどボクじゃなくて……。

『それが正解だ。お前だけとお前じゃない、つまり俺の見た外の光景をお前が見ているに過ぎない。

そして、お前の影響力は日増しに強くなり、遂には俺と言う存在を侵食し乗っ取ろうとしている。

自覚の有無は、見る限りではないみたいだな』

どういうことなんです？

正直わけが分かりませんよ。

『俺だって良く知らない。強いて言うならこういうのの専門家の筈のピュコアさんかも少し説明があつて然るべきの筈なんだがなあ……』

ピュコアさんってだれです？

『お前の兄貴の元冒険仲間の僧侶……だよな、うん。で、ギルドの職員だ』

その人がえっと……。

『俺に取り憑いたお前をどうにかするために協力して貰った、そして今に至る。』

ちなみに、お前が目覚める大分前に俺は目覚めて、お前が目覚めるまでの間ずっと色々とやってるからこういう風に余裕を持ってお前と相對することが出来る。

なにせ、お前をどうにかする方法がもう理解できているからな』

あの取り憑いたとかどういふことですか？

まるで

まるでボクが死んだみたいな言い方じゃ。

『死んだよ、そりゃもうザツクリとオークの剣でぶった切られて』

え？

彼は驚くボクに対してその時の情景を周囲の空間を弄って彼が見た

ものをボクに見せる。

切り裂かれてあっけなく絶命したボク。

呆然として心を壊してしまったエリー。

そして彼が数多の魔物を剣一本で難無く引き裂く彼視点での光景。

『お前がここにいるのは、まあ間違いなくあの後助けに入った俺に取り憑いたからだろう。』

俺自身、幽霊とか悪霊には耐性が無いみたいだからな』

彼はそういってお茶を飲む。

『うん、この安物チック味がいいな。』

下手に高いと肩肘張っちまって逆に飲み辛いし』

彼はそう言って笑う。

その笑顔はやはり兄に似ていた。

でも、コレもボクからすると凄く高そうなんだけど……。

『さて、アラン・ルクツリア。お前に幾つかの選択肢をくれてやる』

選択肢？

どういうことですか？

『ああ、正直な、俺はお前に俺の体に乗っ取られるのは気に食わない。』

俺の体は誰が何を言おうと俺のものだ。俺が両親から授かり、生まれてからずっと使い続けてきた体だからな。

誰かに勝手に使われるのは我慢ならないんだよ。それに、俺の心

に干渉されるのな』

彼は睨み付ける様に……違う、本当に睨んでいるんだ。
怒りと殺気を伴って。

ボクはその事実以身震いしてしまう。
同時に悟る、この人は本当ならいつでもボクを”消す”ことが出来るのだと。

『だが、お前に対しては同情する要素があることも認識している。
それに……お前は俺の生き別れの弟に良く似てるからな、だから
特別サービスだ』

彼はそう言ってから改めて真剣な表情でボクを見た。

『選択肢は俺が揭示する以外にもあるかもしれないから良く考えろ
よ。』

選択肢1。今、この場で俺に消される

この選択肢は俺にとって非常に都合が良い物だ。目の上のタンコ
ブが消えてくれるんだからな』

彼は非常に冷たい目で僕を見ている。

その視線にボクは思わず腰が引けてしまう。

『選択肢2。逆に俺を消してお前がこの体の主になる。

この選択肢はお前にとって非常に都合が良い物だ、何せ失った肉
体を再び得ることができるのだからな。

しかし、不可能だと言うことを知っておけ』

彼の言葉が終わると同時に強烈な抗いがたい圧迫感がボクを襲い、
ピクリとも身動きができなくなる。

視線すらも自分の意思では動かせない。

そうか、ここは彼の世界。つまりココに限っては彼の存在は神と同義なのか。

『選択肢3。現状維持で俺の心の中に住む傍観者に徹する。』

ただしこちらは今までと違って俺の精神への干渉はさせないし、俺の体に乗っ取ることもさせるつもりは無いぞ』

その言葉と共に彼はニヤニヤとボクを見る。

彼は待っている。ボクの答えを。

ボクは……。

『しかし答えを聞く気は無い。お前にはやって貰わなきゃならん事があるからなあっ！』

フウーハハハハー！』

ボクが答え様とした瞬間に彼が突然そう言って笑い出し、ボクの目の前は真っ白になった。

ついでに言えば、今までとキャラがぜんぜん違う、とも思った。

そして気が付くとボクは夢の中で見た……いや、彼の視界を通してみたギルドの椅子にもたれかかっていた。

『ようやくお目覚めか、暢気なもんだ』

「っ!？」

僕は思わず頭に響いた声に驚いてしまう。

『俺だよ俺。その肉体の本来の主、リヨウ・イスルギだ。

良く考えた結果、とりあえずお前には俺の体を貸しといてやる。

俺じゃエリーの相手をしててもストレスが溜まってしょうがないだけだしな。

とりあえず、貸し出し期間はお前かエリーが死ぬまでだ』

「死ぬまで?それってかなり長いんじゃない」

『別に構わん。殆ど眉唾物だが、俺はどうも不老不死らしいからな。だから、テキトーに幸せでも目指して見せろ』

なんとも都合の良い話だけど……。

『あと、お前の行動が気に食わなくなった時は無理やり取り返してお前は消すから、そのつもりで居ろよ』

「……ありがとう、リヨウ」

『気にすんな、どうせこっちも実験がてらだ。あのガセネタがどこまで信頼できるかの、な』

ガセネタが何を示すかわからなかったが、何か確信を抱いてそれを語っているとボクには思えた。

『あ、そういやお前がエリーを抱いて子供作ったらそいつは間接的に俺の子供って事になるな』

「な、なんでさ!？」

『あのな、俺の体で俺の種だろうが。そうとしか言いようがねえよ』

アランはそこまで言われてようやく納得したようだった。

つまるところ、やっぱりどうあがいても入れ物が違うのだと言う事実をだ。

そして、ボクは同時に彼に逆らえず、抗えず、流されるしかないのだろうかと思ってしまう。

『まあ気にすんな。少なくともお前が死ぬかエリーが死ぬか、俺がお前を否定するまでは体を自由に使わせてやるんだからよ』

今のボクには、彼のこの言葉に従う以外、選択肢など考えられないのだから。

彼の言葉のどこかに裏があるのではないかと思いながら。

6. 焼き焦がすは愛の炎／ボクだって（前書き）

今回、めっちゃくちや難産でした。

気付いたら二ヶ月放置状態とかマジでダメダメッすね。

一応頑張っ書いては消してを繰り返していたとだけ主張します！

6. 焼き焦がすは愛の炎／ボクだって

< Side Alain + RYOU

エリーからの返事は結局「今はまだ、待って欲しい」という言葉だった。

その言葉で冷や水を浴びる思いだったが同時に納得がいった。

正直なところ、焦っていたといえるのかもしれない。

こうしてエリーと一緒に居ると、嘗てと今の差を感じてしまう。

だから、焦ったのだろう。

エリーを手放したくないから。エリーを独占したいから。

だけど、少し落ち着けば分かることだ。

彼女も兄さん達や父さん、おばさん、村のみんなの事が気がかりなのだろう。

『どちらにせよ、焦り過ぎだバカ。もう少し雰囲気作ってから言うべきだったな』

ボクの体の大家はそう言ってヤレヤレと呟く。

「ごめん、エリー。ちょっと焦りすぎたな……」

先ずはみんなの安否を確認、それともう少し余裕ができてから。そうしてから決めよう」

そう言うと、エリーは嬉しそうなでも少し困ったような表情を向けてきた。

『やれやれ、自分の体越しに他人のラブコメ鑑賞って言うのはある意味拷問だな。寧ろコメディだけにしてくれた方がこちらの精神には優しい』

はいはい、リヨウは黙ってて。

『やれやれ、宿主に対して冷たい奴だ』

リヨウはそれだけ言っていると沈黙した。

「とりあえず、今日はもうお互い疲れてるし……そろそろ休もうか」
「え、でもまだ夕食も食べて……」

そういわれてボクはようやく今がどれぐらいの時間なのか悟った。
余り意識していなかったせいもあって気づけなかったな。

「そうだったな……じゃあ今日ぐらいは任せてよ。大丈夫、エリーよりも上手にやってみせるさ」
「本当に大丈夫かしら？」

自信満々に言うボクにエリーはからかう様に尋ねる。

「大丈夫大丈夫！アイリおばさんに色々簡単な料理は教えてもらってたんだよ、コレでも」
『なあんとなく、不安だなあ……本当に大丈夫なのか？』

その辺りは大丈夫。父さんや母さんにみっちり相手してもらったからね。

……それに、剣を持って振り回すよりも料理をしてる方が案外気が

楽なんだよね。

そう思いながら厨房で調理を始める。

『ああ、そういうの聞いたことあるな。……そう、ウチの弟も同じようなことを言ってたな。アイツの場合はものづくり全般だな。とにかく何かを作るのが好きって奴だった。勉強とか運動は苦手でも、小手先の作業をしている時は誰よりも楽しそうだったな』

きつと、ボクと弟さんは気が合うね。

何時か会ってみたいよ。

『縁があれば会うこともできるだろう。無ければ俺もお前も残りの人生で一度も会うことはできねえだろうけど』

素直に会いたって言えば良いのに。

『アイツが弟じゃなくて妹だったら心配するけどな。まあアイツはアイツでかなりしぶとい。なにがあっても大丈夫だ』

信頼しているんだねえ。

あ、塩をもう一掴み入れるかな。

『ほう、炒め物か。……俺は鍋物ぐらいしか作れないから勉強になるな』

へえ、リヨウの住んでいた国の鍋料理かあ……興味あるなあ。

『まあ、気が向いたら教えてやるよ』

期待してる。

それから程なくして調理が終わり、エリーを起こしにいった。

疲れていたのかぐったりとベッドに寝そべっているエリーを見て、
労う気持ちもあったがそれよりも何時の間にか見違えるほど色気を
かもし出すようになったエリーにドキリとした。

『…と、いう訳だな？』

うわっ、何だよ急に变なことを言って!？

『ふふん、茶化されるぐらい慣れておけ、いい加減な。』

この先俺の体を使い続けるなら、事と次第によっては俺はいやで
もお前とエリーがまぐわう所をみなきゃならんのだしな』

みないで欲しいなあ。

『それこそ無茶を言うな。俺の体を通してみている光景は全て俺の
目に届く。今の状態だって正確にはお前が俺の体を利用しているだ
けの状態に過ぎない』

「だから例えば、こんな風に一瞬で体を取り返すこともワケないっ
て事だ」

うわっ、いつのまに!？

って、今度はまた感触が戻って!？

本当に何時の間に!？!

『今の間に、だ。良いか、念押しで言っておくが俺がこの体の主。
お前は唯単におこぼれを預かっているに過ぎない。』

この体は元々俺のものだから当然だな。一応、戦闘になった時は

必要に応じて入れ替わってやるが、期待するなよ。

あくまでお前に貸してやるのは入れ替わりも含めた『もう一度死ぬまでの間』もしくは『エリーが死ぬまで』か『俺が飽きるまで』だ』

これはキチンと目が覚めてから何度も念押しされた彼の言葉。

これがボクと君が取り交わした絶対のルール。わかってるよ、大丈夫。

『わかって入るのなら良い。後、焦らずに情報収集はしろよ……キナ臭い事が起こりすぎてるからな、この辺りは』

リヨウの忠告にボクはドキリとした。

キナ臭い事といえば、キクスミ領主の息子である、あの野郎の馬鹿をやっていると言う噂。

それにルクツーが滅び、僅かな生き残りが反乱軍となって森に集まっているという話。

「ボクにどうしろって言うんだ」

『好きにしろ。だが、簡単に死んでくれるなよ？折角お前に機会を与えてやるんだからな』

「で、アランは何時になったら私を起こしてくれるのかなあ？」

ボクとリヨウが話していると、何時の間にか目覚めていたエリーが、ボクを胡乱な目でみていた。

その目はとても起こっている時の目だった。こう、目に光がないって言うか深遠の闇（地獄の様な物）に通ずる何かがありそうなそんな感じの。

「ええっ!? エリー起きてたの!?!」

『はっはっは! 早速笑わせてくれるな、お前は! 数分前からエリーはお前の様子を伺っていたぞ』

ええい、黙っててよ!

『あ、後さっき言ってたことなんだけど半分ぐらい嘘だ。実はこの状態でも眠ることは出来るから情事とかは寝て待っていてやるよ』

「あ、あはは。エリー、ごめんごめん。ちょっと考え事してたら色々、ね。

それよりご飯できたよ。一緒に食べよ」

「う、うん。直ぐに行くわ!」

エリーはそのあと、美味しい美味しいと言ってボクの用意したご飯を平らげていく。

ボクも自分の作ったご飯を食べて今日のはそれなりだな、と頷いて納得する。

「でも驚いたわ。アラン何時の間にこんなに上手に?」

「村に居た頃、エリーがアイリおばさんに色々教わるからって引き籠もってた時期があったじゃないか。あの頃だね。

丁度あの時期に旅の料理人を名乗る冒険者の人たちが来てて基礎を教えてもらったんだ。後は前も言っただけどアイリさんやうちの家から。

教えてもらったと言っても調理法のメモを貰っただけだけだね」

『しかしアイリおばさん……ねえ。愛理おばさんと同じ名前……俺の知ってるおばさん、なわけないか』

何か言った、リョウ?

『いや、独り言だ。気にしないでくれ』

リヨウはリヨウで考え事をしているようなので、ボクの方もしばしココに至るまでの回想をすることにした。

と、言ってもそれほど時間が経ったわけでもないから思い返すことは少ない。

ギルドで出会った人との会話を思い返すぐらいだ。

「ようやく起きたわね、気分はどうかしら？」

「え？ ええっと……」

目を覚ましたボクに、何時からかは知らないが目の前に居た女性が問いかける。

『いや、ずっと目の前に居たから。お前が気づかなかっただけだよ』

「とりあえず、アランとの接触にや成功しましたよ。あの野郎、寝ぼけたまま俺を乗っ取ろうとしてやがったからキチンと首に縄つけて主導権は握ってやりました」

「あら、もしかして才能あるのかしら？ 普通は精神世界で相手と対峙した場合は大半の人が相手を消滅させるか、あるいは相手が強力過ぎて逆に消滅させられるかなのだけど」

って、何で勝手に口が動いてるのさ！？

『俺が動かしてるに決まってるだろう』

「とりあえず、エリーへの対処を含めて面倒事が残っているから等分の間は共生する事にしました。」

ただし、俺の気が向く限りですがね」

「存外に寛大な処置なのね。アルスとマリーの友人としては嬉しいけれども」

「まさか、面倒ごとをやらせる丁稚が居るのならやらせようと言う魂胆に他なりません。」

多少の面倒は宿代だと思って諦めさせますしね」

リョウが少し悪っぽく笑ってみせるとピュコアさんはどうやら苦笑している。

似合わないんだろうか？

「とりあえず、貴方が決めたことならば私からは口を挟むつもりはありません。」

なにがあっても、どうなっても残りは自己責任です、いいですね？」

「当然」

リョウは何を今更と心で呟いてる。

「あ、そうだ。お願いしたいことがあります。ヴァンさんと……エリーと組んでるジェンとリエラへの事情の説明を簡単に。よろしいですか？」

特にジェンとリエラは俺の事も知っているからごたごたするのは面倒だし」

「……しようがないですね。簡単な説明ぐらいは此方でおきます。」

詳しい説明は自分でしてくださいね」

「わかりました。それじゃあ後はアランに変わります。アランは俺の行動の端々をみていた様なので詳しい説明は不要ですが、何か言いたい事があれば好きにどうぞ」

その言葉と共にボクに体の感触、支配権が移ってきた。
思わず手を見つめてにぎにぎとやってしまう。

「ええっと……はじめまして、で良いのかしら？」

「あ、はい！はじめまして、アラン・ルクツリアです！」

その後は当たり障りのない雑談や趣味の話し、普段何をしているかなどを話すボクとピュコアさん。

ところで、その露出の多い衣装……本当に神官の服なんですか？とは思っても聞かなかったボクはある意味偉いと思う。

『ふうむ、改めてアランの人となりが良くわかるなあ』

なにがさ。

『気づいてるかは知らないけど、お前さんピュコアさんにどういう人物かって思いつき根掘り葉掘り調べられてたんだぞ、今。』

まあ、たぶん向こうも「余り頭は良くないし、強くもない上に少し不器用で人に騙され易そうな天然系の善人な青年」ぐらいに思ってたんじゃないか？」

凄く酷い事を言うね、君も。

『気にするな、今更だ』

その後、ヴァンさんを紹介されて熱烈に戦いに出るように説得されたりもしたけど、その辺りは思い出したくないかな。
あの人、暑苦しくて思い出すのが本当にいやだから。

思い返してみると、なんとなくボクの扱いって酷くないか？
食事を食べながらリヨウに語りかける。

『いや、普通に余り良くないぞ？まあ、死者に対しての態度を考えればこれでも良い方じゃないか。

普通だったら既に消滅してるんだし。良かったな、エリーが心を壊すほどお前が好きで。

ああいう風に厄介な子じゃなかったらお前の事なんてさっさと消してるところだったよ、多分。

つか、語りかけるな、俺は眠いんだ』

良いじゃないか、どうせ精神だけなんだから大して疲れないだろう？

『人間の三大欲求には食欲、性欲、睡眠欲の3つがある。前者二つは当分使う気が無いから俺は最後の一つを満喫するんだ！邪魔をするな！』

リヨウはそれきり話しかけてもいびきしか返さなくなってしまう。
本当に寝てしまったんだろうか……？

まあいいか、あんまり邪魔するのも悪いし。

その後、エリーと話をして、途中で兄さんとマリーさんのモノと思われる少し高価そうなお酒をエリーがもってきて飲む事になった。
その後の展開は良く覚えてないんだよね。

何か良い事があった気もするし、リヨウさんに酒に弱すぎとかへたくそと罵倒された気もする。

翌朝氣がついたらエリーと一緒にベッドで寝てて、なんとなく足腰がだるい感じだったぐらい。

改めてエリーを見るとやっぱり本当に美少女だなんて思うよ。

すっきりとした顔たちで艶やかで触り心地のいい茶色の髪の毛、スタイルも良い。本人としては身長だけはボクと同じぐらいほしかったらしいけど。ボクとしてはエリーに勝れる部分って全然ないから身長だけが唯一のとりえなんだよね。

この体はリョウの体だけど。

『と、いうかだな。俺の体を使ってあの程度の酒で理性失うなよ馬鹿』

ありゃ、起きてたのリョウ？

『起きてたの、じゃねえよ……。俺の体であそこまでヘタレられてたらもう泣きたくなるね。』

お前はあれだ、もう少し精神的な強さを磨け。我慢強さと置き換えてもいい。お前がヘタレたことばかりすると、俺もヘタレだと思われるんだからな！』

ヘタレヘタレって、酷いなあ。

ボクだってやるときはやるんだよ？

『酒が入ってなきゃやれない様な奴はヘタレで十分だ』

朝食を探り、ギルドに赴くとヴァンさん、ピュコアさん、ジェン、リエラの4人がボクとエリー、そしてリヨウを待っていた。もつとも、ボクからすれば直接会ったことがあるのはピュコアさん一人だけになる。

彼らがボクをどう扱うか、それが非常に気になるところだ。エリーがリエラとピュコアさんに連れられて席をはずした。

「で、今のリヨウは本当にアランなんだっけ？」

ジェンの問いにボクが答えようとする寸前で肉体の支配権がリヨウに移った。

「アランに貸している、という状態だ。俺の意思ですぐに俺が出てこられる」

「ありゃま、リヨウはどこか普通とは思ってたけど本当に人とは違うな」

「まったくだな。おいリヨウ。本当に何の問題もないのか？」

ジェンが驚いたように言い、ヴァンさんが心配するように問いかける。

「問題があるようならアランを既に消滅させているよ」

当たり前のように言っただけのリヨウのその言葉に、ボクはもちろんヴァンさんとジェンは空恐ろしい物を見るようにリヨウを見る。……もつとも、ボクの場合はリヨウの中にいるからリヨウを見るというのはおかしい表現なのだけだ。

「そして、損よりも得があると判断したからこそ許しているのさ。」

「どうも俺の手持ちの時間は有限ではなく無限に近いらしい」

人間が無限の時を生きる？それじゃまるで神様かなにかみたいだ。

その後しばらく黙弁っていたけど、いい加減邪魔になってしまったのかヴァンさんに急かされてボク達は一つのクエストを引き受けることになる。

「最近、どうも魔物や魔族の繁殖速度が洒落にならない速度になっているようだ。」

魔物はともかく、魔族までってのは少々おかしいんだがな……。

で、出来る限り都市周辺の魔物は狩っておこうという話しになったわけだ。

なにせ都市の外周には農耕地域なんかもあるからな、生活に関わるんだよ」

ということらしい。

他にも聞いてみると、街道の一部でも襲われているので治安と流通にも影響が出ている状態であり、悪化すれば経済的な打撃は免れないとも教えてくれた。

具体的にどうなるかとリヨウに尋ねてみると「農家の人間に被害が出たり、食い物やその他商品全般の値段が上がったり、治安が悪化したりと悪い事だらけだ」と大雑把に説明された。

「けど、正直驚きだよなあ。魔族が大繁殖してるって話。あいつ等ってそう簡単に増えるモンなのか？」

「さあ？詳しいことはアタイには分からないけど、オーク辺りはイヤな噂もあるから何とも言えないわねえ」

「それって、もしかして……アレ？」

「そうアレ。見つかったら即殲滅しないとあたし等拙いから覚悟し

なさいよ、エリー」

「うん」

ハテ？そもそも魔物ってそこまで簡単に増えただろうか？魔物は確かに多産ではあるけれど、基本的に季節的なものがある。要は春頃が発情期で4ヶ月ぐらいでいっぱい生まれてるといった具合だ。魔族も同様だが、やつらは多少インターバルが短く季節ごとに更に人間より相当早いが成体になるのに4年〜5年かかる。

この辺りはルクツでガードをしてた時代に知識や情報だけはきちんと仕入れていたつもりなだけど……もしかして知らないだけで奴等の繁殖速度や成長速度が速くなる何かがあるんだろうか？？リヨウはこの辺りの知識は無いだろう、ならジェン達に聞いてみるかな。

「アレってなにさ？」

と、尋ねたらジェンが肩をすくめる。

「アラン、アレはアレに決まってるだろう。野暮だぞ野暮」

アレ？アレと言われるからには既に一般に浸透している事柄なんだろうか？しかも野暮とか言って嫌な顔してるから余り良いことじゃない？

釈然としないなあ……一体何なんだろうか？けど、この場で聞くのは諦めた方が良いか？

「うん？？まあ、そうなら良いや」

釈然としないながらも諦めると、リエラとエリーの会話が耳に入っ

「うーん、それにしても本当に彼がアランなのねえ」

「え？今更何を言ってるのよりエラ」

「えーっと……まあ大した事じゃないわ。彼が天然ってだけよ」

て、天然？少し酷くないか？

（いや、割とあってるだろ）

「割とあってるわね」

ひ、酷いよ。エリーもリョウ二人して酷いなあ。

（とはいえ、アランは魔物や魔族に関する雑多な知識を持ってるよ
うだな。そこは感心したぞ）

そりゃ、腕っ節が弱いのに知識も知恵も無いんじゃガードには採用
されないよ。

元々ボクは腕っ節よりも雑学とか薬草学の方が自身あるんだけどな
あ……。

（それならいっそそちらを仕事にすりゃ良いのにどうして？）

あー……簡単な話なんだけど、家柄ってヤツかな。

ウチの家系って腕っ節と度胸と知恵の3つを尊ぶ家柄なんだ。

勿論家の人間、祖先も合わせて全員がそうだった訳じゃない。

例えばボクの父さんは腕っ節はそこそこで度胸と村の発展を維持す
るぐらいの知恵は持ってた。

兄さんは腕っ節がすごく強い上に度胸もとんでもないし運氣も強か
った。

で、ボクなんだけど腕っ節は……まあ、残念で度胸もそんなあると

思っていない。少し自慢できるのは他の人よりも雑多に色々知ってるかな？って感じ。

特に魔物や魔族の生態とか薬草学とかね。冒険者の人達から聞いて色々覚えてたつもりだよ。

まあ、そんな訳で父さんが『頭でっかちだと良くない！』って言うてガードに就けた訳。腕っ節は相変わらずダメだけど、度胸は入る前よりはマシになったかな？きっと、多分……。

さて、そんな風に姦しく進んでいくと、魔物の群れを発見した。ヴォルフ4匹とオーク5匹だ。皆にしてみれば馴染みの編成とも言える相手らしい。

「俺とアランはある程度前に出て二人に敵が行かないようにする。二人はいつもどおり弓と魔法で確実にしとめてくれ。」

「いけるな、アラン？」
「うん、だいじょうぶ。リョウも手伝ってくれるし問題ないよ」
（言っておくが、ギリギリまでは自力で何とかしろよ）

言われる前でもないよ、ボクだってリョウに頼りつきりになるつもりは無いんだ！
決意を胸に剣を握り両手で構える。

やっぱりコレ、ちょっと重いな。

そう思いながらジェンと並ぶと早速リョウからアドバイスがでた。

（アラン、無理に前に出ずにジェンとの距離をうまく維持しながら戦え！

前に出過ぎたら孤立して袋叩きにされるぞ！）

「俺とアランでヴォルフの相手をする！二人は遅れてやってくるオークの相手だ！」

「わかったわ！」

ジェンの言葉にリエラが答える。

ボクとジェンは早速駆け出してきたヴォルフ相手に剣を、槍を振るう。

「ち、相変わらず素早くて面倒だ」

そう言いながらジェンが槍を払うとヴォルフを切り付け同時に複数まとめて弾き飛ばした。

「避けるのは簡単だけど、剣が当たらない！」

何度かヴォルフの突撃を回避したけれど、剣で切り付けようと払おうと突こうと、どうしても相手に剣が当たらない。

（見切りが甘い！ついでに踏み込みが2歩分足りてない！！踏み込みの足りないチキンな攻撃など当たったとしても大した攻撃にゃならんぞ！！）

「くそっ！！」

ボクが悪態をつきつつも防戦している一方で、後方から光の矢と矢が数本飛んでいった。

「負けてられねえな！でりやでりやでりゃー！」

ジェンの言葉から察するに、どうやらそれでオークに攻撃したよう

だった。

更に勢いづいて突進しヴォルフ達を槍の連続突きで攻撃するジェン。ボクも負けていられない！

「ボ、ボクだってやってみせるっ!!」

一度ボクから距離をとったヴォルフへ今度は自分から距離を詰める。今度こそあたれ！とにかくあたれ！

そう思いながら剣を振り回す。

「せっ…ってえええええ!!?」

剣は確かに相手に当たった。

だけど、相手を斬ることは出来ず、棍棒がぶつかったかのような鈍い感触だけだ。

（ふうむ、ライトニングは俺しか使えない剣だけど、俺と同じ肉体なら使えるかと思ったがそうでもないのか。

この場合、俺自身が前に出ないと使えないのか? いや、アランは一応持てているから使えるはず。…つまり扱いきれて居ないと言うことか?）

「ああああ…くそ、そういうこと!?!」

リョウの分析に思わず苦い顔をして即座に後退する。

そこにジェンのフォローが入った。

「アラン、その剣本当に剣かよ!?!」

「一応剣だよ!でも、今のボクじゃ扱いきれてない!!」

改めて剣を握りなおす。これじゃ剣と言うより棍棒として使ったほ

うがマシじゃないのか?!

「ほら、二人とも!口より手を動かす!!」

リエラの放った矢がジェンの死角に迫っていたヴォルフを掠り、けん制した。

「ちっ、的が小さいからあて辛いわ」

「なら、こうしましょう!光の礫よ、雨の如く降り注ぎて我が敵を射抜け!フォトン・レイン!」

エリーの放った雨あられともいった感じの光の飛礫が甲高い音を立てて無数の魔力弾が弾幕となってヴォルフとオークに襲い掛かる。しかし幾らなんでも威力まで今まで道理と言うわけではないようでコレだけで相手をノックダウンすることは出来ないようだ。

この隙にジェンが近づいていたヴォルフ二匹のうち一匹を槍で一突きにし、ボクは聖剣と言う名の棍棒でもう一匹のヴォルフの頭を粉砕した。

しかし、その間にエリーの弾幕を掻い潜ってオークが二体、ジェンとアランに襲い掛かる。

(オークが来てる!体勢を整えろ!あいつらお前達を矢と魔法の盾にするつもりだぞ!)

「っ!!」

リョウの警告のお陰でオークの攻撃を余裕を持って回避することに成功した。

「二人を盾にした?!」

「小賢しいことするわね! 弓で射ようにも曲射って結構難しいのよ?!」

後衛二人の忌々しそうな愚痴が聞こえるけど、こっちだって同じ気分だ!

「ちっ、少しの間耐えろよアラン! 二人はその他の敵を!」

ジェンの指示が飛び、エリーとリエラはボク達二人を包囲しようとしていたヴォルフとオークを攻撃、けん制する。
くそ、こんなんでも勝てるのか!?

「ほら、そら、おらっ!」

ジェンが槍で相手の攻撃を裁きつつ反撃をしていたが、ボクは逆に攻撃に回れなくなっていた。

「うくっ!? 重い!? ……!」

そう、重いのだ、剣が……先ほどよりもだ。

おかげで段々と動きが遅くなっていくのと焦り始めている事を自覚してしまう。

オークが剣を振り下ろし、それを何とか剣で防ぐけど、それに腕が痺れてこれ以上は、もう……!

(もう見ていられん!! じれった過ぎる!)

「チッ、使いこなせないのなら武器に拘るんじゃないってんだ!」

突然体思うように動かせなくなり、けれどボクの体は剣を押し、

引いて、流した上で相手がよろけた所で腕を掴み、足を引っ掛けてうまく転ばせていた。

（こっからは俺がやる！お前は見学して使い方を少しでも覚えやがれ！）

「うそっ！？オークってかなり重いのよ！それをあんな簡単に転ばせちゃうの！？」

「小外刈りって言う技だ……よ！」

リヨウは言うなり剣でオークの首をスパッと刎ねる。

先ほどと違って剣はすんなりと相手の肉どころか骨さえも断ち切って見せた。

「んじゃこっちも行くぜえっ！」

こっちが無事なのを見て、ジェンも全力でオークに挑んでいく。

ジェンは気合と共に先ほどよりもさらに切れのある三段突きをオークへと放ち、胴体に3回槍を突き刺す。

その時、向こうにいたエリーと目が合い、リヨウが口を開く。

「エリー！！」

「うん！」

リヨウが声をかけるとエリーが何時もよりも気合の入った声で詠唱を行っている。

「燃え盛るは情熱の炎、焼き焦がすは愛の炎、愛と情熱の炎の魔神クエストリアよ何時の炎の抱擁を以って我が敵を包み……！」

詠唱が終わると人型の炎が顕れ、オークに急接近し抱きついた。
オークの哀れな悲鳴が聞こえる。

（うげえ、あれドンだけえぐいんだよ……焼ける臭いが酷いぞ）

「爆ぜろ！」

エリーの言葉と共に炎は爆ぜ、オークとともに碎け散った。そう
文字通り爆ぜたのだ。

爆炎と肉片をぶちまけて。

これ、下手しなくても近くで撃たれたら前衛も巻き込まれるよね？

「な、なんつー凶悪な魔法だよ……オレ、ぜってーにエリーは敵に
回したくないわ」

「あ、あたしもね」

「ぼ、ボクも…」

思わず3人揃ってエリーから距離をとってしまう。

お陰でエリーが納得いかなそうに少しすねてしまったけど。

とりあえずコレで依頼は終了でボク達は後はかえるだけ。後はのんびりと休めるはずだったのだ、ユディツアがボク達の知らない所で
何者かによって襲撃さえされていなければ……。

< Side Ellie

アランに『そろそろ結婚しないか』と改めて言われて私の頭は真っ白になっていた。

まともにものを考えられない。嬉しすぎて真っ白になるのはコレで何回目だろうか？

「村にいた頃にした婚約、まだ有効だよな？ 約束した結婚の日までもう後少し。

本当なら村のみんなと祝いたかったけれど、今の状態じゃ残念だけど呼べないね」

アランは何時もの少し困ったような笑みを浮かべていう。

「村を慌てて出てきたのはもう、大体一月も前になってしまふのね。色々あり過ぎてそんなに時が過ぎていたなんて気がつけなかったわ」

私も思わず苦笑してしまう。だって本当に色々あったんだモノ。森を抜ける為に怖い思いをしたり、冒険者になったり、私が本格的に魔導師として活動を始めたり。

今まで怖くて倒せる気がまったくしなかった魔物を倒せるようになっていたり。

そして何より、アランと二人だけで、誰の邪魔も無く暮らすようになった事が。

「本当は兄さんやマリーさんを待ちたいけど、二人もいつ帰るか判らない。

だから、本格的なのはそれまで取っておくとして、神様の前で宣誓だけと思うんだ。どうだろう？」

アランは私の内心の独白に気づく事無くそう言った。

もしかしたらアランは気づいているかもしれない。
でも、だからこそ私は今彼と結ばれる事を躊躇した。

「ごめんなさい、アラン。今はまだ、待って欲しいの」

気が付けば、私はそう言っていた。

実はアランには黙っていたのだけれど、私が今まで危険な戦闘系の依頼に拘っていたのは一つ理由があった。

それは何時か結婚式を盛大に行う為にお金を貯めたかったからだ。

「ごめん、エリー。ちょっと焦りすぎたな……」。

先ずはみんなの安否を確認、それともう少し余裕ができてから。
そうしてからゆっくりと決めようエリー」

ああ、やっぱりアランは優しい人。

自分の事よりも私を、みんなのことを気にかけている。

私は自分の事とアランのことしか考えられない。

その浅ましさを実感してしまう。

「とりあえず、今日はもうお互い疲れてるし……そろそろ休もうか」

「え、でもまだ夕食も食べて……」

私がそういうと、アランは「あ」っと言ってから。

「そうだったな……じゃあ今日ぐらいは任せてよ。大丈夫、エリーよりも上手にやってみせるさ」

「本当に大丈夫かしら？」

「大丈夫大丈夫！アイリおばさんに色々簡単な料理は教えてもらってたんだよ、コレでも」

その日の料理は私の味付けとは異なって、少し味付けの濃い料理だった。

だけど、アランの好きな味がまた一つ理解できてうれしく思えた。

そしてその日の晩、初めてアランと一緒にベッドで寝て……結ばれる事ができた。

声が漏れて隣家のおばさん達に噂されないか、少しだけ心配。

翌日の朝。

私とアランは久しぶりに一緒にギルドカウンターまでいった。

「お、アランにエリーじゃねえか！二人揃ってと言うのは珍しいな！」

「そうね……ってエリー貴方なんだかフラ付いてるけど大丈夫なの？」

その言葉に何事もなかったかを装うつもりだったけど体がピクリと反応してしまう。

「あはは、エリーは今日、少しばかり調子が悪いみたいなんだ。今日はエリーの代わりに出るから、よろしく頼むよ」

「アラン、それじゃあ私が休みたいじゃない。私もキッチンといくわよ。アランが幾ら強くなったからって、まだ危なっかしいもの」

そうよ、アランはどこか抜けてるから私が頑張らなくちゃいけないんだ。

なんだか最近はしっかりしているように見えたから安心してたけど、でも、まだまだ気を抜けないわ。

「あはは……酷いなあエリー」

「しゃーねえだろうな。お前、実戦に出るの久しぶりだろう？」

「まあ、そうなるんだけどさ。大丈夫、足は引っ張らないよ。今のボクには頼れる相棒が居るからね」

「ははは、頼りにさせてもらうぜ！」

ジェンとアランはやっぱり仲がいい。

男同士だとやっぱり通じ合う物ってあるのかしら？

「どうおもう、リエラ」

「さあ？ それよりも！どうせだから昨晚あったこと、お姉さんに話してみたらどうかしら？」

何があったのかは足元見ればわかるわよ、お姉さんも経験者だし
♪」

「え、ええ！？あうう……勘弁して頂戴、リエラ」

「だぁーめ！」

なんてやり取りをしていると、カウンターの向こうで呆れた表情をしたヴァンさんが。

「おまえら、ガキじゃないんだから早く依頼を受けるなりよそに良くなりしろって」

と、催促した。

結局その日の依頼は先日と同じ都市外周部の魔物退治と相成った。昨日受けて達成したばかりの依頼が再び出ているのをおかしいと思ったジェンがヴァンさんに質問していたが。

「最近、どうも魔物や魔族の繁殖速度が洒落にならない速度になっ

ているようだ。

魔物はともかく、魔族までってのは少々おかしいんだが……。で、出来る限り都市周辺の魔物は狩っておこうという話になったわけだ。

なにせ都市の外周には農耕地域なんかもあるからな、生活に関わるんだよ」

ということらしい。

「けど、正直驚きだよなあ。魔族が大繁殖してるって話。

あいつ等ってそう簡単に増えるモンなのか？」

「さあ？詳しいことはアタイには分からないけど、オーク辺りはイヤな噂もあるから何とも言えないわねえ」

「それって、もしかして……アレ？」

「そうアレ。見つかったら即殲滅しないとあたし等拙いから覚悟しなさいよ、エリー」

「うん」

アレとはオークの雄が人間の女性を捕らえて……まあアレするのだ。考えるだけでもおぞましい。

「アレってなにさ？」

と、思っていたらアランは連想ができなかったのか尋ねて来た。やれやれとジェンが肩をすくめる。

本当に分かってないのかしら？

「アラン、アレはアレに決まってるだろう。野暮だぞ野暮」

「うん？？まあ、そうなら良いや」

アランは釈然としない、という表情を顔全体に露にしつつもそう言
って尋ねる事はしなかった。

多分、アランはそういう話を聞く機会が無かったのだろうけど…あ
まりにもアレだからという気も起きないわ。

「うーん、それにしても本当に彼がアランなのねえ」

「え？今更何を言ってるのよりエラ」

「えーっと……まあ大した事じゃないわ。彼が天然ってだけよ」

アランが天然かあ……。

「割とあってるわね」

そんな風に姦しく進んでいくと、魔物の群れを発見した。

ヴォルフ4匹とオーク5匹だ。お馴染みの編成とも言える相手だ。

「俺とアランはある程度前に出て二人に敵が行かないようにする。

二人はいつもどおり弓と魔法で確実にしとめてくれ。

いけるな、アラン？」

「うん、だいじょうぶ。リヨウも手伝ってくれるし問題ないよ」

そういつてアランは剣を掲げる。

リヨウって剣の名前かしら……？

でも、この間はライトニングとか呼んでたような？

それはともかく、早く攻撃しなければ！

「俺とアランでヴォルフの相手をする！二人は遅れてやってくるオ
ークの相手だ！」

「わかったわ！」

ジェンの言葉にリエラが答える。

私は応える代わりに杖を構えて詠唱を始める。

「我が内に眠りし力の流れよ、我が前にありしモノを貫く槍となれ！
フォトン・ランサー！！」

言葉とともに体の中にある何かが、魔力が動く。

其れは杖先に集まり光を放ち、そしてオークへと私の狙い道理に飛翔していく！

今回使ったのは使い勝手の良いフォトンランサーだ。

速射性と貫通性に長けた扱いやすい攻撃魔法の一つである。

撃ちだした光の槍は狙いが甘かったせいakaオークの胴体ではなく右腕に直撃した。

「グルオアアアア！！」

「こっちだってやってやるわ！」

リエラが速射で別のオークを射抜く。

こちらはエリーとの錬度の違いもあり胴体、頭と的確に急所を射抜いた。

距離がそこそ近いと言うのもあったけど、そこまで弓の腕が良いというのは凄まじい気がする。

「負けてられねえな！でりやでりやでりやー！」

その言葉とともに突進しヴォルフ達を槍の連続突きで攻撃するジェン。

「ボ、ボクだってやってみせるっ!!」

アランがそう言って剣を下段に構えて走り出すが、どこか頼りない。

「せつ…ってえええええ!!」

アランの剣は確かに相手に当たった。

だけど、相手を斬ることは出来ず、棍棒がぶつかったかのような鈍い音だけだった。

「ああああ、くそ、そういうこと!」

アランは苦い顔をして即座に後退する。

そこをジェンが槍でフォローする。

「アラン、その剣本当に剣かよ!」

「一応剣だよ!でも、今のボクじゃ扱いきれてない!!」

どういうこと?でも、今はそれを気にしている場合じゃない。

「ほら、二人とも!口より手を動かす!!」

リエラの放った矢がジェンの死角に迫っていたヴォルフを掠り、けん制する。

「ちっ、的が小さいからあて辛いわ」

「なら、こうしましょう!光の礫よ、雨の如く降り注ぎて我が敵を射抜け!フォトン・レイン!」

フォトンランサーの溜めを弱くして速射性を強化した連続発動型

の魔法だ。

甲高い音を立てて無数の魔力弾が弾幕となってヴォルフとオークに襲い掛かる。

しかし幾らなんでも威力まで今まで道理と言うわけではない。大幅に威力が減衰し、射程も少し短くなっている。

しかし、その弾幕を掻い潜ってオークが二体、ジェンとアランに襲い掛かる。

同時に、私はこれ以上魔法が撃てない事に気が付く。魔力切れではなくて……。

「二人を盾にした?!」

「小賢しいことするわね!弓で射ようにも曲射って結構難しいのよ?!」

私は驚き、リエラは忌々しそうに愚痴る。

これで私とリエラの攻撃は封じられる事になった。

「ちっ、少しの間耐えろよアラン!二人はその他の敵を!」

ジェンの指示が飛び、私とリエラは二人を包囲しようとしていたヴォルフとオークを攻撃、けん制する。

「ほら、そら、おらっ!」

「うくっ!?重い!?……!」

まるで対照的な状態の前衛二人組み。

やっぱり、今日のアランは調子が……!?

「チッ、使いこなせないのなら武器に拘るんじゃないわねえってんだ!」

アランが突然強気になってオークの長剣を防いでいた剣を押し、引いて、流した上で相手がよろけた所で腕を掴み、足を引っ掛けてうまく転ばせる。

「うそっ！？オークってかなり重いのよ！それをあんな簡単に転ばせちゃうの！？」

「小外刈りって言う技だ……よ！」

アランは言うなり剣でオークの首を刎ねる。

先ほどと違って剣はすんなりと相手の肉どころか骨さえも断ち切って見せた。

「んじゃこつちも行くぜえっ！」

アランが無事なのを見て、憂いがなくなったジェンも全力でオークに挑めるようになった。

ジェンは気合と共に先ほどよりもさらに切れのある三段突きをオークへと放ち、胴体に3回槍を突き刺す。

その時、向こうにいたアランと目が合い、アランが口を開く。

「エリーー！！」

「うん！」

つまり、全力全開の一撃で敵を倒せばいいんだよね？わかっているよ、アランが言いたいことぐらい。だから見せてあげる、私の本当の、最大最強の一撃を！

「燃え盛るは情熱の炎、焼き焦がすは愛の炎、愛と情熱の炎の魔神クエストリアよ何時の炎の抱擁を以って我が敵を包み……！」

詠唱が終わると人型の炎が顕れ、オークに接近し抱きついた。
オークの悲鳴が聞こえる。

「爆ぜろ！」

私の言葉と共に炎は爆ぜ、オークともどもに碎け散った。

「な、なんつー凶悪な魔法だよ……オレ、ぜってーにエリーは敵に
回したくないわ」

「あ、あたしもね」

「ぼ、ボクも……」

あ、あれ？何でだろう……みんなさりげなく距離とってない？

一応依頼は達成したけど、なんでこうなるのー?!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5838i/>

俺の異世界日記／私が愛した幻影

2010年10月21日20時27分発行